

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 552 集

かくれざと
隠里Ⅷ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

2010

国土交通省東北地方整備局
三陸国道事務所
(財)岩手県文化振興事業団

隱里Ⅶ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に関連して平成20年度に発掘調査された隠里Ⅷ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査の結果、隠里Ⅷ遺跡からは縄文時代の陥し穴状遺構、奈良・平安時代にかけての竪穴住居が見つかり、該期の貴重な資料を追加することが出来ました。

今後、本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、宮古市教育委員会、宮古市広域行政組合をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成22年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田 牧 雄

例 言

- 1 本報告書は、岩手県宮古市大字松山第8地割地内に所在する隠里Ⅷ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本発掘調査は、三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
- 3 岩手県遺跡データベース登録の遺跡コードはLG43-2260、調査時の遺跡略号はKZⅧ-08である。
- 4 発掘調査面積は、9,000㎡である。
- 5 発掘調査の期間と担当者は、次のとおりである。
野外調査 平成20年4月15日～平成20年8月31日／丸山直美・鈴木博之
室内整理 平成20年11月1日～平成21年2月28日／丸山直美・鈴木博之
- 6 出土遺物の鑑定、保存処理は次の方々および機関に依頼した。
石質鑑定・・・・・・・・・・花崗岩研究所
木材分析鑑定(肉眼)・・・・岩手県木炭協会
鉄製品の保存処理・・・・岩手県立博物館
AMS年代測定・・・・・・・・株式会社加速器分析研究所
炭化種子同定・・・・・・・・古代の森研究舎
- 7 野外調査における安全防護柵の設置、基準点測量および航空写真撮影は次の機関に委託した。
安全防護柵設置 株式会社小山田組
基準点測量 株式会社北日本朝日航洋
航空写真撮影 東邦航空株式会社
- 8 野外調査・室内整理・報告書作成にあたり、次の機関からご指導・協力をいただいた。
国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、宮古市教育委員会、宮古地区行政組合、宮古地方森林組合、大坂建設株式会社
- 9 本書の執筆・編集・校正は丸山・鈴木が行い、文末にそれぞれ名前を記した。
- 10 本書では、国土地理院発行の次の地形図を使用した。
1/25,000 地形図 宮古
1/50,000 地形図 宮古
- 11 調査で得られた出土遺物および調査に係る諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 12 調査成果の一部については、現地公開資料および「平成20年度発掘調査報告書」(岩文振調報第546集)等において公表しているが、本書の記載内容と異なる場合は本書の記載内容が優先する。

目 次

I	調査に至る経過	
1	調査経過	1
II	立地と環境	
1	遺跡の位置と立地	3
2	歴史的環境	3
3	基本層序	7
III	調査方法	
1	野外調査	11
(1)	調査経過	11
(2)	発掘調査の方法	11
(3)	整理作業の方法	13
(4)	記載方法と凡例	13
IV	調査成果	
1	概要	15
2	検出遺構	15
3	出土遺物	33
V	分析・鑑定	
1	隠里Ⅷ遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	44
2	隠里Ⅷ遺跡より出土した種実（炭化種子同定）	47
VI	総括	53
	報告書抄録	71

図版目次

第1図	岩手県全図	1	第14図	3・4号竪穴住居	24
第2図	地形分類図	2	第15図	3・4号竪穴住居カマド	26
第3図	周辺の遺跡分布図	4	第16図	1・2号土坑	28
第4図	南谷部・北谷部基本層序	8	第17図	3～5号土坑	30
第5図	埋没沢断面	9	第18図	1号焼土遺構	31
第6図	グリッド、基準点、 トレンチ配置図	10	第19図	1号道路状遺構	32
第7図	遺構配置図	12	第20図	1号竪穴住居出土遺物(1)	35
第8図	1号炉跡	16	第21図	1号竪穴住居出土遺物(2)	36
第9図	1・2号陥し穴状遺構	17	第22図	2・3号竪穴住居出土遺物	37
第10図	3・4号陥し穴状遺構	18	第23図	4号竪穴住居出土遺物、 遺構外出土遺物(1)	38
第11図	5・6号陥し穴状遺構	20	第24図	遺構外出土遺物(2)	39
第12図	1号竪穴住居	22	第25図	遺構外出土遺物(3)	40
第13図	2号竪穴住居	23			

表目次

第1表	周辺遺跡一覧	6	第5表	鉄製品観察表	42
第2表	土師器・須恵器観察表	41	第6表	ガラス製品観察表	42
第3表	土製品観察表	42	第7表	縄文土器・弥生土器観察表	43
第4表	石器観察表	42			

写真図版目次

写真図版1	遺跡遠景・調査区全景(航空写真)	56	写真図版10	5号土坑、1号焼土遺構、 1号道路状遺構(1)	65
写真図版2	調査区現況、試掘	57	写真図版11	1号道路状遺構(2)、 北谷基本層序	66
写真図版3	1号炉跡、1～3号陥し穴状遺構	58	写真図版12	1号竪穴住居出土遺物	67
写真図版4	4～6号陥し穴状遺構、1号埋没沢	59	写真図版13	2～4号竪穴住居出土遺物	68
写真図版5	1号竪穴住居	60	写真図版14	遺構外出土遺物(1)	69
写真図版6	2号竪穴住居	61	写真図版15	遺構外出土遺物(2)	70
写真図版7	3号竪穴住居	62			
写真図版8	4号竪穴住居	63			
写真図版9	1～4号土坑	64			

I 調査に至る経過

1 調査経過

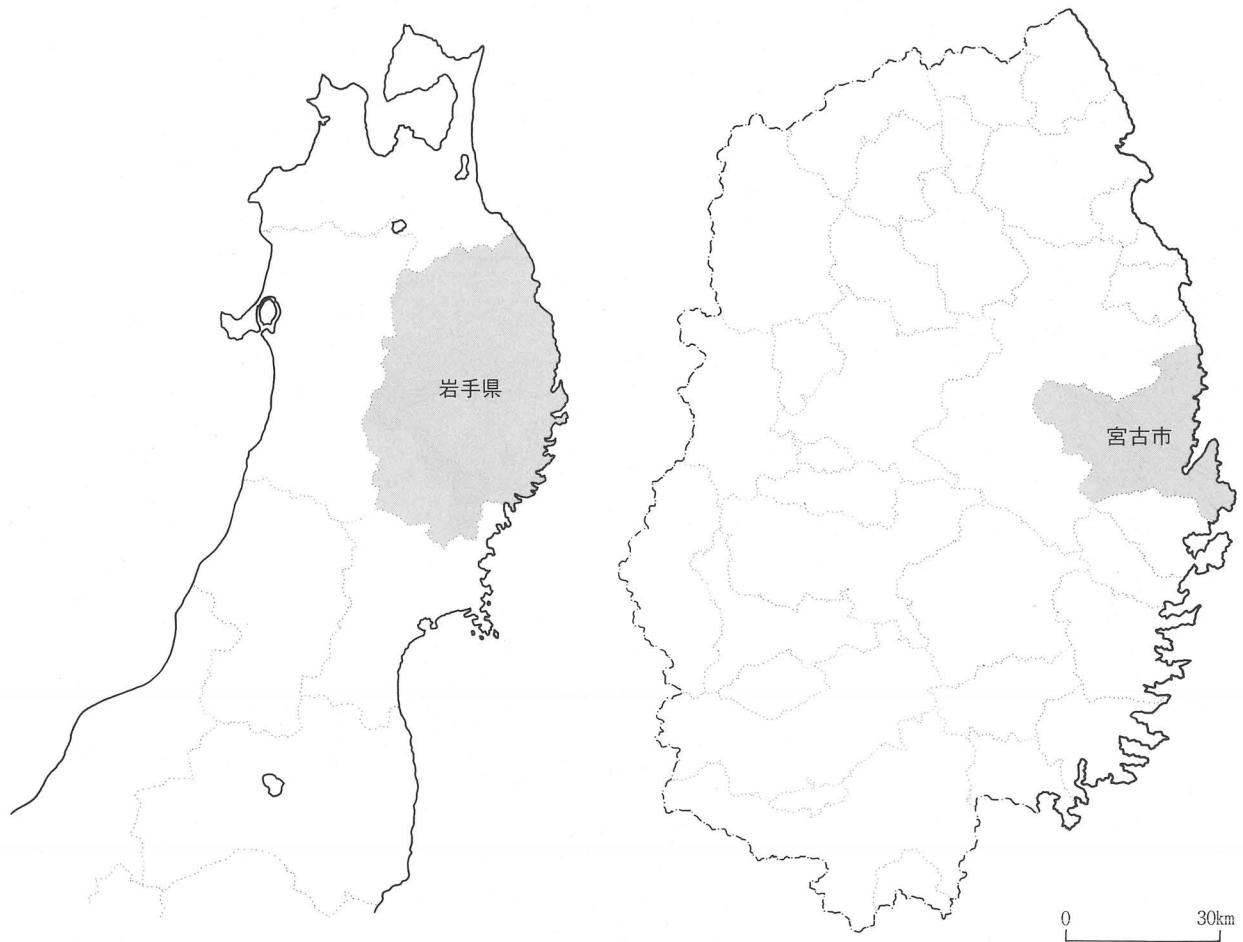
隠里Ⅷ遺跡は、一般国道45号宮古道路事業の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行に伴い、発掘調査を実施することとなったものである。

宮古道路事業は、宮古市内の国道45号の線形不良及び隘路箇所を解消し、増大する交通需要に対応するとともに、三陸沿岸地域への高速交通サービスの充実を図り、地域経済の発展、連携・交流の促進のために、平成15年度から事業化している。

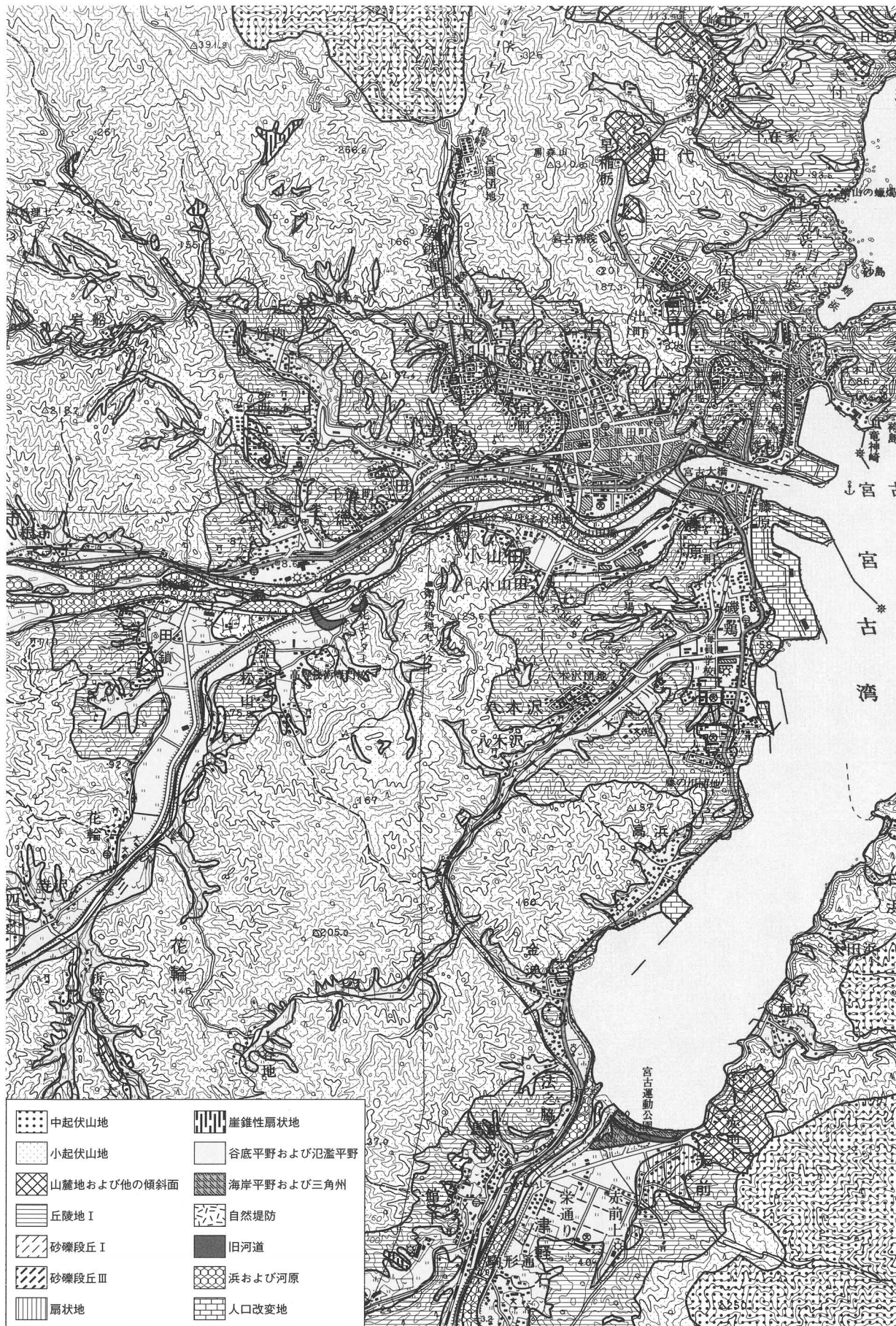
これに係わる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長に、埋蔵文化財包蔵地の確認依頼を行い、平成18年5月12日～11月21日にわたり試掘調査を行い、平成18年12月20日付け「教生第1284号」により、宮古道路建設事業に関連する包蔵地として回答がなされたものである。

その結果、本発掘調査が必要となったことから、岩手県教育委員会と三陸国道事務所が協議を行い、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに発掘調査を委託することとなったものである。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



第1図 岩手県全図



※ 遺跡位置は第3図参照 1:50,000

第2図 地形分類図

II 立地と環境

1 遺跡の位置と立地

隠里Ⅷ遺跡は宮古市大字松山第8地割地内に所在し、JR東日本山田線宮古駅の南西2.6km付近に位置する。調査区はこのうち東西方向へ樹枝状に延びる山地の尾根部とその間の谷部にかかる9,000㎡である。標高は尾根部の最高位で77m前後、谷部の最低位で41m前後を測る。調査前は山林で、遺跡を貫くように木材伐採作業及び搬出に与する簡易道路が造られていた。遺跡の中央部は北緯39度37分26秒、東経141度55分34秒付近にある。遺跡の東方および南東方には、谷を隔てて平成19年に発掘調査が行われた木戸井内Ⅳ遺跡、隠里Ⅲ遺跡がそれぞれ隣接している。

遺跡の所在する宮古市は岩手県の最東端に位置し、東側には三陸海岸を擁して太平洋を臨み、西側には早池峰山を最高峰とする山々が連なる、北上山地中部の東側縁辺部の一端をなしている。平成17年6月6日に行われた新設合併により、北側に隣接していた田老町、西側に隣接していた新里村が、それぞれ宮古市と合併し、これによって宮古市は、北と西を下閉伊郡岩泉町、南西を下閉伊郡川井村、南方を下閉伊郡山田町と境界を接することとなった（平成20年11月1日現在、市域面積696.82km²、推計人口57,578人）。宮古市周辺の海岸には、浄土ヶ浜をはじめとする三陸海岸の景勝地が数多く存在するが、その海岸線は宮古市付近を境に南部と北部とで様相を異にする。釜石市を中心とした南部は湾と岬が入り組んだリアス式海岸であるのに対し、北部は海岸段丘の発達した比較的出入りの少ない隆起性の海岸線となる。所々には、高さ100mを超える海蝕崖が続いている箇所も見られる。

宮古市を流れる河川は、盛岡市と川井村の境界にあたる区界峠付近に源を発する閉伊川、その支流の市街地を流れる近内川、長沢川、山口川、宮古湾に注ぐ津軽石川、本遺跡の南東側を流れる八木沢川がそれぞれの低地を形成している。地質的には東西を二分する津軽石川を境に様相が異なっており、西側は大半が中生代白亜紀前期の宮古花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母花崗閃緑岩～トータル岩で占められ、磁鉄鉱が含まれる。それに対し東側は、中生代白亜紀前期の大浦花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母アダメロ岩やデイサイト質火砕岩、泥岩などが堆積している。低地は、河川流域沿いの狭小な範囲に限定される傾向が見られる。標高100m以下の丘陵地はこの低地周辺や海岸に沿って見られ、閉伊川の北側においては板屋付近から東に山地と低地に囲まれるように帯状に延び、南側では長沢川との合流地点や磯鶏西側の低地と山地の間に分布する。山地は丘陵地の背後に広がるが、起伏量が比較的少ない標高300m以下の中起伏山地あるいは標高200m以下の小起伏山地である。

隠里Ⅷ遺跡は東流する閉伊川の右（南）岸に位置し、北流して閉伊川に注ぐ小規模な沢によって形成された谷底平野沿いの小起伏山地に立地する。

2 歴史的環境

遺跡の所在する宮古市には多くの遺跡が確認されている。本節では旧宮古市域を中心に確認されている遺跡の分布状況を示し、遺跡周辺における歴史的環境について時代毎に概観する。

縄文・弥生時代

当地域における人々の活動が考古学的に確認できるのは、現段階では縄文時代早期からとされ、菅ノ沢遺跡、小沢貝塚などが確認されている。縄文時代早期の土器が確認されている遺跡や散布地はそ



1:50,000

第3図 周辺の遺跡分布図

の他にも存在するが、現段階では総じて詳細な様相が把握できる状況にはない。縄文時代前期に入ると遺跡の数は増加傾向となり、中期ではさらにその数を増す。該期の遺跡としては宮古市指定史跡磯鶏蝦夷森貝塚や上村貝塚などが確認されている。両遺跡とも遺存状態良好な貝塚であり、特に人骨を始めとする有機質遺物に恵まれている。また、国指定史跡崎山貝塚は、縄文時代中期の集落や前期～中期の貝塚、遺物包含層などが確認されている。弥生時代では、上村貝塚において前期の集落が確認されており、金浜Ⅰ遺跡、木戸井内Ⅲ遺跡、隠里Ⅷ遺跡（報告遺跡）では、後期の土器が出土している。

奈良・平安時代

奈良時代の遺跡では、長根Ⅰ遺跡の群集墳が調査されている。この遺跡では、蕨手刀や直刀など鉄製武器類や和同開珎が出土している。県内における和同開珎の出土例は少なく、律令制下で下閉伊地域を治める有力者の墓域であると考えられる。平安時代の遺跡は前代に比べると増加傾向にある。特に、集落跡において鉄生産に関連する遺構や遺物が認められる例が多く、9世紀以降に当地域で鉄生産が本格的に始まったと考えられる。特に、地質上花崗岩地帯に分類される地域においては製鉄関連の遺跡が顕著である。宮古湾から西方1km地点の丘陵上に位置する島田Ⅱ遺跡は、岩手県内屈指の平安時代鉄生産関連遺跡であることが発掘調査により明らかになっている。特に製鉄、精錬、鍛錬の各工程を読み取ることができる遺構と工房跡など内容が充実している。このことは、当地域において製錬から鉄製品の加工までの一連の生産が、盛んに行われていたことを物語る例として重要である。このほか、平成19年度に発掘調査が行われた隠里Ⅲ遺跡では平安時代の竪穴住居4棟とともに、住居状遺構9棟（鍛冶工房含む）、炭窯2基、火葬関連施設1基などが発見され、このうち竪穴住居、火葬関連施設から、沿岸北部では初となる灰釉陶器片が出土している。

中世・近世

中世では、城館跡が多く確認・調査されている。これら中世の城館跡は、旧宮古市域において広範囲に点在し、それぞれ防御的施設を有し、おもに閉伊氏・一戸千徳氏などの氏族が関係しているとされている。遺跡の周辺域では、松山館、千徳城、田鎖館、花輪館、鱒沢館が確認されている。前代から引き続き、鉄生産に関連する遺構・遺物が認められる遺跡も多くあり、城館跡とセットで確認される例もある。近年、調査された山口館跡は、城館跡であるとともに鍛冶工房や製鉄関連遺構が検出されている。また、黒森町遺跡では、鉄鋳物師関連も確認されている。

地域的・歴史的特性

以上のように、隠里Ⅷ遺跡周辺には、縄文時代～中近世に至るまでの遺跡が数多く確認、調査されている。縄文時代においては、前期～後期の集落が多く、また沿岸地域という立地的特性から貝塚が多く確認されている。貝塚は有機質の遺物の残像状態が良好な場合が多く、貴重な情報を提供することが多い。したがって、縄文時代の海に関する生業や食生活を復元する有益な資料である。古代以降は鉄生産に関連する遺跡が多く確認されていることが特筆すべき事項である。これは花崗岩地帯に起因して、原料である砂鉄を多く産出する地域であるためであると考えられる。

3 基本層序

遺跡の所在する松山地区一帯には花崗閃緑岩基盤層が分布しており、地表に向かうにつれ、風化作用を受けている（マサ土）。この風化層はその度合いにより下層の岩塊層と上層の砂層に分けられる。調査区内では、尾根部・斜面部において表土（森林腐植土）以下の堆積は見られず、直下にマサ土層が露出する。このため遺構検出面が各時期において共通する。

第1表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	時代	種別	No	遺跡名	時代	種別
1	島田II	縄文・古代	集落跡・生産遺跡	42	松山大地田沢	古代	集落跡
2	島田I	平安	集落跡	43	隠里I	縄文・古代	集落跡
3	磯鷄中谷地	縄文・古代	集落跡	44	隠里II	縄文・古代	集落跡
4	八木沢古館	中世	城館跡	45	隠里III	縄文・古代	集落跡
5	磯鷄館山	縄文～近世	集落跡・城館跡・生産遺跡	46	隠里VIII	縄文・弥生・古代	集落跡
6	高根	縄文	土壙墓郡	47	磯鷄竹洞I	平安	集落跡
7	寒風	縄文	集落跡	48	藤原上町II	奈良	集落跡
8	菅ノ沢	縄文・古代	集落跡	49	光岸地	縄文	集落跡・貝塚
9	近内中村	縄文・弥生・古代	集落跡	50	小沢田	縄文・古代	貝塚
10	蜂ヶ沢I	縄文・古代	集落跡	51	早坂	縄文・弥生・古代	貝塚
11	近内白石I	古代以降	製鉄遺跡	52	上村貝塚	縄文～平安	集落跡・貝塚
12	近内大館	中世	城館跡	53	磯鷄蝦夷森貝塚	縄文・古代	貝塚
13	赤畑	縄文・近世	集落跡	54	仏沢II	縄文・平安	集落跡
14	山口駒込I	縄文・奈良	集落跡	55	花輪館	中世	城館跡
15	山口駒込II	古代以降	集落跡	56	下折壁I	中世	城館跡
16	狐崎	縄文・奈良・平安	集落跡	57	八木沢II	縄文・古代・中世	集落跡
17	山口館	縄文・古代・中世	城館跡・集落跡	58	八木沢III	古代以降	生産遺跡
18	拝殿峠	縄文	集落跡	59	八木沢新館	中世・近世	城館跡
19	黒森町I	近世	屋敷跡・鉄鋳物製作跡	60	鱒沢館	中世	城館跡
20	小沢貝塚	縄文	貝塚	61	八木沢駒込I	縄文・古代	集落跡・生産遺跡
21	佐原	縄文	集落跡	62	金浜館	中世	城館跡
22	平松I	縄文	集落跡	63	金浜I	縄文	散布地
23	熊野町	中世	番屋敷	64	金浜II	古代	集落跡
24	鎌ヶ崎館山貝塚	縄文～中世	貝塚・集落跡・城館跡	65	金浜III	縄文・古代	散布地
25	井戸ヶ洞	縄文	集落跡	66	金浜IV	縄文	散布地
26	田鎖館	中世	城館跡	67	金浜V	縄文	散布地
27	黒田館	中世	城館跡	68	金浜堤ヶ沢	古代以降	製鉄跡
28	下大谷地I	縄文・古代	集落跡・生産遺跡	69	馬越II	古代	集落跡
29	千徳城	奈良・平安・中世	城館跡・製鉄跡	70	山崎館	中世	城館跡
30	青猿I	縄文・平安	集落跡・製鉄跡	71	沼里	縄文・奈良	集落跡
31	青猿II	弥生・平安	集落跡	72	沼里館	中世	城館跡
32	長根I	弥生～中世	郡集墳	73	小堀内I	縄文・弥生・奈良	集落跡
33	泉町狐崎II	縄文・奈良・平安	集落跡	74	赤前III	縄文・平安	集落跡
34	鴨崎I	古代	集落跡	75	赤前IV・八枚田	縄文・平安	集落跡
35	笠間館	中世	城館跡	76	赤前館	中世	城館館
36	横山	古代	集落跡・貝塚	77	崎山貝塚	縄文	集落跡・貝塚
37	木戸井内II	古代以降	生産遺跡	78	八木沢駒込II	縄文・古代	集落跡
38	木戸井内III	弥生・古代以降	生産遺跡	79	八木沢野来	縄文・古代	集落跡・生産遺跡
39	木戸井内IV	縄文・古代・近世	集落跡・生産遺跡	80	賽の神	弥生・古代	生産遺跡
40	小山田館	中世	城館跡・製鉄関連遺跡	81	賽の神I	縄文・古代	生産遺跡
41	松山館	古代・中世	城館跡	82	賽の神II	縄文・古代	生産遺跡

調査区が広範囲にわたるため、層序決定に際しては数本のトレンチ断面より基本層序の確認を行っている。谷部では地点毎に堆積様相が異なるが、おおむね以下ようになる。

(谷部)

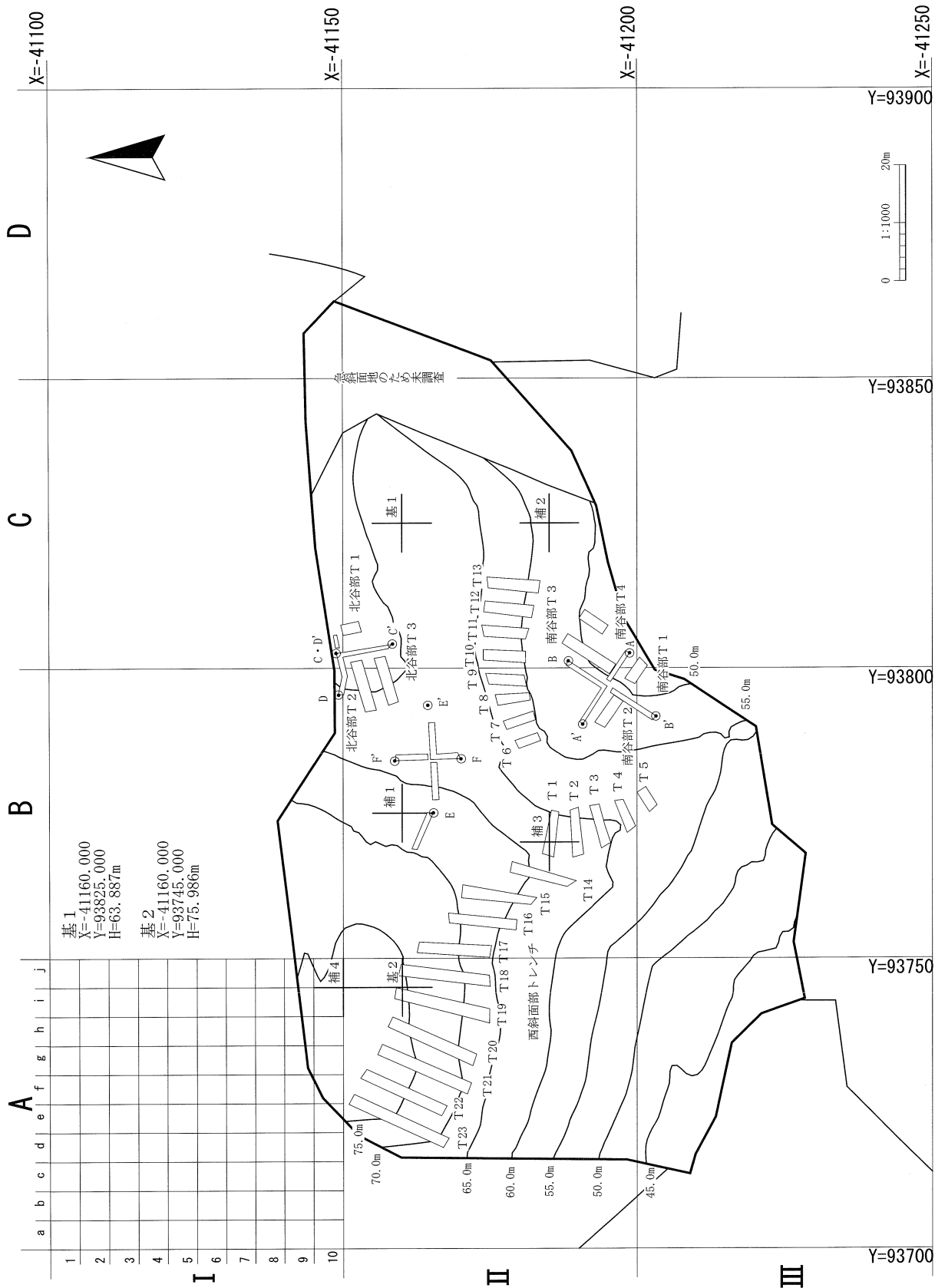
- I a層 10YR4/6 褐色シルト 粘性・しまり共弱 黄橙～灰白色風化花崗岩粒（以下、マサ土粒）
φ 1～10 mm全体に3%程度含む（盛土）
- I b層 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性弱・しまり中 マサ土粒φ 1～10mm全体に5%程度含む（表土）
- II層 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱・しまりやや強 マサ土粒φ 1～10mm全体に3%程度含む
炭化物粒1%未満
- III層 10YR2/3～3/1 黒褐色シルト 粘性弱・しまり中 マサ土粒φ 1～10mm全体に3%程度含む
（斜面崩落層）
- IV層 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや強・しまり中 マサ土粒φ 1～5 mm全体に1%程度含む（縄
文土器片を少量含む）
- V層 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中・しまりやや強 マサ土粒φ 1～5 mm全体に1%程度含む
（縄文土器片を少量含む）
- VI層 10YR3/3 暗褐色シルトと10YR4/6 褐色シルトとの混合土 粘性・しまり共やや強
- VII層 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共強
- VIII層 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性・しまり共強
- IX層 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱・しまり強（風化花崗岩層＝マサ土）

(尾根・斜面部)

- I b層 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱・しまり中 マサ土粒φ 1～10 mm全体に5%程度含む（表
土）
- IX層 10YR8/6～8/1 黄橙色～灰白色シルト 粘性弱・しまり強（風化花崗岩層＝マサ土）

引用・参考文献

- 岩手県企画開発室 1974 『土地分類基本調査 -宮古・鮎ヶ崎-』
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 『島田II遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第337集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『沢田I遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 『島田II遺跡第2～4次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006 『山口館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第485集
- 宮古市教育委員会 1986 『宮古市遺跡分布調査報告書4』宮古市埋蔵文化財調査報告書8
- 宮古市教育委員会 1986 『宮古市遺跡分布図』宮古市埋蔵文化財調査報告書9
- 宮古市教育委員会 1992 『金浜I遺跡・大付遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書30
- 宮古市教育委員会 1999 『千鷲IV遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書54
- 宮古市教育委員会 1999 『崎山貝塚』宮古市埋蔵文化財調査報告書55
- 宮古市教育委員会 2002 『山口館跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書57
- 宮古市教育委員会 2006 『崎山貝塚第20次調査・早稲栃II遺跡第7次調査』宮古市埋蔵文化財調査報告書66
- 宮古市教育委員会 2006 『木戸井内IV遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書68



第6図 グリッド、基準点、トレンチ配置図

Ⅲ 調査方法

1 野外調査

(1) 調査経過

4月14日 プレバブ設置

4月15日 資材搬入、調査開始。

重機搬入・稼働開始（バックホー 0.45 1台・キャリアダンプ 6 t 1台）。作業道整備等。

4月15日～17日 雑物撤去。

4月16日 単管防護柵資材運搬・設置。

調査区が複数の尾根、谷部にかかり、他社工区との隣接地帯である為、土砂や雑物の流出防止対策、作業員の転落防止、他社との相互安全工事にかかる対策を講ずる。

4月18日 AED講習会

4月21日 試掘開始。4月24日まで随時。

4月30日 人力による検出作業開始。6月2日まで随時。

5月1日 基準杭打設。精査開始。

5月21日 竖穴住居をはじめとする複数の遺構を確認、本格的な精査に着手。

6月17日 空撮実施。終了確認。

6月30日 調査終了。撤収。

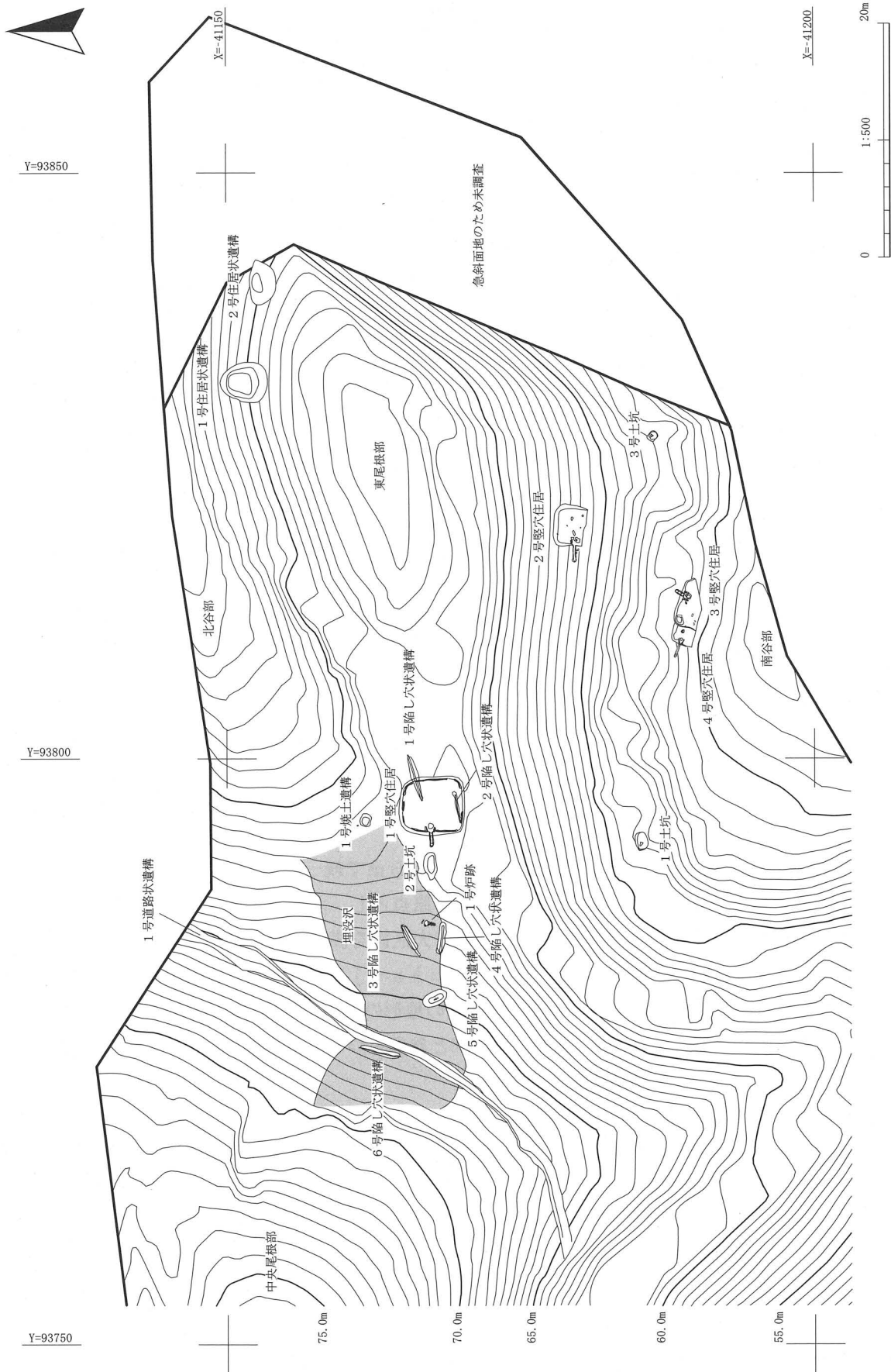
(2) 発掘調査の方法

①グリッド設定と調査区の名称

調査グリッドの幅は大グリッド 50 m、小グリッド 5 m で統一し、遺物の取り上げや遺構の平面的配置の把握に用いた。グリッドはすべて北西隅を原点とし、北から南にⅠ～Ⅲのローマ数字と、西から東に昇順する大文字アルファベット A～D で大区画を表し、更に北から南に向かって昇順する算用数字 1～10 と、西から東に小文字アルファベット a～j で小グリッドを表した。図版中の座標値、標高値はすべて世界測地系で示している。遺跡内の地形の表現については、山地の峰線上の範囲を「尾根部」、尾根部に挟まれた低地帯を「谷部」、尾根部と谷部をつなぐ斜面地を「斜面部」と呼称した。個々のエリアの名称は第 6・7 図に示している。

②安全対策・雑物撤去・粗掘・遺構検出

遺跡の調査前現況は山林であった。調査開始前には宮古地方森林組合によって調査範囲の伐採作業が行われ、調査開始直後は伐採にて生じた雑物（伐採木の幹および枝葉）の撤去作業から行った。また、調査区内の斜度によっては転落防止措置を図り、残土の流出が懸念される箇所については安全防護柵、土嚢列を設置するなどして随時安全を確保するよう努めた。なお、安全防護柵の搬入および設置は株式会社小山田組に業務を委託した。雑物撤去終了後は順次、表土の厚さや遺構の有無、遺物の出土状況を確認する目的で調査区全体に人力による試掘トレンチを入れ、その後、試掘結果に応じて尾根部・斜面部はマサ土層まで、谷部においてはⅢ層上面まで重機を使用して表土除去を



第7図 遺構配置図

行った。表土除去は尾根上から斜面に向け行い、重機が進入不可能な急斜面などは安全ベルトを着用した上で、適宜人力によるトレンチ調査を行った。表土除去後は、尾根上から順次人力による遺構検出作業を行った。検出した遺構の掘削は、竪穴住居については4分法、その他の遺構については規模・形状に則して4分法、2分法など適宜選択して行った。また、遺構埋土の掘削に際しては層位毎に遺物を取り上げるよう努めた。さらに、竪穴住居の床面、カマド燃焼部・煙道埋土については土壌を採取し、現地にて土壌洗浄・炭化種子の選別・抽出作業を行った。

遺構平面図は、おもに光波測量機器、電子平板を用いて実測及び作図した。なお、遺構平面図は遺構の種類、規模などを考慮し20分の1、10分の1などの縮尺で作成した。遺構断面図は、平面図と同一縮尺での作成を原則とした。

遺構の写真撮影は、35mmモノクロ・35mmカラーリバーサル・6×7cm判モノクロによる撮影を基本とし、補助的にデジタルカメラによる撮影も合わせて行った。撮影に際しては、当センター所定撮影カードの記入および写し込みを行い、撮影写真の整理に活用した。

(3) 整理作業の方法

発掘調査終了後の整理作業は、当センター内にて行った。発掘調査時に作成し、点検を経た遺構等の断面実測図は、必要に応じて第2原図や合成図を作成し、スキャナーで取り込みデジタルデータ化した。遺構平面図は電子平板で作成し、これと断面のデジタルデータを合成して図版を作成した。作成したデジタル図版はEPS形式で保管している。遺構等の写真はそれぞれアルバムにより整理を行った。本書に掲載する遺構写真は選択した後、紙焼きし写真図版用に版下を作成した。

遺物の洗浄および注記を経た遺物は、接合作業を行い、必要なものは石膏による復元も行った。本書に掲載する遺物を選択し、実測作業と写真撮影を行った。選択基準は、実測可能な残存状況のものを原則とし、土器類の破片については特徴から時期や土器型式を特定できるものを中心とした。遺物の実測作業は、原寸での実測を基本とした。土器は実測可能なものを中心に実測を行った。実測を行った遺物は、浄書し図版用の版下を作成した。また、縄文土器器表面や銭貨等は湿拓により採拓した。遺物の写真撮影はデジタルカメラを用いて行い、圧縮したデータを編集し写真図版として掲載した。なお、これら遺物写真データはRAW形式とJPEG形式の両方を保管している。すべての処理が終了した遺物は、本書掲載遺物と不掲載遺物とに分けて所定の場所へ収納した。

(4) 記載方法と凡例

①遺構

遺構名・遺構番号は遺跡ごとに付与した。発掘調査中は略号(SI・SK・SXなど)を用いたが、本書では、「1号竪穴住居」「1号土坑」などと表記した。遺構図面は点検後、必要に応じて第2原図を作成した。図版中の縮尺は個々にスケールを付した。なお、使用したスクリーン tone の種類は凡例のとおりである。

②遺物

遺物の掲載番号は、以下のごとく1～2桁の遺物番号を付した。なお、実測図・写真とも共通の掲載番号である。また、遺物は土器・土製品→石器・石製品→鉄製品の順序で掲載している。遺物実測図は、土器、礫石器を3分の1、剥片石器・鉄製品を2分の1でそれぞれ統一し掲載した。なお、銭

1 野外調査

貨の拓影は原寸で掲載した。写真図版は、デジタルカメラで撮影した画像データ（JPEG形式）を用いた。遺物写真の寸法は遺物実測図とほぼ同じである。

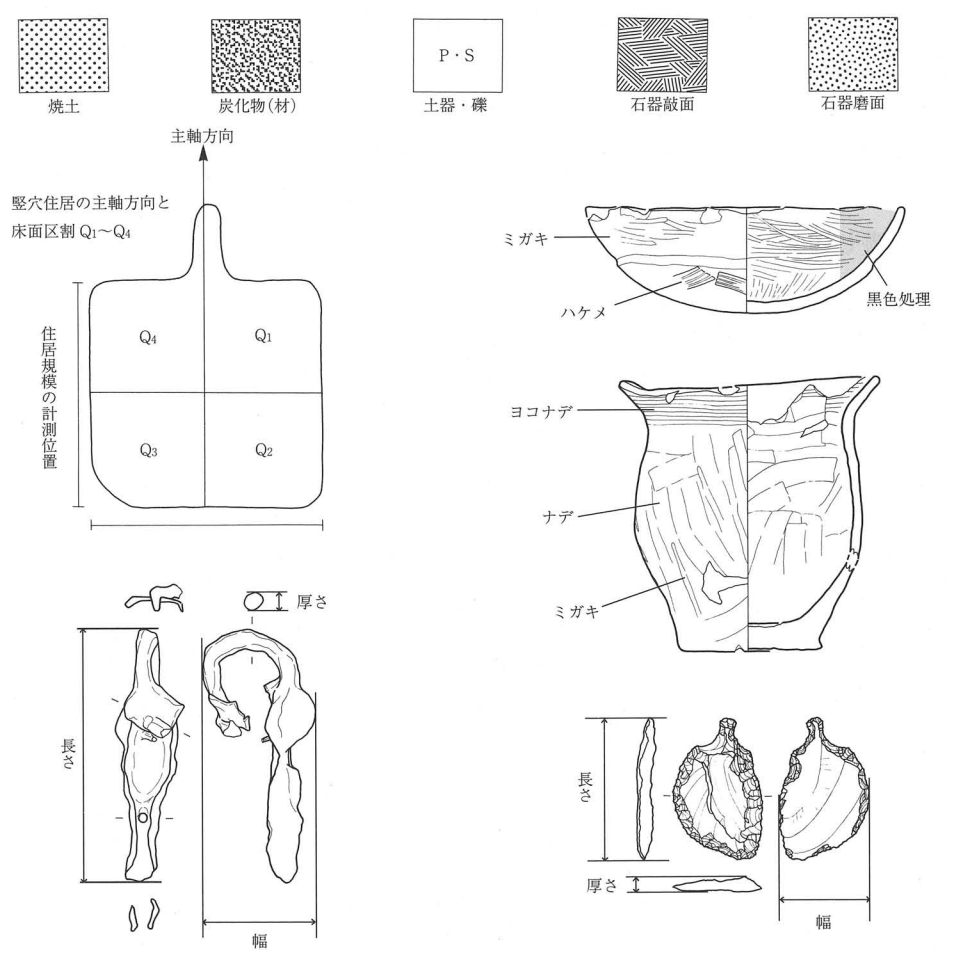
[フローテーションにかかる遺構内土壌の採取]

遺構の埋土をサンプリングし、ウォーターフローテーション・セパレーション法による微細自然遺物の回収を実施している。土壌は10リットルのバケツ内で水洗し、炭化浮遊物を0.5mmメッシュの篩で回収する作業を数回繰り返した後、沈殿物を0.5mmメッシュの篩で回収した。浮遊物は新聞紙（一部はアルミホイル）の上ののせ保管・乾燥した後、肉眼あるいは15倍のルーペ下で自然遺物の1時選別を行った。なお、サンプル採取地点およびフローテーション・セパレーション実施推定土壌量は以下のとおりである。

遺構名	採取地点	土壌量(1)	遺構名	採取地点	土壌量(1)	遺構名	採取地点	土壌量(1)
1号竪穴住居	東ベルト床面	40	2号竪穴住居	Q4床面	40	3号竪穴住居	カマド焼土	40
1号竪穴住居	西ベルト床面	60	2号竪穴住居	Q2床面炭化物層	40	3号竪穴住居	カマド煙道	160
1号竪穴住居	南ベルト床面	40	2号竪穴住居	Q3床面炭化物層	20	3号竪穴住居	貼り床	200
1号竪穴住居	北ベルト床面	60	2号竪穴住居	Q4床面炭化物層	60	4号竪穴住居	床面一括	24
1号竪穴住居	Q1床面	40	2号竪穴住居	貼り床	20	4号竪穴住居	カマド崩落土	120
1号竪穴住居	Q2床面	20	2号竪穴住居	カマド構築土	60	4号竪穴住居	カマド構築土	10
1号竪穴住居	Q3床面	120	2号竪穴住居	カマド焼土	10	4号竪穴住居	カマド焼土	20
1号竪穴住居	Q4床面	40	2号竪穴住居	床上3~5cm	10	4号竪穴住居	カマド煙道	120
1号竪穴住居	カマド崩落土	40	2号竪穴住居	貼り床	20	3号土坑	埋土	340
1号竪穴住居	カマド構築土	180	3号竪穴住居	東ベルト床面	60	1号焼土	埋土	100
1号竪穴住居	カマド焼土	20	3号竪穴住居	西ベルト床面	20	1号焼土	炭化物層	20
1号竪穴住居	カマド煙道	140	3号竪穴住居	南ベルト床面	20	1号焼土	粘土	200
2号竪穴住居	東ベルト床面	40	3号竪穴住居	北ベルト床面	20	1号焼土	下位黄褐色土	160
2号竪穴住居	西ベルト床面	40	3号竪穴住居	Q1床面	160	1号焼土	焼土	60
2号竪穴住居	南ベルト床面	60	3号竪穴住居	Q2床面	40	1号炉跡	焼土	120
2号竪穴住居	北ベルト床面	60	3号竪穴住居	Q4床面	20			
2号竪穴住居	Q2床面	60	3号竪穴住居	カマド崩落土	40			
2号竪穴住居	Q3床面	40	3号竪穴住居	カマド構築土	40			

※土壌量は推定

(丸山)



凡例

IV 調査成果

1 概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の炉跡1基、陥し穴状遺構6基、奈良時代の竪穴住居4棟、時期不明の土坑5基、焼土遺構1基、道路状遺構1条である。

2 検出遺構

縄文時代

炉跡

1号炉跡（第8図、写真図版3）

中央尾根東向き斜面、II B 4 h グリッドに位置する。検出面はⅦ層で、1号埋没沢に近接している。全体としては1.23 × 0.57mの不整楕円形の範囲に小礫が集石され、北半部の集石内部に径60 × 35 cm、厚さ13 cmの不整楕円形の焼土が広がるものである。平面形から竪穴住居に伴う炉に類するとみられたが、斜面地に立地し明確な掘りこみが伴わないことなどから単独の炉跡と判断した。出土遺物はなく詳細は不明だが、検出層位から縄文時代の遺構と考えられる。

（丸山）

陥し穴状遺構

1号陥し穴状遺構（第9図、写真図版3）

〔位置・検出状況〕調査区中央部、II B 4 j グリッドに位置する。この付近は木材切り出し道路により、削平・盛土がなされていた。検出面は盛土直下のⅨ層（マサ土）上面であるが、本来の検出面の上面は10～20 cm程度削平されていたと思われる。黒褐色の溝状プランとして確認した。西半部は1号竪穴住居と重複し、これによって切られている。

〔規模・形状〕規模は開口部径3.89 × 0.7m、底部径4.09 × 0.15mの溝形を呈する。長軸方向はN-73°-Eである。短軸の断面形は、壁が底面から30 cmほどやや外傾して立ち上がり、開口部に至るV字形を呈する。長軸の断面形は両端の壁が内湾して立ち上がるフラスコ形を呈する。底面は中心部がやや窪む皿状で、深さは最深部で1.35mを測る。

〔埋土〕6層からなり、第1～3層はにぶい黄褐色～明黄褐色シルト、第4～6層は暗褐色～にぶい黄褐色のマサ土崩落層で構成される。自然堆積の様相を呈する。

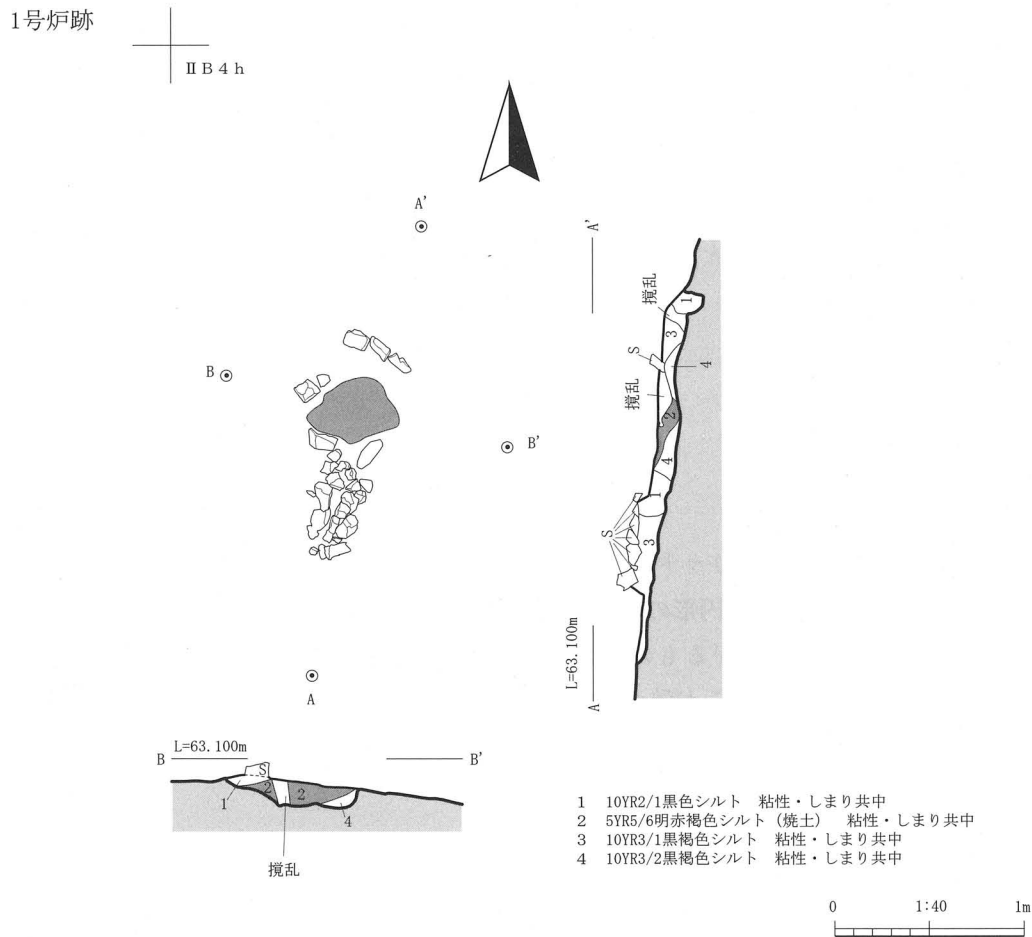
〔出土遺物・時期〕出土遺物なし。類例と形態から、縄文時代の陥し穴であると考えられる。

2号陥し穴状遺構（第9図、写真図版3）

〔位置・検出状況〕調査区中央部、II B 4 i～II B 4 j グリッドに位置する。検出面は1号竪穴住居の貼り床直下（Ⅸ層）で、暗褐色のプランとして確認した。上位は1号竪穴住居によって切られている。

〔規模・形状〕規模は開口部径2.81 × 0.23m、底部径2.54 × 0.04mの溝形を呈する。長軸方向はN-78°-Eである。短軸の断面形は、外傾しながら立ち上がるV字形を呈する。長軸は壁の両端が外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、深さは残存している最深部で30 cmを測る。

〔埋土〕下位の2層が残存しており、褐色～明褐色シルトで構成される。第1層はマサ土崩落層である。



第8図 1号炉跡

〔出土遺物・時期〕 縄文土器が2点出土している。いずれも深鉢である。出土遺物と遺構の形態から、縄文時代の陥し穴であると考えられる。

3号陥し穴状遺構 (第10図、写真図版3)

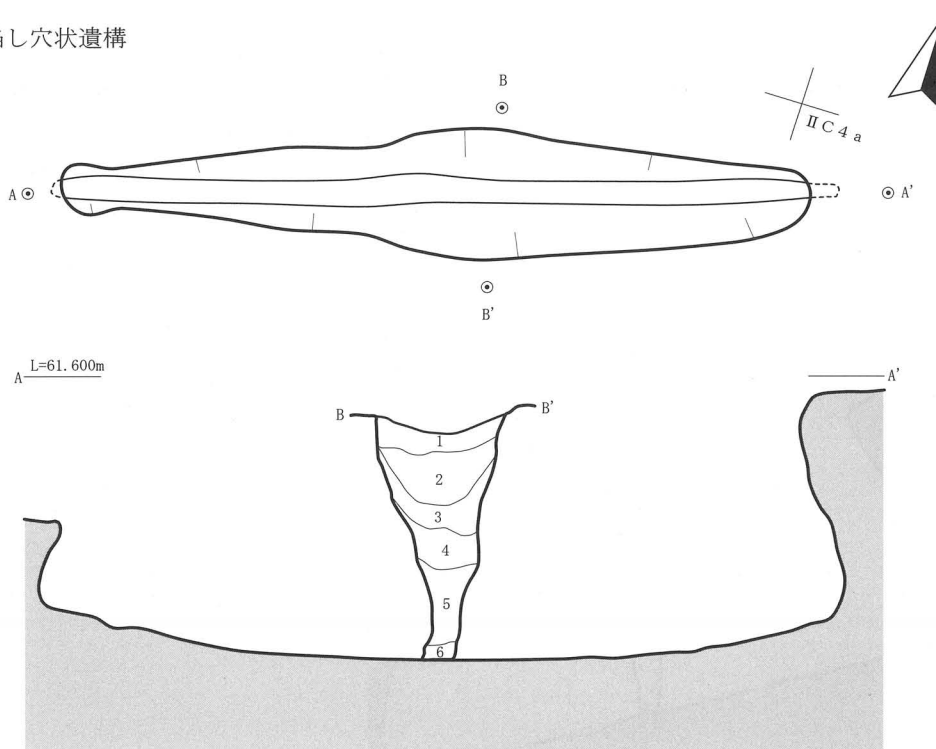
〔位置・検出状況〕 調査区中央部、II B 3 h、II B 4 h、II B 4 i グリッドに位置する。検出面は埋没沢Ⅶ層上面で、黒褐色のプランとして確認した。

〔規模・形状〕 規模は開口部径 2.47×0.58m、底部径 3.02×0.22m の溝形を呈する。長軸方向は N-61°-E である。短軸の断面形は、壁が底面から 50 cm 程ほぼ垂直に立ち上がり、そこから開口部に向かって外傾する Y 字形を呈する。長軸の断面形は、壁が内傾して立ち上がり、そのまま開口部に至るフラスコ形を呈する。底面は北東方向に傾斜している。深さは最深部で 1.88m を測る。

〔埋土〕 6層からなり、黒褐色シルト主体で構成される。下位の第5～6層は、粘性が強いシルトの堆積である。自然堆積の様相を呈する。

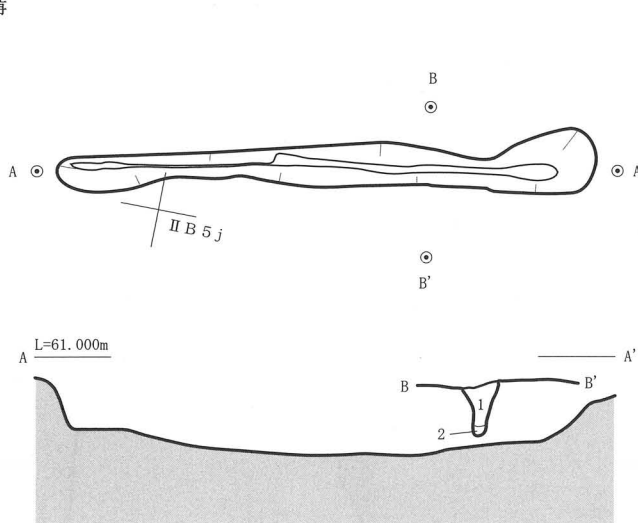
〔出土遺物・時期〕 出土遺物なし。類例と形態から、縄文時代の陥し穴であると考えられる。

1号陥し穴状遺構

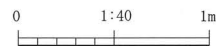


- 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性弱 しまり強 マサ土粒全体に3%
- 2 10YR6/2明黄褐色シルト 粘性弱 しまりやや強 マサ土粒全体に2%
- 3 10YR5/6黄褐色シルト 粘性弱 しまりやや強 マサ土粒全体に3%
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性・しまり共弱 マサ土崩落層
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性・しまり共弱 マサ土崩落層
- 6 10YR3/3暗褐色砂質シルト 粘性・しまり共弱 マサ土崩落層

2号陥し穴状遺構



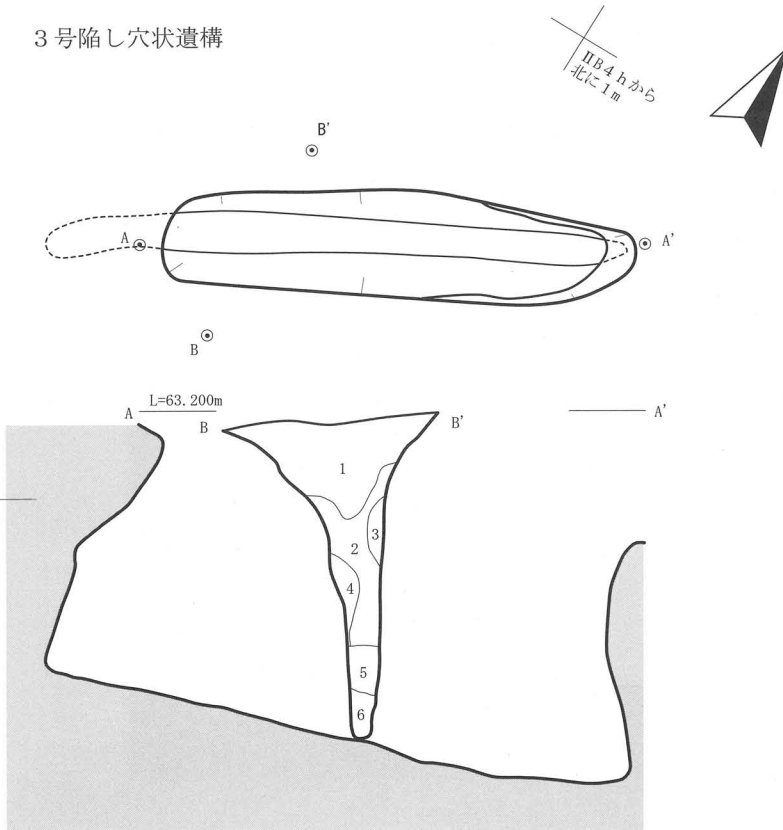
- 1 7.5YR5/6明褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中
- 2 10YR4/6褐色シルト 粘性・しまり共中



第9図 1・2号陥し穴状遺構

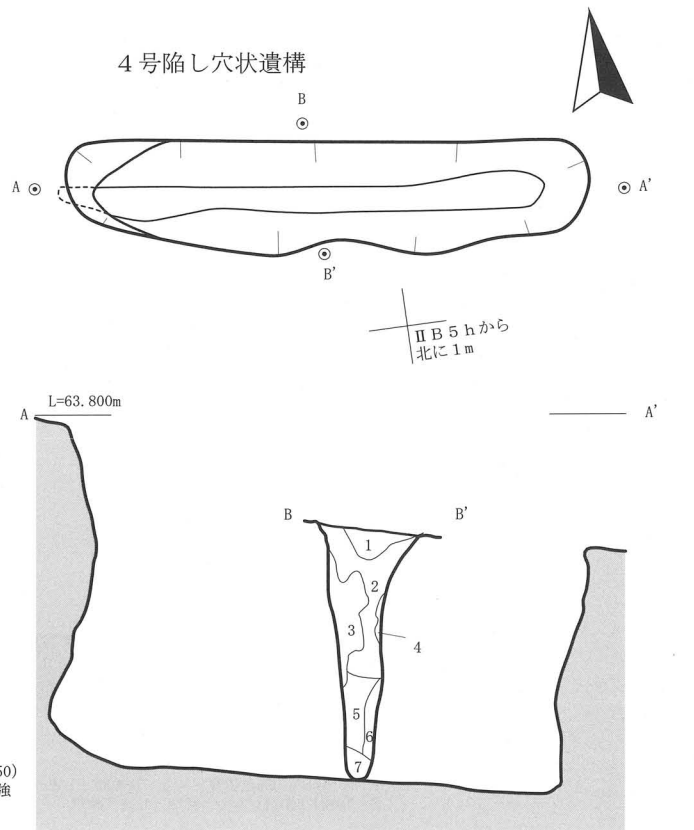
2 検出遺構

3号陥し穴状遺構

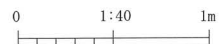


- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり共やや強 炭化物(φ5cm)1%
- 2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや強 しまり強 マサ土粒3%
- 3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性中 しまり強
- 4 10YR5/8黄褐色シルト 粘性やや強 しまり強
- 5 10YR4/6褐色粘質シルト 粘性・しまり共強
- 6 10YR3/2黒褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや強

4号陥し穴状遺構



- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 2 10YR4/1褐色シルト 粘性・しまり共やや強
- 3 10YR5/8黄褐色シルト 粘性中 しまり強
- 4 10YR5/8黄褐色シルト 粘性・しまり共中
- 5 10YR3/2黒褐色シルトと10YR5/8黄褐色シルトとの混合土(50:50)
粘性中 しまり強
- 6 10YR4/4褐色シルト 粘性・しまり共中
- 7 10YR3/3暗褐色シルト 粘性中 しまりやや強



第10図 3・4号陥し穴状遺構

4号陥し穴状遺構（第10図、写真図版4）

〔位置・検出状況〕調査区中央部、ⅡB4g～ⅡB4hグリッドに位置する。検出面は埋没沢Ⅶ層上面で、黒褐色のプランとして確認した。

〔規模・形状〕規模は開口部径2.73×0.6m、底部径2.53×0.14mの溝形を呈する。長軸方向はN-80°-Wである。短軸の断面形は、壁が底面からほぼ垂直に立ち上がるU字形を呈する。長軸の断面形は、壁が内傾して立ち上がった後に、外傾して開口部に至るフラスコ形を呈する。底面は東方向にやや傾斜している。深さは最深部で1.82mを測る。

〔埋土〕7層からなり、黒褐色～褐灰色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物なし。形態から、縄文時代の陥し穴であると考えられる。

5号陥し穴状遺構（第11図、写真図版4）

〔位置・検出状況〕調査区中央部、ⅡB4f～ⅡB4gグリッドに位置する。検出面は埋没沢Ⅶ層上面で、黒褐色のプランとして確認した。

〔規模・形状〕規模は開口部径2.21×1.16m、底部径1.33×0.49mの楕円形を呈する。長軸方向はN-28°-Wである。断面形は、壁が外傾して立ち上がり、そのまま開口部に至る逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。底面の中央部から径7～14cm、深さ3～21cmほどの小穴が3個検出された。深さは最深部で1.52mを測る。

〔埋土〕半裁を行った箇所が中心を外れた為、エレベーションを取り直し合成している。この為、埋土下位の記録を欠く。黒褐色シルト主体で構成される。

〔出土遺物・時期〕出土遺物なし。形態から、縄文時代の陥し穴であると考えられる。

6号陥し穴状遺構（第11図、写真図版4）

〔位置・検出状況〕調査区中央部、ⅡB3e～ⅡB3fグリッドに位置する。検出面は埋没沢Ⅶ層上面で、黒褐色のプランとして確認した。

〔規模・形状〕規模は開口部径3.51×0.5m、底部径3.64×0.08mの溝形を呈する。長軸方向はN-14°-Eである。短軸の断面形は、壁がやや外傾して立ち上がるV字形を呈する。長軸の断面形は、壁の両端が外傾して立ち上がり開口部に至るV字を呈する。底面はほぼ平坦である。深さは最深部で1.05mを測る。

〔埋土〕4層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物なし。類例と形態から、縄文時代の陥し穴であると考えられる。

（鈴木）

埋没沢

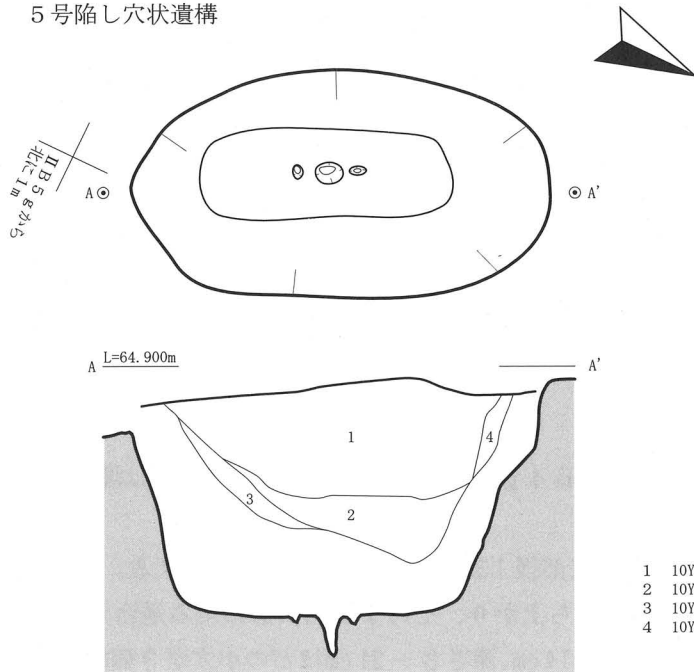
埋没沢（第5・7図、写真図版4）

中央尾根東向き斜面上、現沢筋よりやや南側に逸れた地点に位置する。表土除去後に、西-東方向に遺物を含む黒色の帯状範囲として検出された。検出範囲は211㎡で、厚さ50～62cmを測る。基本層序第Ⅳ層～Ⅴ層に相当するもので、縄文時代中期中葉の土器片、炭化物粒を少量含む。

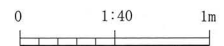
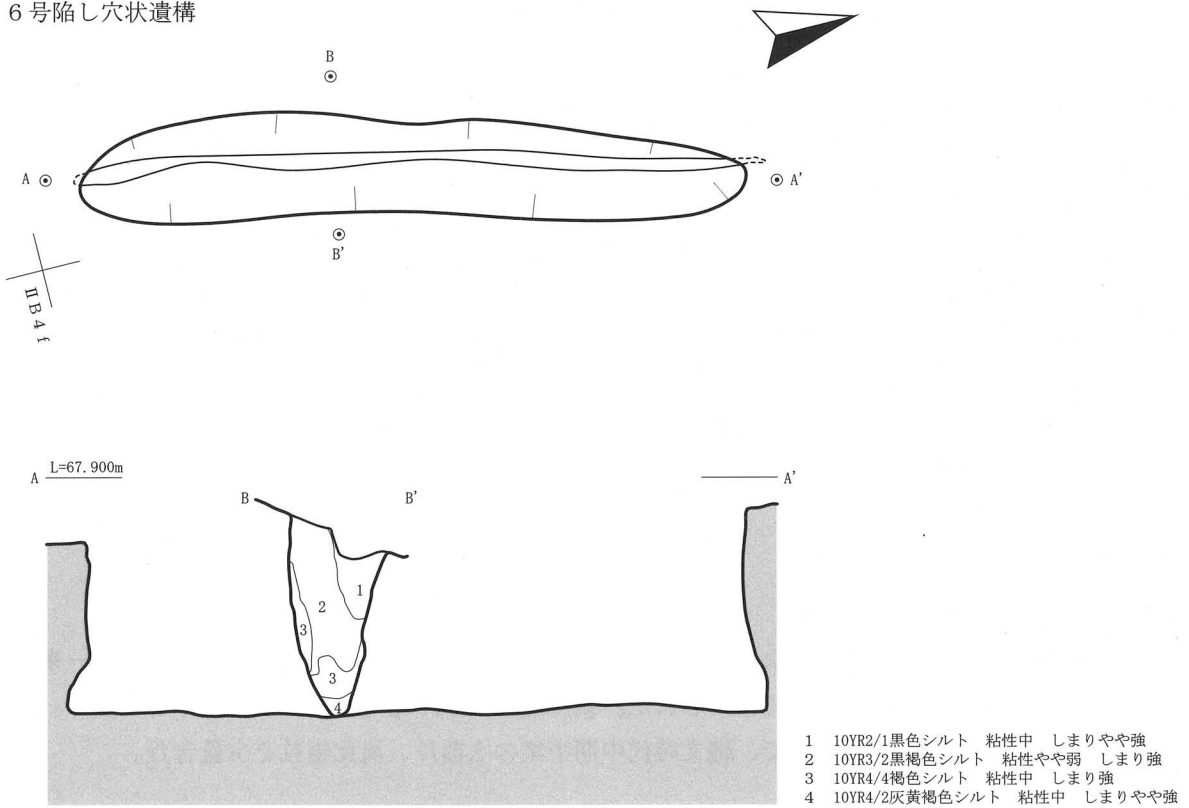
（丸山）

2 検出遺構

5号陥し穴状遺構



6号陥し穴状遺構



第11図 5・6号陥し穴状遺構

奈良時代

竪穴住居

1号竪穴住居（第12図、写真図版5）

[位置・調査過程] 調査区中央部、ⅡB3 i～j、ⅡB4 i～j、ⅡB5 i～j グリッドに位置する。この付近は、木材切り出し道路を作る際に削平・盛土がなされている。検出面は盛土直下のマサ土上面であるが、削平を受けているため、本来の検出面よりも10～20 cm低い位置であると思われる。明瞭な黒褐色プランとして確認した。

[重複関係] 北東隅で1号陥し穴状遺構と、南側で2号陥し穴状遺構と重複しこれらを切る。

[規模・平面形・主軸方向] 東辺5.37m、西辺5.6m、南辺4.78m、北辺4.8mの隅丸方形を呈する。但し、上位が切り出し道路による削平を受けているため、検出面からの残存値である。住居主軸方向はN-90°-Wである。

[埋土] 9層からなり、黒色～暗褐色シルト主体で構成される。全体に3～10 mmほどの炭化物を含む。

[壁・床面] 壁は4面とも良好に残存しており、それぞれ外傾して立ち上がる。壁高の残存値は東側47 cm、西側61 cm、南側34 cm、北側41 cmを測る。床面はⅨ層（マサ土面）を掘り込んで構築している。明瞭な硬化面は確認できなかったが、全域に暗褐色シルトを含む貼り床が施されている。また、東側と西側を中心に幅14～16 cm、深さ6 cm前後の壁溝を確認した。なお、床面Q4から検出された炭化材の放射性炭素年代測定を実施している（分析・鑑定項参照）。

[カマド] 西壁の中央部に設置されている。袖は浅黄橙色粘土主体で構築されており、北側の袖からは芯材に用いられたと思われる礫が倒れた状態で確認された。煙道は削り貫き式で、底面はほぼ平坦である。煙道長は1.1mを測る。煙出し部は、径23×22 cmの円形で、深さは検出面下80 cmを測る。第2層には拳大の礫が充填されている。燃烧部の平面形は50×46 cmの楕円形で皿状に窪んでおり、厚さは最厚部で4 cmを測る。

[柱穴・ピット] 検出されていない。

遺物（第20・21図、写真図版12）

[土師器] 24点出土した。内訳は坏5点、小形甕2点、長胴甕17点である。

[石器] 床面から2点出土した。いずれも磨石である。

[土製品] カマドから2点出土した。焼成粘土塊で、土製支脚片の可能性はある。

[炭化種子] カマド南側よりオニグルミがわずかに出土した。

時期 床面出土遺物の特徴とAMS測定の結果から8世紀後半代と推定される。

（鈴木）

2号竪穴住居（第13図、写真図版6）

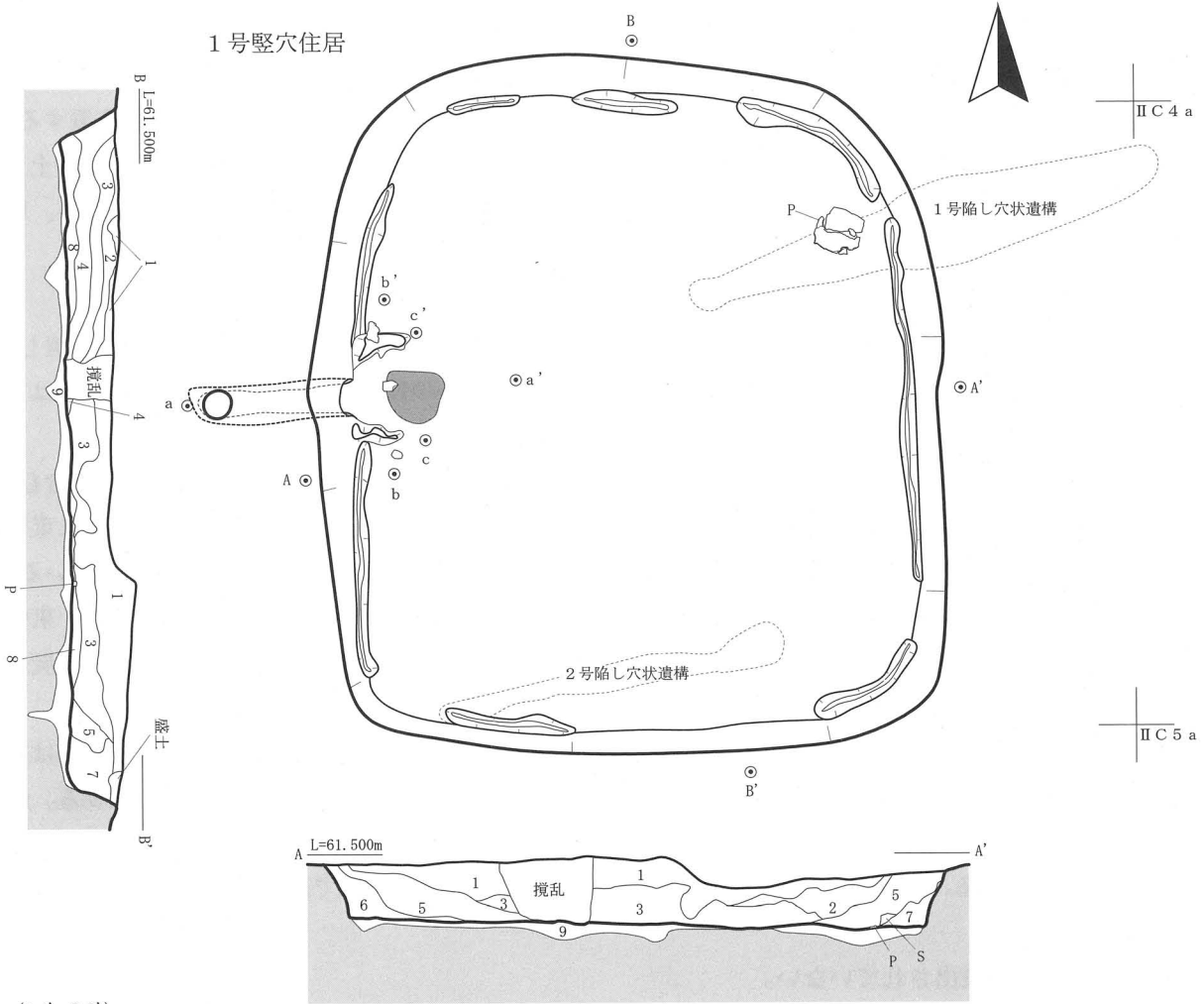
[位置・重複関係] ⅡC6 d グリッドに位置し、東尾根の南向き斜面中位に位置する。平成18年試掘トレンチ T124 にて存在が確認されていた。検出層位は表土直下のⅨ層マサ土上面で、黒褐色土の広がりとして確認された。重複関係はない。

[規模・平面形・主軸方向] 斜面地に位置することから崩落・流出等の影響で南辺が残存せず、全容は不明である。残存辺長は西-東3.62 m、北-南〈2.73〉mで、平面形は隅丸方形基調を呈する。住居主軸方向はN-2°-Wである。

[埋土] 4層に分層される。黒褐色砂質シルト主体で構成されるが、北側壁際には斜面崩落土である鈍い黄褐色の砂質シルトが厚く堆積する。全体的にマサ土が少量混入している。

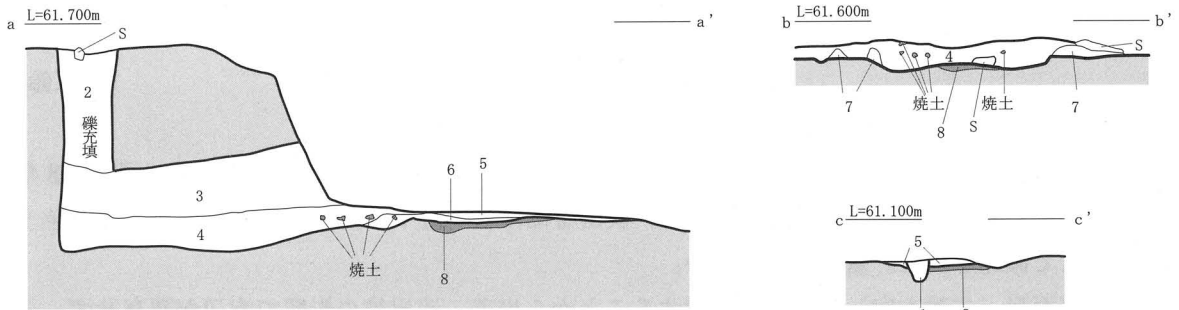
[壁・床面] 住居構築時の掘削はマサ土層中を掘り込んでいる。貼り床は認められない。残存床面範

2 検出遺構



(A-A'、B-B')

- 1 10YR2/1黒色シルト 粘性中 しまりやや強
- 2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや強 マサ土粒 (φ 1~3mm) 3% 炭化物 3%
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや強 しまり中 炭化物 (φ 5mm) 10%
- 4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや強 しまり中 10YR5/6黄褐色シルト 3%
- 5 10YR3/4暗褐色シルト 粘性・しまり共中 炭化物 (φ 10mm) 1% 土器片多く含む
- 6 7.5YR6/8橙色シルト 粘性・しまり共中 炭化物 (φ 3mm) 微量
- 7 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 しまり強
- 8 10YR4/6褐色シルトと10YR2/2黒褐色シルトとの混合土 (60:40) 粘性・しまり共中 5YR5/8明赤褐色シルト (焼土) 3% 炭化物 1%
- 9 10YR4/6褐色シルトと10YR3/4暗褐色シルトとの混合土 (50:50) 粘性やや弱 しまり中

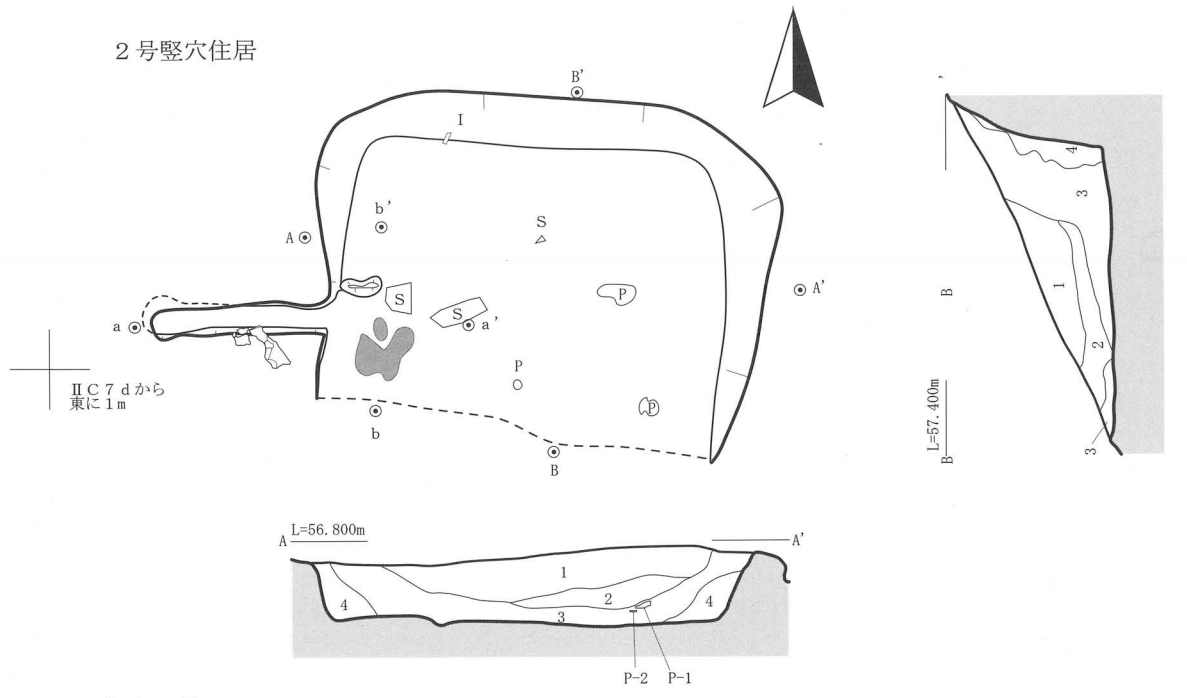


カマド (a-a'、b-b'、c-c')

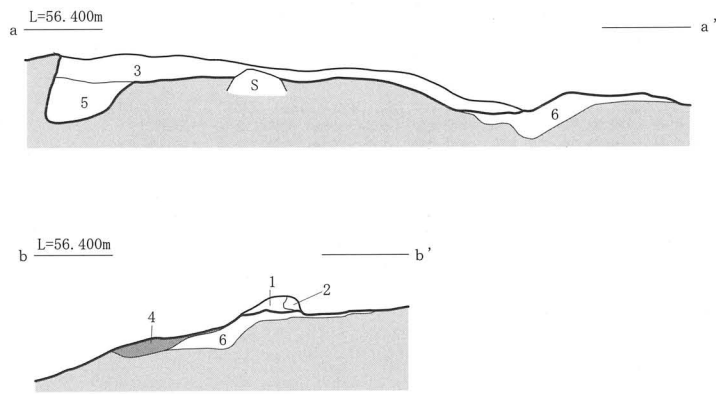
- 1 10YR4/4褐色シルト 粘性・しまり共中 (抜き取り痕)
- 2 10YR4/6褐色シルト 粘性中 しまり強 礫充填層 (50%以上) 炭化物 (10mm) 3%
- 3 7.5YR5/6明褐色シルト 粘性・しまり共中 マサ土粒 3%
- 4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性強 しまり中 焼土ブロック (φ 1~3cm) 5% 炭化物 (φ 1mm) 1%
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性・しまり共中 (天井崩落層)
- 6 10YR2/3黒褐色シルト 粘性・しまり共やや強 焼土ブロック (φ 1~3cm) 3% 炭化物 (φ 1mm) 1%
- 7 10YR8/4浅黄橙色粘土と10YR6/4にぶい黄褐色シルトとの混合土 粘性・しまり共強
- 8 5YR3/6暗赤褐色シルト (焼土) 粘性弱 しまり中

第12図 1号竪穴住居

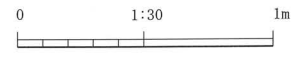
2号竪穴住居



- (A-A', B-B')
- 1 10YR3/2黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱 炭化物小ブロック1% マサ土粒全体に30%
 - 2 10YR3/1黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱 炭化物粒2% マサ土粒全体に30%
 - 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱 炭化物粒2% マサ土粒全体に30%
 - 4 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性・しまり共弱 炭化物粒1%未満 (マサ土崩落層)

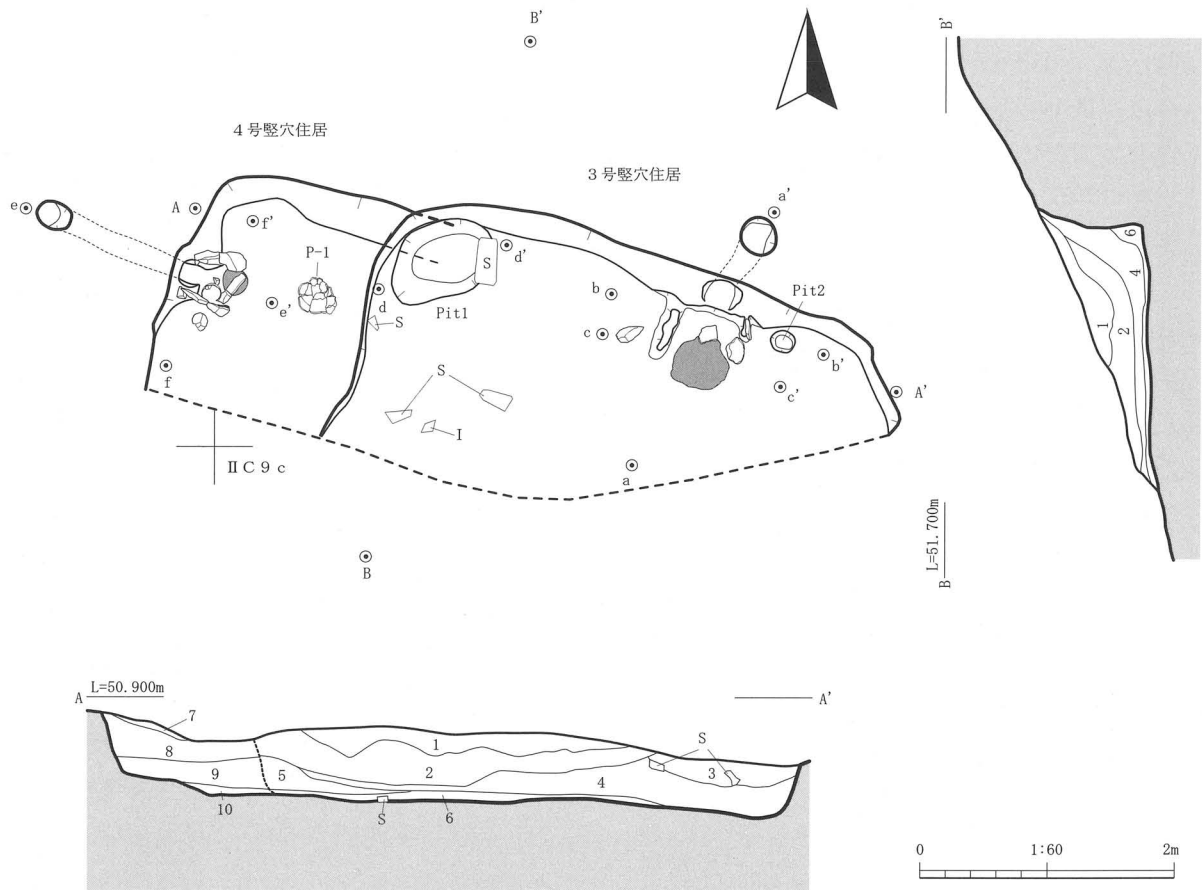


- カマド (a-a', b-b')
- 1 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性・しまり共弱
 - 2 10YR6/3にぶい黄褐色粘土 粘性強 しまりやや強 (袖部構築材残存部)
 - 3 10YR3/1黒褐色砂質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト(マサ土)の混合土(60:40) 粘性・しまり共弱
 - 4 5YR4/4にぶい赤褐色シルト(焼土) 粘性・しまり共弱
 - 5 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱
 - 6 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱 (掘え方or掘り方)



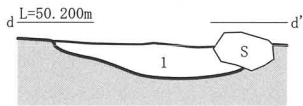
第13図 2号竪穴住居

2 検出遺構



(A-A'、B-B')

- 1 10YR2/2黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱 炭化物ブロック2% マサ土粒(φ2~5mm) 全体に5% (SI03埋土)
- 2 10YR3/4暗褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中 炭化物ブロック1% マサ土粒(φ1~2mm) 全体に2% (SI03埋土)
- 3 10YR3/1黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中 炭化物ブロック1% マサ土粒(φ1~2mm) 全体に2% (SI03埋土)
- 4 10YR2/3黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中 炭化物ブロック1% マサ土粒(φ1~2mm) 全体に2% (SI03埋土)
- 5 10YR6/8明黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中 (SI03埋土)
- 6 10YR3/1黒褐色砂質シルトと10YR3/2黒褐色シルトとの混合土(60:40) 粘性弱 しまり中 炭化物粒2% (SI03貼り床)
- 7 7.5YR2/2黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱 炭化物ブロック2% マサ土粒(φ2~5mm) 全体に5% (SI04埋土)
- 8 7.5YR3/4暗褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中 炭化物ブロック1% マサ土粒(φ1~2mm) 全体に2% (SI04埋土)
- 9 7.5YR6/8明黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中 (SI04埋土)
- 10 7.5YR3/1黒褐色砂質シルトと10YR3/2黒褐色シルトとの混合土(60:40) 粘性弱 しまり中 炭化物粒2% (SI04貼り床)



(d-d')

- 1 10YR4/3鈍い黄褐色砂質シルト 粘弱・しまり中
10YR5/6黄褐色砂質シルト粒(マサ土)20%

第14図 3・4号竪穴住居

囲はほぼ平坦で、場所による硬度差は確認されない。壁は北・東・西側が残存しており、やや外傾して立ち上がる。検出面から底面までの深さは最も残存する北側で1.29 mを測る。壁溝は検出されていない。なお、西ベルト床面から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施している。

〔カマド〕西壁の中央部から検出されている。上部が失われているため構造は不明である。煙道はほぼ平坦に西側へ延び、煙出しに至ってピット状に低く掘りこまれる。煙道長は1.46m、幅は25.7 cm、煙出し部分の深さは35.3 cmである。本体部分はほとんど残存しておらず、右袖の一部とわずかな燃焼部範囲が確認されたのみである。カマド前方床面からは角礫片が出土しており、芯材であった可能性がある。燃焼部は44 × 36 cmの楕円形で、厚さは最厚部で7 cmを測る。

〔柱穴・ピット〕確認されていない。

遺物（第22図、写真図版13）

〔土師器〕6点出土した。内訳は、坏1点、小形甕1点、長胴甕4点である。

〔石器〕床面から磨石が1点出土している。

〔鉄製品〕埋土下位から刀子が1点出土している。

〔炭化種子〕床面～埋土下位にかけてクリなどの堅果類、オオムギやキビなどの雑穀が各少量出土している。時期 床面出土遺物の特徴とAMS測定の結果から8世紀後半代と推定される。

3号竪穴住居（第14・15図、写真図版7）

〔位置・重複関係〕II C 8 c グリッドに位置し、東尾根の南向き斜面下位に位置する。検出層位は表土直下のIX層（マサ土）上面で、黒褐色土の広がりとして確認された。西側で4号竪穴住居と重複し、これを切る。当初、4号竪穴住居の単独遺構と認識し、調査を開始したが、調査途中で本竪穴住居のカマドを検出、その結果、2棟の住居の重複であると判明した。

〔規模・平面形・主軸方向〕斜面地に位置することから崩落・流出等の影響で南辺が残存せず、全容は不明である。残存辺長は西一東4.25 m、北一南〈2.10〉mで、平面形は隅丸方形基調を呈する。住居主軸方向はN-25°-Eである。

〔埋土〕6層に分層される。第6層は貼り床である。黒褐～暗褐色のシルトで構成される。

〔壁・床面〕住居構築時の掘削はマサ土層中を掘り込んでいる。床面には黒褐色シルトにより2.88 × 2.12m、厚さ6 cmの貼り床が施される。残存床面範囲は東側がわずかに低いもののほぼ平坦で、場所による硬度差は確認されない。壁は北・東・西側が残存しており、やや外傾して立ち上がる。検出面から底面までの深さは最も残存する北側で71 cmを測る。壁溝は検出されていない。

〔カマド〕北壁の中央部、やや右寄りから検出されている。削り抜き式のカマドである。煙道はトンネル状に掘りこまれており、底面はほぼ平坦に北側へ延び、煙出しに至ってピット状に低く掘りこまれる。煙道長は87 cm、幅は28.9 cm、煙出し部分の深さは55 cmである。本体部分は天井部が残存せず、袖部と燃焼部範囲が確認されたのみである。カマド右袖床面Q1からは角礫片がまとまって出土しており、芯材が廃棄されたものである可能性がある。燃焼部は44 × 41 cmの楕円形で、火床面は被熱によりごく硬くしまっている。厚さは最厚部で9 cmを測る。

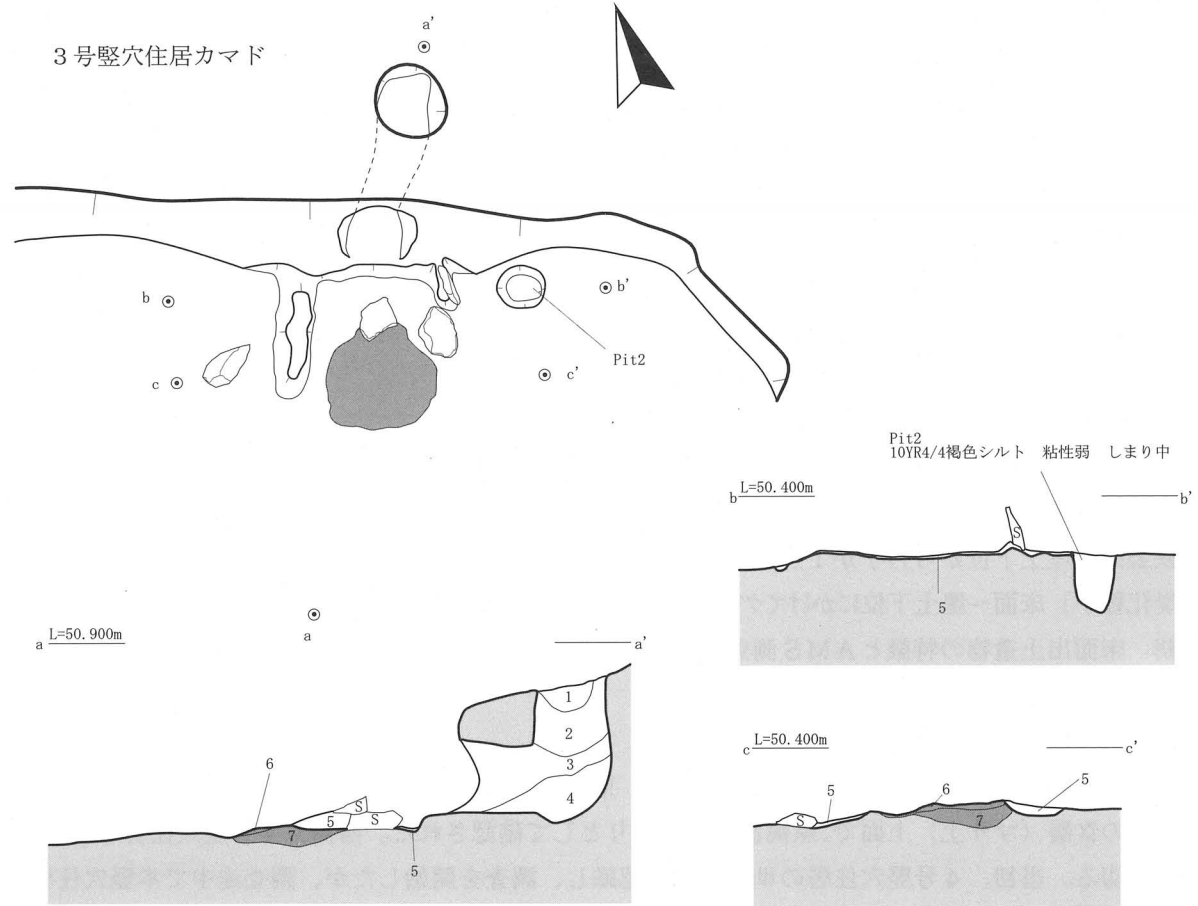
〔柱穴・ピット〕北西隅から87 × 62 cm、深さ14 cmのピットを1個検出している。

遺物（第22図、写真図版13）

〔土師器〕3点出土した。内訳は、小形甕1点、長胴甕2点である。

〔鉄製品〕床面から形態不明の鉄製品が1点出土している。

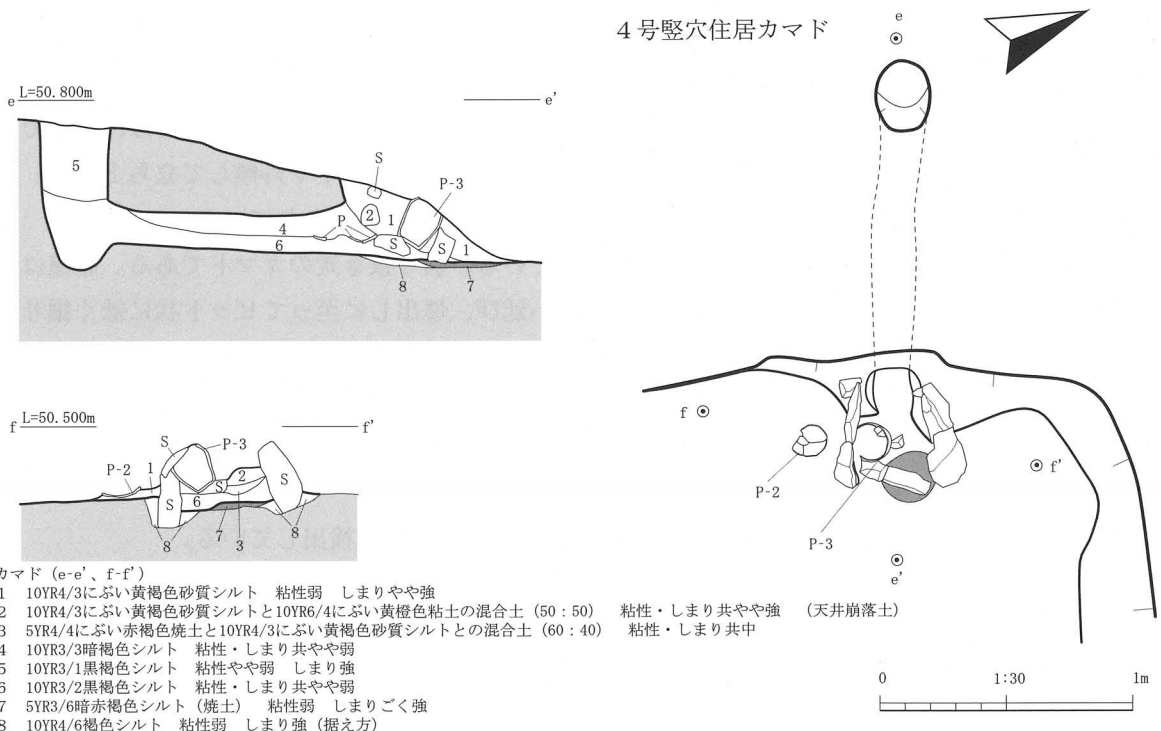
〔炭化種子〕カマド煙道からイネが出土している（分析・鑑定の項参照）。



カマド (a-a', b-b', c-c')

- 1 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 10YR4/1灰黄色粒5%
- 2 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 10YR4/2灰黄褐色シルト3%
- 3 10YR4/6褐色砂質シルト 粘性・しまり共やや弱 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト10%
- 4 10YR3/1黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや弱 10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒30%
- 5 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性弱 しまり強
- 6 5YR5/6明赤褐色シルト (焼土) 粘性弱 しまりがく強 被熱によりごく固くしまる (天井崩落層か?)
- 7 5YR4/8赤褐色シルト (焼土) 粘性弱 しまり強

4号竪穴住居カマド



カマド (e-e', f-f')

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや強
 - 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトと10YR6/4にぶい黄褐色粘土の混合土 (50:50) 粘性・しまり共やや強
 - 3 5YR4/4にぶい赤褐色焼土と10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトとの混合土 (60:40) 粘性・しまり共中
 - 4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性・しまり共やや弱
 - 5 10YR3/1黒褐色シルト 粘性やや弱 しまり強
 - 6 10YR3/2黒褐色シルト 粘性・しまり共やや弱
 - 7 5YR3/6暗赤褐色シルト (焼土) 粘性弱 しまりがく強
 - 8 10YR4/6褐色シルト 粘性弱 しまり強 (据え方)
- (天井崩落土)

第15図 3・4号竪穴住居カマド

時期 床面出土遺物の特徴および重複関係から8世紀後半～9世紀代と推定される。

4号竪穴住居（第14・15図、写真図版8）

〔位置・重複関係〕ⅡC8cグリッドに位置し、東尾根の南向き斜面下位に位置する。検出層位は表土直下のⅨ層（マサ土）上面で、黒褐色土の広がりとして確認された。東側で3号竪穴住居と重複し、これにより切られる。当初、本遺構単独の竪穴住居と認識し、調査を開始したが、調査途中で3号竪穴住居のカマドを検出、その結果、2棟の住居の重複であると判明した。

〔規模・平面形・主軸方向〕斜面地に位置することから崩落・流出等の影響で南辺が残存せず、全容は不明である。残存辺長は西一東〈1.6〉m、北一南〈1.9〉mで、平面形は隅丸方形基調を呈する。住居主軸方向はN-69°-Wである。

〔埋土〕4層に分層される。第10層は貼り床である。黒褐、明黄褐色のシルトで構成され、全体的に炭化物粒を少量含む。

〔壁・床面〕住居構築時の掘削はマサ土層中まで及んでいる。床面は黒褐色砂質シルトによって薄く貼り床が施され、最厚部で8cmを測る。残存床面範囲はほぼ平坦で、全体的に硬くしまる。壁は北・西側が残存しており、やや外傾して立ち上がる。検出面から底面までの深さは最も残存する北側で69cmを測る。

〔カマド〕カマドは西壁に造られ、削り貫き式の煙道を持つ。煙道はトンネル状に掘りこまれており、底面はほぼ平坦に西側へ延び、煙出しに至ってピット状に低く掘りこまれる。煙道長は1.27m、幅は20.7cm、煙出し部分の深さは58cmである。本体部分は礫に粘土を貼り付けて袖を構築するもので、天井部は燃焼部上に崩落して残存していた。崩落土内からは土師器長胴甕が出土している。これらは出土状況から使用時の状況を留めている可能性がある。燃焼部は21.9×21.1cmの楕円形で、火床面は被熱によりごく硬くしまる。厚さは最厚部で3cmを測る。なお、左袖付近床面から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施している（分析・鑑定の項参照）。炭化材は肉眼観察の結果、センノキであるという鑑定結果を得ている。

〔柱穴・ピット〕なし。

遺物（第23図、写真図版13）

〔土師器〕4点出土した。内訳は坏1点、長胴甕2点、球胴甕1点である。

〔炭化種子〕床面よりごく少量出土している（分析・鑑定の項参照）。

時期 床面出土遺物の特徴とAMS測定の結果から8世紀後半代と推定される。

（丸山）

時期不明

土坑

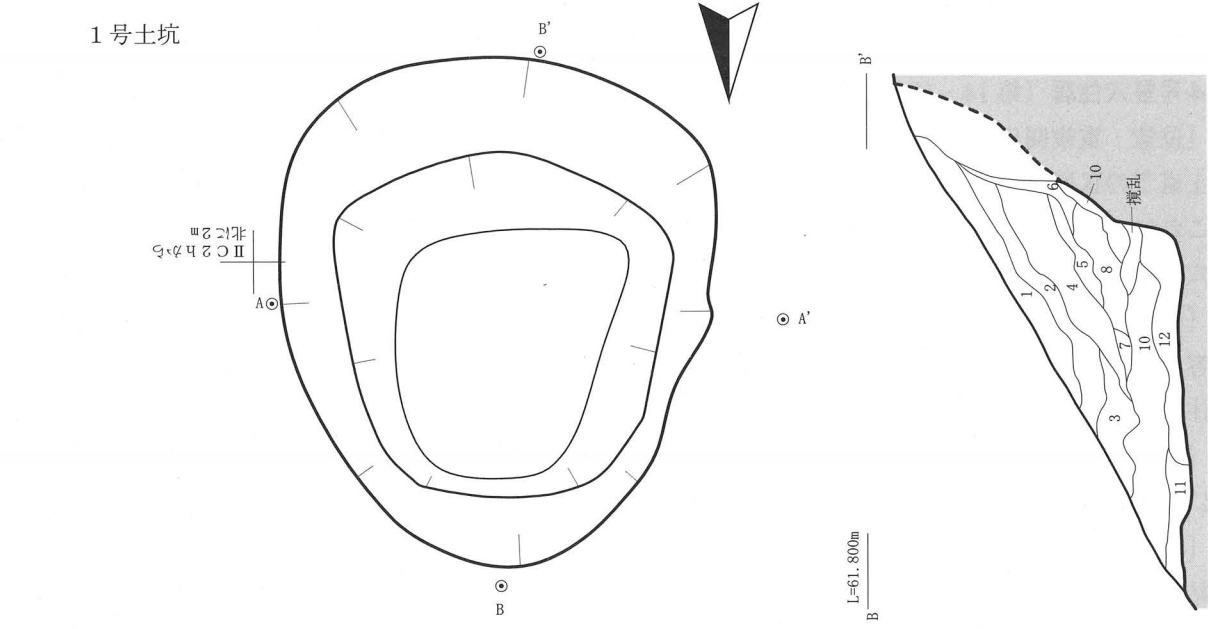
1号土坑（第16図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕調査区東尾根部、ⅠC10g～ⅡC1gグリッドに位置する。平成18年度の確認調査トレンチT227にて存在が確認されていた。検出面は表土直下のⅨ層（マサ土）上面で、黒褐色の円形プランとして確認した。

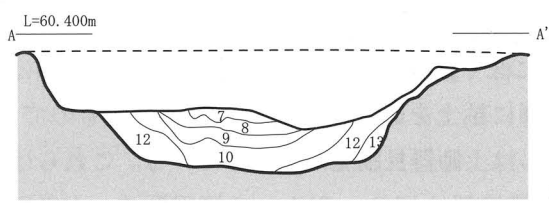
〔規模・形状〕平面形は開口部径、底部径2.31×1.83mの楕円形を呈する。壁はやや外傾する急角度で立ち上がり、その後は緩やかに外傾して開口部に至る。検出面からの深さは最深部で1.34mを測る。

〔埋土〕13層からなり、上位は黒褐～暗褐色シルト、下位はにぶい黄褐色～にぶい黄橙色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

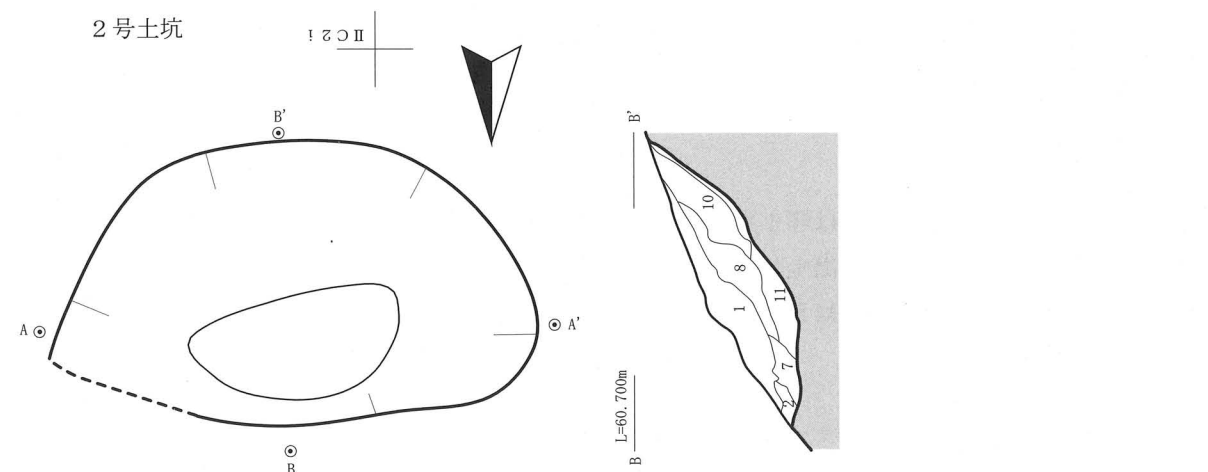
1号土坑



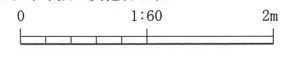
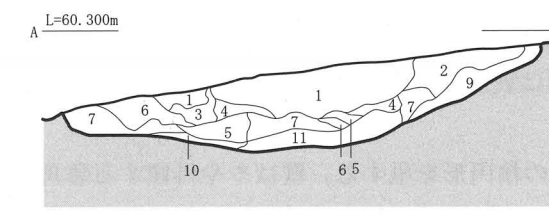
- (A-A', B-B')
- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり共やや弱 炭化物粒φ 2mm 3% マサ土粒φ 1mm 1%
 - 2 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中 しまりやや弱 10YR4/4褐色シルトブロック 5% 炭化物粒φ 2mm 1%
 - 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり共中 マサ土粒φ 2mm 3%
 - 4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性中 しまりやや強 10YR2/1黒色シルトブロック 10%
 - 5 10YR4/6褐色シルト 粘性・しまり共やや強 10YR2/3黒褐色シルトブロック 10%
 - 6 10YR8/4浅黄橙色砂質シルト 粘性弱 しまり中 炭化物粒φ 1mm 微量
 - 7 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 炭化物φ 1mm 1%
 - 8 10YR5/8黄褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや強 マサ土粒 5%
 - 9 10YR5/8黄褐色シルトと10YR7/4にぶい黄褐色砂質シルトとの混合土 (50:50) 粘性やや弱 しまりやや強
 - 10 10YR7/4にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱
 - 11 10YR5/6黄褐色シルト 粘性・しまり共やや弱
 - 12 10YR8/4浅黄橙色砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや強
 - 13 7.5YR5/4にぶい褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり中 (基盤層)



2号土坑



- (A-A', B-B')
- 1 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 炭化物φ 2mm 1%未満
 - 2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや強 炭化物φ 1mm 微量 マサ土粒φ 1~2mm 3%
 - 3 10YR5/6黄褐色シルト 粘性やや弱 しまり強 マサ土粒φ 1mm 5%
 - 4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 炭化物φ 2mm 1%
 - 5 10YR5/8黄褐色シルト 粘性・しまり共中
 - 6 10YR3/3暗褐色シルトと10YR5/6黄褐色シルトの混合土 (60:40) 粘性中 しまりやや強 マサ土粒φ 2mm 3%
 - 7 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 しまり強 炭化物φ 5mm 1%未満
 - 8 10YR3/2黒褐色シルトと10YR6/4にぶい黄褐色シルトの混合土 (50:50) 粘性中 しまり強 炭化物φ 1mm 3% マサ土粒φ 3mm 5%
 - 9 10YR6/6明黄褐色シルト 粘性弱 しまり強
 - 10 7.5YR5/6明褐色シルト 粘性・しまり共やや弱 炭化物微量含む
 - 11 10YR5/8黄褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや強 炭化物 3%



第16図 1・2号土坑

〔出土遺物・時期〕 I層下位から検出面にかけて縄文から弥生時代にかけての土器片が出土しているが、埋土中からの出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

2号土坑（第16図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕 調査区東尾根部、II C 1 h～II C 1 i グリッドに位置する。検出面は表土直下のIX層（マサ土）上面で、黒褐色の楕円形プランとして確認した。

〔規模・形状〕 平面形は開口部径 3.87 × 2.26m の楕円形を呈する。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは最深部で 70 cmを測る。

〔埋土〕 11層からなり、黒褐色シルトと黄褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈するが、木根による攪乱が著しく、埋土との分層が難しい。

〔出土遺物・時期〕 I層下位から検出面にかけて縄文から弥生時代にかけての土器片が出土しているが、埋土中からの出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

3号土坑（第17図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕 調査区南谷部、II B 7 i～II B 8 i グリッドに位置する。木材切り出し道路を造成した際に生じた盛土の直下、IX層中（マサ土面）での検出である。暗褐色の楕円形プランとして確認した。

〔規模・形状〕 斜面地に位置するため、南辺は崩落・流出している。また、木材切り出し道路により遺構の上位が削平されており、全容は不明である。残存する平面形は開口部径 1.51 × (1.04) m の円形を呈する。短軸は推定値である。北側の壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは最深部で 32 cmを測る。

〔埋土〕 4層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。底面の中心部および、壁面が被熱している。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物はなく、時期は不明である。

4号土坑（第17図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部、II B 4 h～II B 4 i グリッドに位置する。検出面は埋没沢VII層上面で、黒褐色の楕円形プランとして確認した。

〔規模・形状〕 平面形は開口部径 2.37 × 1.15m の楕円形を呈する。断面形は楕円で、深さは最深部で 36 cmを測る。

〔埋土〕 6層からなり、黒褐色～にぶい黄褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物はなく、時期は不明である。

5号土坑（第17図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕 調査区南谷部、II C 8 f グリッドに位置する。検出面はIX層（マサ土）上面で、暗褐色の楕円形プランとして確認した。

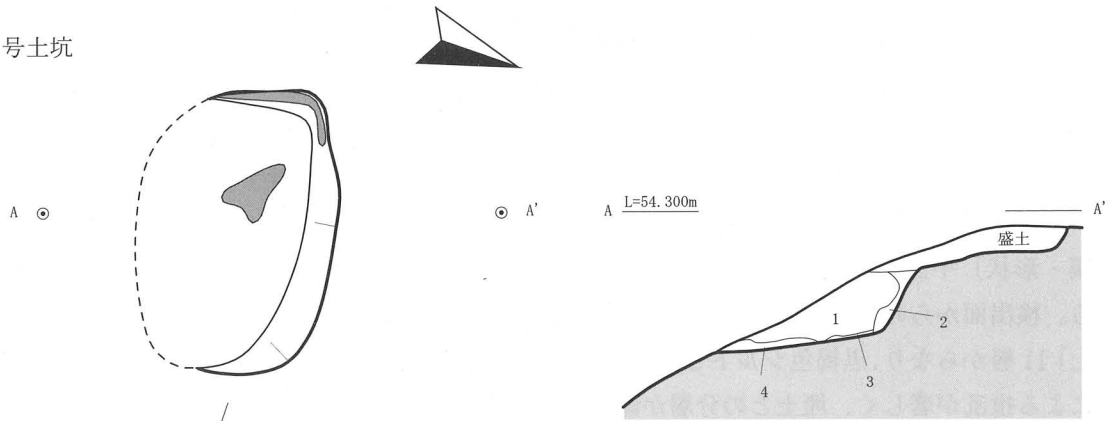
〔規模・形状〕 平面形は開口部径 0.96 × 0.89m の隅丸方形を呈する。断面形は楕形で、深さは最深部で 44 cmを測る。

〔埋土〕 3層からなり、黒褐色～褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物はなく、時期は不明である。

2 検出遺構

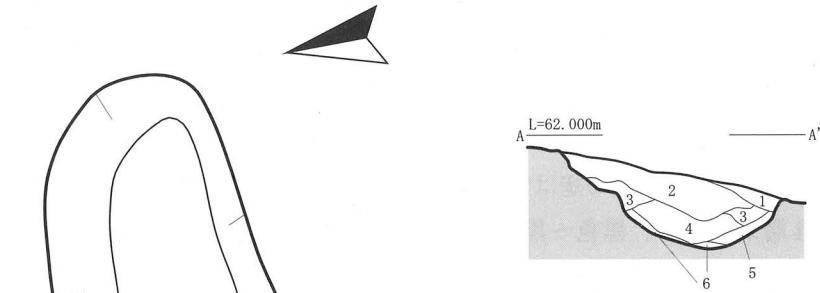
3号土坑



II B 8 J から
西に1m

- (A-A')
- 盛土 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトと10YR6/6明黄褐色マサ土との混合土 (50 : 50) 粘性弱 しまりやや強
 - 1 10YR3/1黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや強 マサ土粒全体に2%
 - 2 10YR3/1黒褐色砂質シルトと10YR5/6黄褐色砂質シルトとの混合土 (50 : 50) 粘性弱 しまりやや強
 - 3 5YR2/3極暗赤褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中 (焼土含む)
 - 4 10YR2/1黒色シルト 粘性・しまり共中 炭化物粒1%

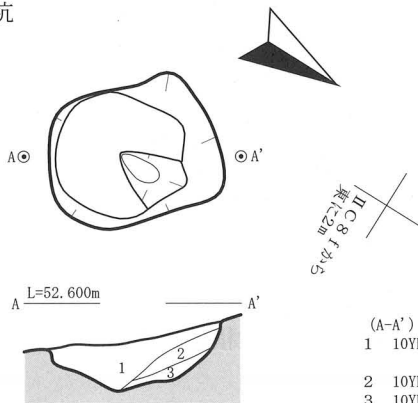
4号土坑



II B 4 i

- (A-A')
- 1 10YR5/3にぶい黄褐色シルト 粘性中 しまり強 マサ土粒3%
 - 2 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中 しまり強 炭化物粒3%
 - 3 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性弱 しまり強 マサ土粒3%
 - 4 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中 しまり強 炭化物粒1%未満
 - 5 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性弱 しまり強
 - 6 10YR4/4褐色シルト 粘性弱 しまり強

5号土坑



II C 8 f から
東に2m

- (A-A')
- 1 10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/6褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混合土 (40 : 30 : 30) 粘性弱 しまりやや弱
 - 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト 粘性・しまり共弱 にぶい黄褐色砂がラミナで入る (水成)
 - 3 10YR4/6褐色粘質シルト (地山) 粘性・しまり共中 10YR3/1黒褐色シルトブロック20%



第17図 3~5号土坑

焼土遺構

1号焼土遺構 (第18図、写真図版10)

[位置・検出状況] 調査区北谷部、II B 3 i ~ II B 3 j グリッドに位置する。検出面は北谷部III層上面で、埋没沢IV層まで掘り込まれている。中央部が暗褐色、縁辺部が明黄褐色シルトの不整隅丸方形プランとして確認した。

[規模・形状] 平面形は1.09mが限度×1.07mの不整な隅丸方形を呈する。断面形は皿状を呈し、北東側の壁は緩やかに外傾し、それ以外は急角度で外傾して立ち上がる。

[埋土] 11層からなり、黒色~黒褐色シルト主体で構成される。底面と壁面に近い5~9層は焼土ブロックと炭化物の混じりが著しい。底面は炭化物がほぼ全域に散在し、壁面は被熱している。

[出土遺物] 7層から炭化材が出土しており、肉眼鑑定の結果、センノキという結果を得ている。また、炭化種子が出土しており、樹種同定の結果、樹木種実とオオムギという結果を得ている。

[時期・性格] 詳細な時期は不明であるが、埋土の状態から、炭窯もしくはそれに近い性格の遺構であると考えられる。

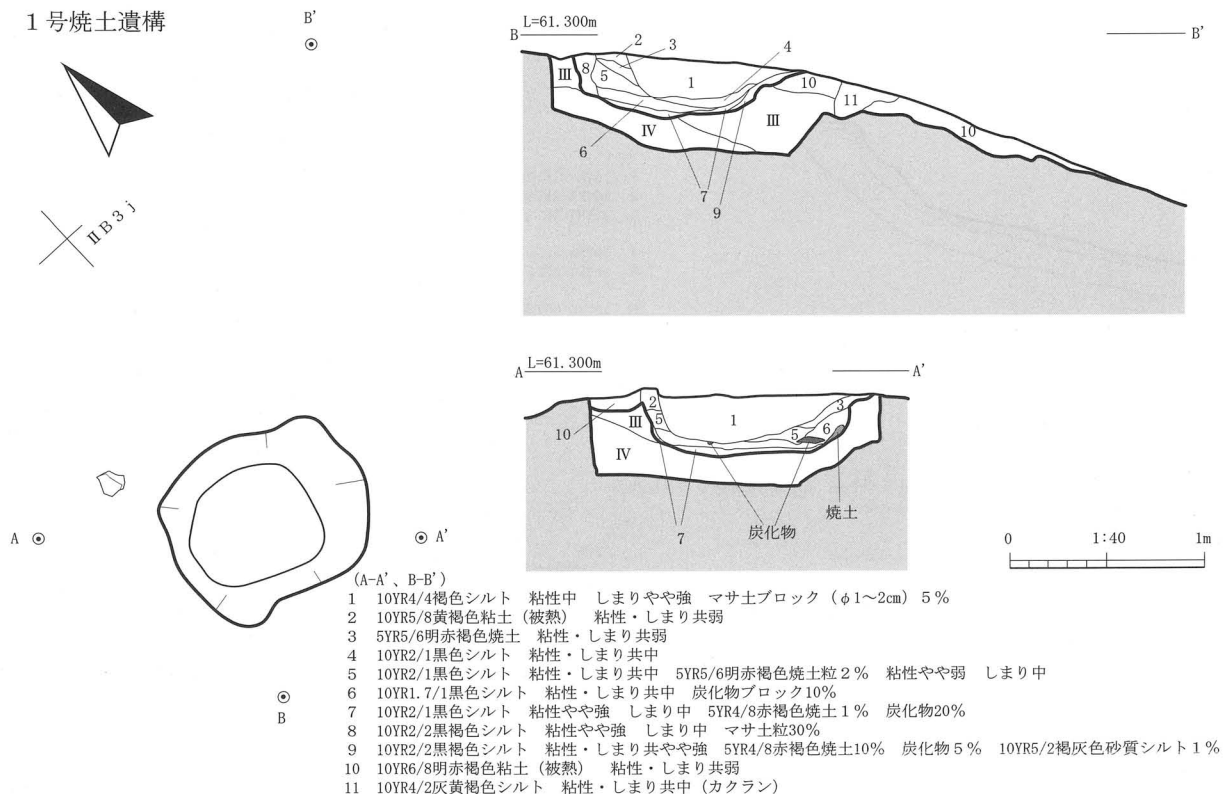
(鈴木)

道路状遺構

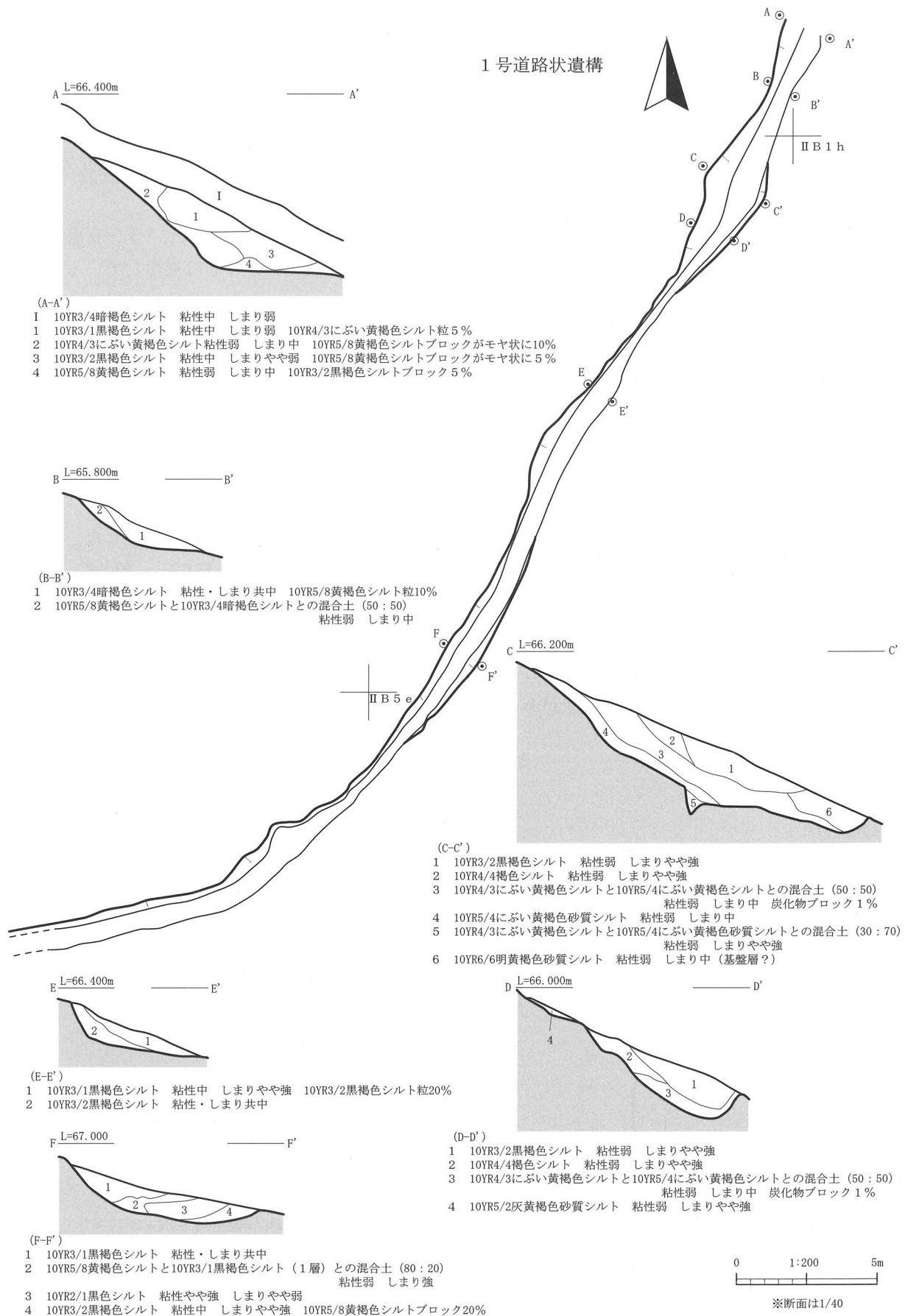
1号道路状遺構 (第19図、写真図版10・11)

中央尾根部東斜面縁辺から、等高線に沿うように走る黒褐色の帯状プランとして確認した。II B 5 e グリッドほかに位置する。検出面は表土直下II層上面である。規模は長さ45.93m、幅0.87~2.4mの範囲に収まる。埋土は暗褐~黒褐色シルト主体で構成されるが、下位はマサ土小ブロックを若干含み硬くしめる。遺構のプランは北東-南西方向にかけて認められ、西側斜面に回ったところで徐々に薄くなっている。表土直下で確認されたこと、形状などから近世~近代に形成された山仕事に関わる踏分け道のようなものであった可能性がある。

1号焼土遺構



第18図 1号焼土遺構



第19図 1号道路状遺構

3 出土遺物

今回の調査による出土遺物の内訳は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、石器、石製品、鉄製品、金属製品である。いずれも量は少なく、総量は大コンテナ（40 × 30 × 30 cm）でおおよそ5箱分である。以下、種類ごとに概観する。

1 縄文土器（第56図、写真図版37）

縄文土器は大コンテナ1箱分の量が出土している。13点を掲載、11点を図示した。すべて深鉢の細片で、器形の判明するものはない。北谷部の埋没沢付近にまとまりが見られる。出土層位はIV～VI層である。48は北谷4区から出土した。口縁が肥厚し、キャリパー状に内湾するもので、隆沈線により渦巻文が作りだされている。49は口縁部が隆帯と深い沈線との組み合わせで凹状となる。50～53は隆沈線による渦巻きや縦位の区画を持ち、区画内にLRが縦位に施紋される。55は3本1組の浅く細い沈線による縦位の文様が施される。57・58は口縁部が太隆帯による貼り付けにより肥厚する。これらは口縁部器形や文様の特徴などからおおむね中期中葉（大木8b式期）の特徴を持つ。

2 弥生土器（第56図、写真図版37）

11点を掲載、10点を図示した。61～64は北谷部沢筋黒色層（IV～VI層）、同区トレンチ掘削時に出土した甕の口縁部片で、2本1組の平行沈線によって区画された内部に交互刺突が施されるものである。地紋としていずれも付加条（L）が施される。61は縦位・斜位回転により方向の異なる文様を施紋している。65～68は東尾根、北谷、南谷から出土した甕片である。地紋として付加条（L）が施される。66は外面、65・68は内外面に炭化物が付着する。69～71は北谷、東尾根から出土した甕片で、地紋として付加条（R）が施される。70は底部にも施紋される。これらは文様の特徴から弥生時代後期に相当するものと思われる。

3 土師器・須恵器（第20～23図、写真図版12・13）

本遺跡の土師器はすべて竪穴住居内から出土している。37点を掲載、33点を図示した。いずれの器種もロクロを使用せずに製作される。須恵器は伴わない。これらは器種、製作技法などの特徴からおおむね8世紀代の特徴を持つ。

坏 1・2・4号竪穴住居から合わせて7点が出土しており、すべて図示した。製作に際し、ロクロは使用されない。1は体部下位に沈線が巡り、底部が平底風の丸底を呈する。2・3・41は体部上～中位に段が巡り、底部丸底を呈するものである。いずれも調整は器面摩耗のため不明な個体が多いが、外面はナデで一部にミガキ調整が施されるもの、内面はミガキ調整後に黒色処理されるものが多い。2は体部に墨書とみられる文様「||||」を持つ。

小形鉢 小形鉢は1号竪穴住居から1点出土している。6は、底部から外傾して短く立ち上がった後、口縁部付近で内湾する器形を呈する。内外面ともにナデ調整される。

小形甕 小形の甕は3点出土している。7は1号竪穴住居から出土した。内外面共に体部ナデ調整されるが、内面口縁部付近のみミガキ調整される。30は2号竪穴住居から出土した。体部は内外面ともにナデ調整され、外面にはナデ調整後、部分的にミガキが入る。

甕 1～4号竪穴住居から合わせて25点が出土しており、22点を図示した。製作に際し、ロクロは使用されない。8は底部からやや外傾して立ちあがり、上端部に最大径を持った後一旦括れて口縁

3 出土遺物

部に至る。頸部形態は弱く屈曲して外傾する。31は頸部が短く外傾する。本遺跡における甕の器面調整は外面ナデかハケメ調整で一部にミガキ調整を持つもの、内面調整はハケメ、ナデ調整が多い。外面のケズリ調整はあっても僅かである。底部に木葉痕を持つものが多い。底部の張り出しは全般的に弱く認められる程度で、強い張り出しを持つものは見られない。

球胴甕 4号竪穴住居から1点のみ出土している。44は底部から大きく外傾し体部中央に最大径を持つもので、球胴状を呈する。頸部は屈曲が強く「く」字状を呈する。調整は外面ナデ+一部ハケメ、内面ハケメ調整される。底部に木葉痕を持つ。

4 石器 (第58図、写真図版38)

石器は遺構内から1点、遺構外から7点出土しており、すべて掲載した。27は1号竪穴住居床面から出土した磨石でデイサイトを素材とする。72は石匙、73はフレイクで、共に頁岩を素材とする。74は凹石で、両方向からの凹面を持つ。石質は流紋岩である。75・77は安山岩製の磨石、76は花崗岩を素材とする敲石である。78は流紋岩を素材とする砥石で、2面使用されている。

5 鉄製品 (第58図、写真図版38・40)

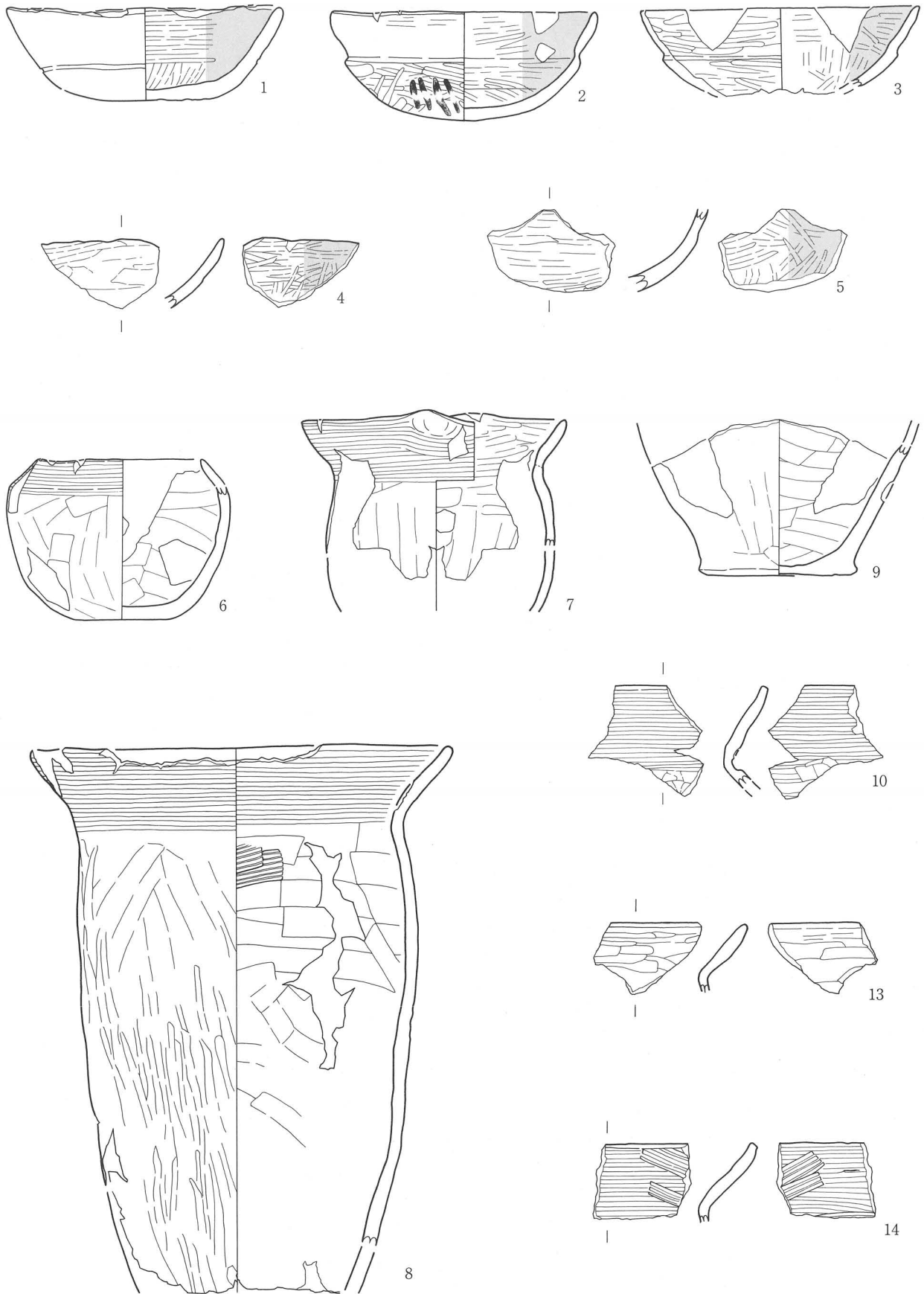
鉄製品は遺構内から2点、遺構外から1点が出土している。36は2号竪穴住居床上10cmから出土した刀子である。40は床面から出土した形態不明の鉄製品で、体部に2カ所の穿孔を持つ。79は南谷4区から出土したU字状工具の刃先である。形状から鋤先と推測される。

6 ガラス製品 (表掲載)

ガラス製品は近代のビール瓶が2点出土した。80は西尾根頂部I層から出土したもので肩部に「登録商標 キリンビール」、底面に「B 37」の陽刻文字がある。81は西尾根斜面からの表採で、肩部に「TRADE MARK」、腰部に「DAINIPPON BREWERY Co., LTD」、底面に「8」の陽刻文字がある。いずれも王冠栓で、1907年以降製造のものである。

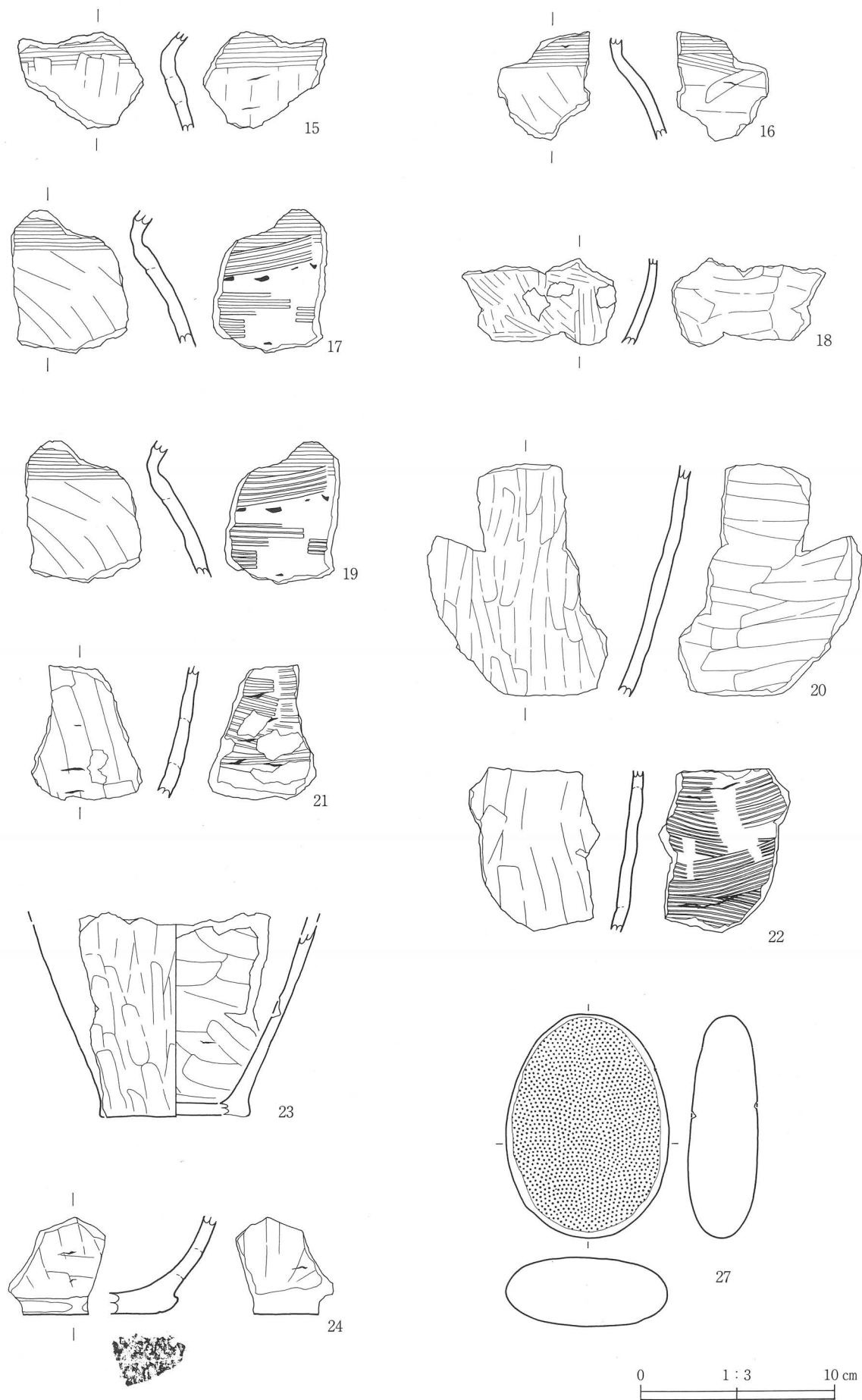
引用・参考文献

- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 『鳩岡崎上の台遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第240集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 『烏田II遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第337集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『峠山牧場I遺跡B地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第320集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 『下構遺跡第2次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第446集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 『烏田II遺跡第2～4次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008 『八木沢野来・賽の神・下大谷地I・賽の神II遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第511集

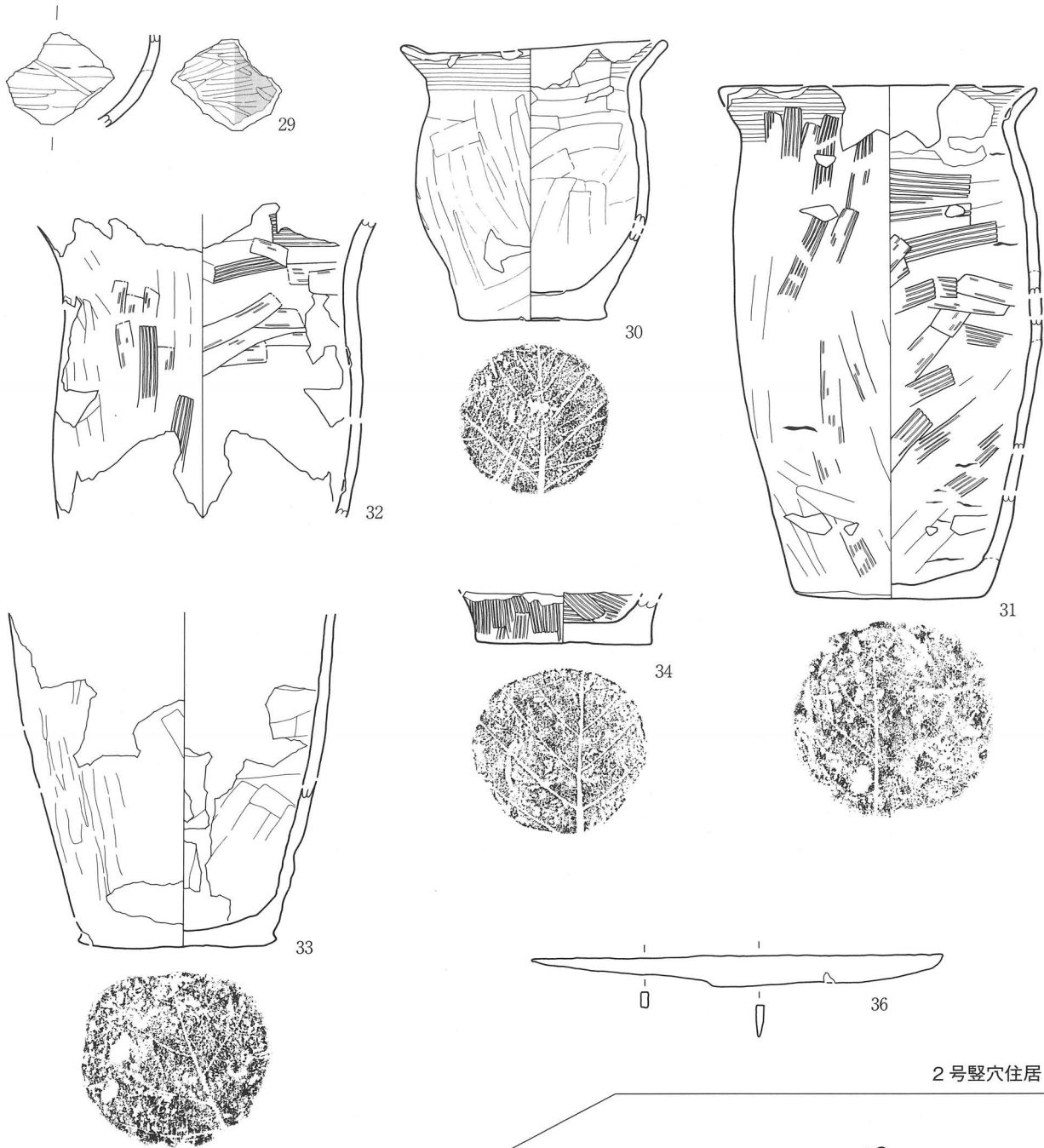


1号竖穴住居

第20图 1号竖穴住居出土遺物(1)

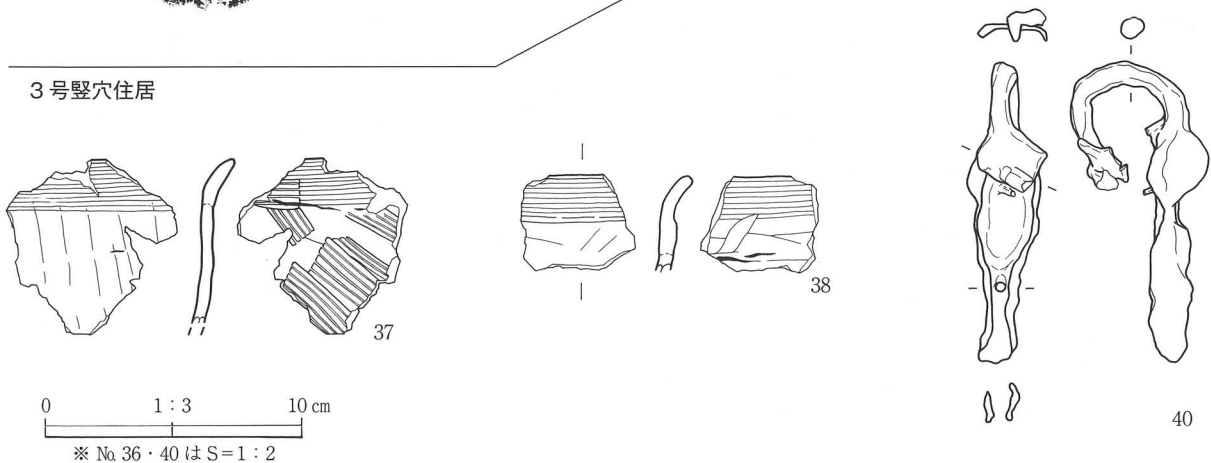


第21图 1号竖穴住居出土遺物(2)



2号竪穴住居

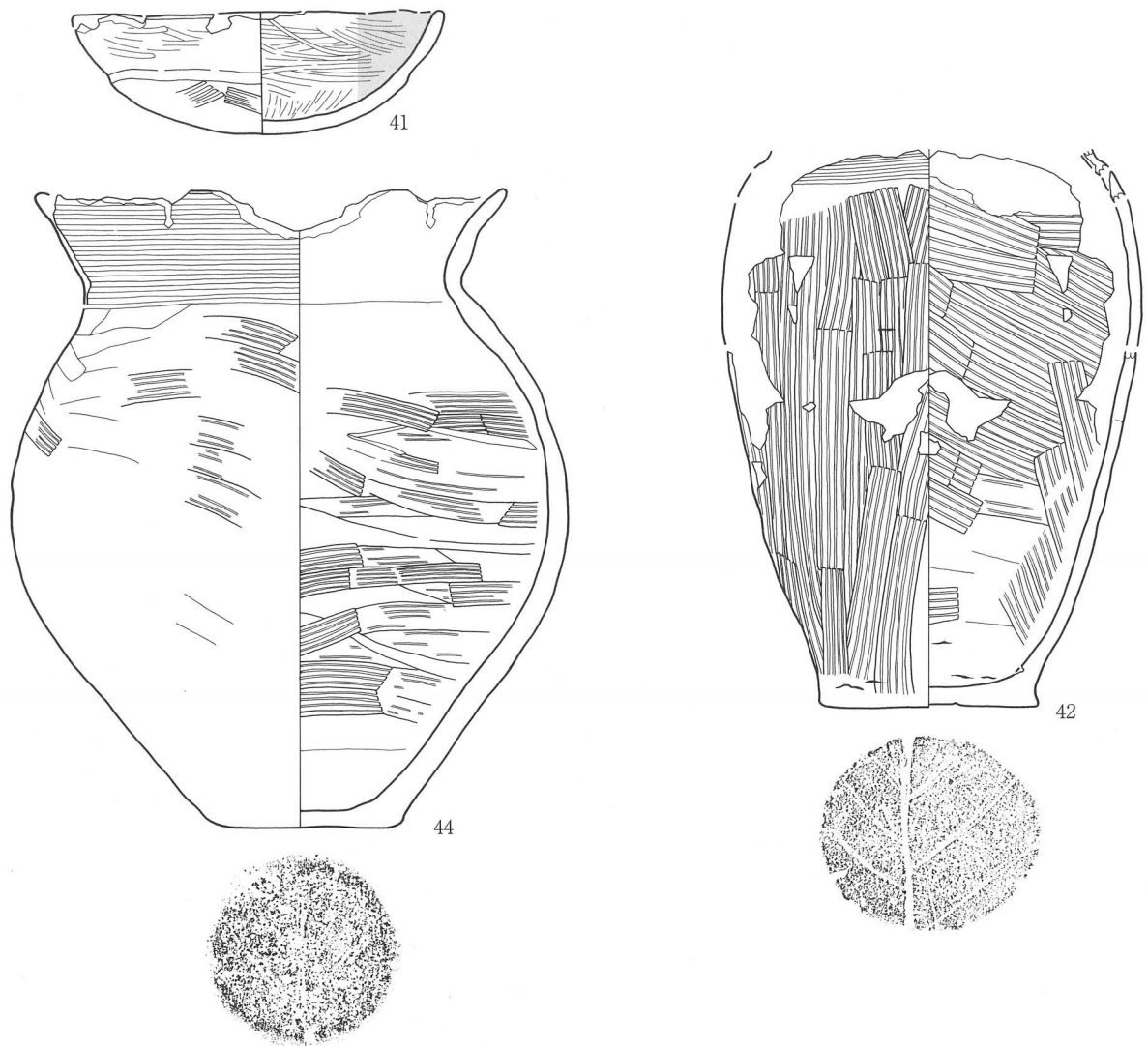
3号竪穴住居



0 1:3 10 cm

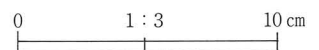
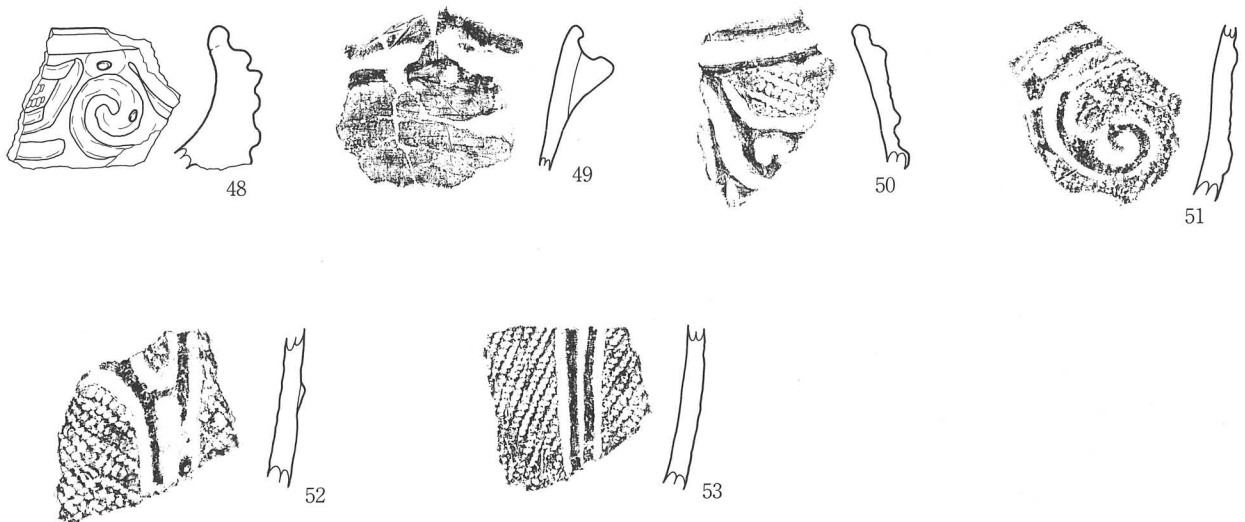
※ No. 36・40はS=1:2

第22図 2・3号竪穴住居出土遺物

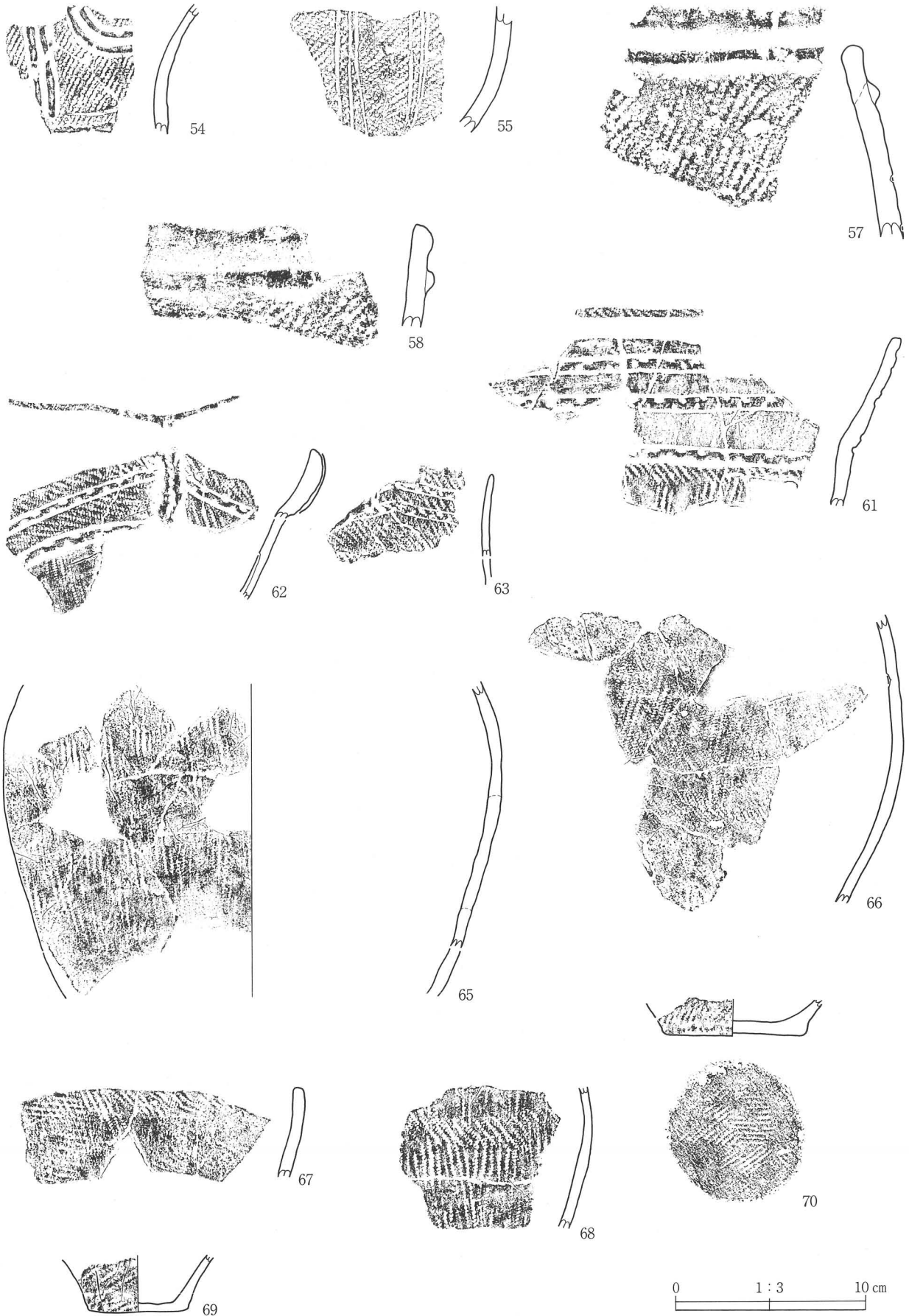


4号竖穴住居

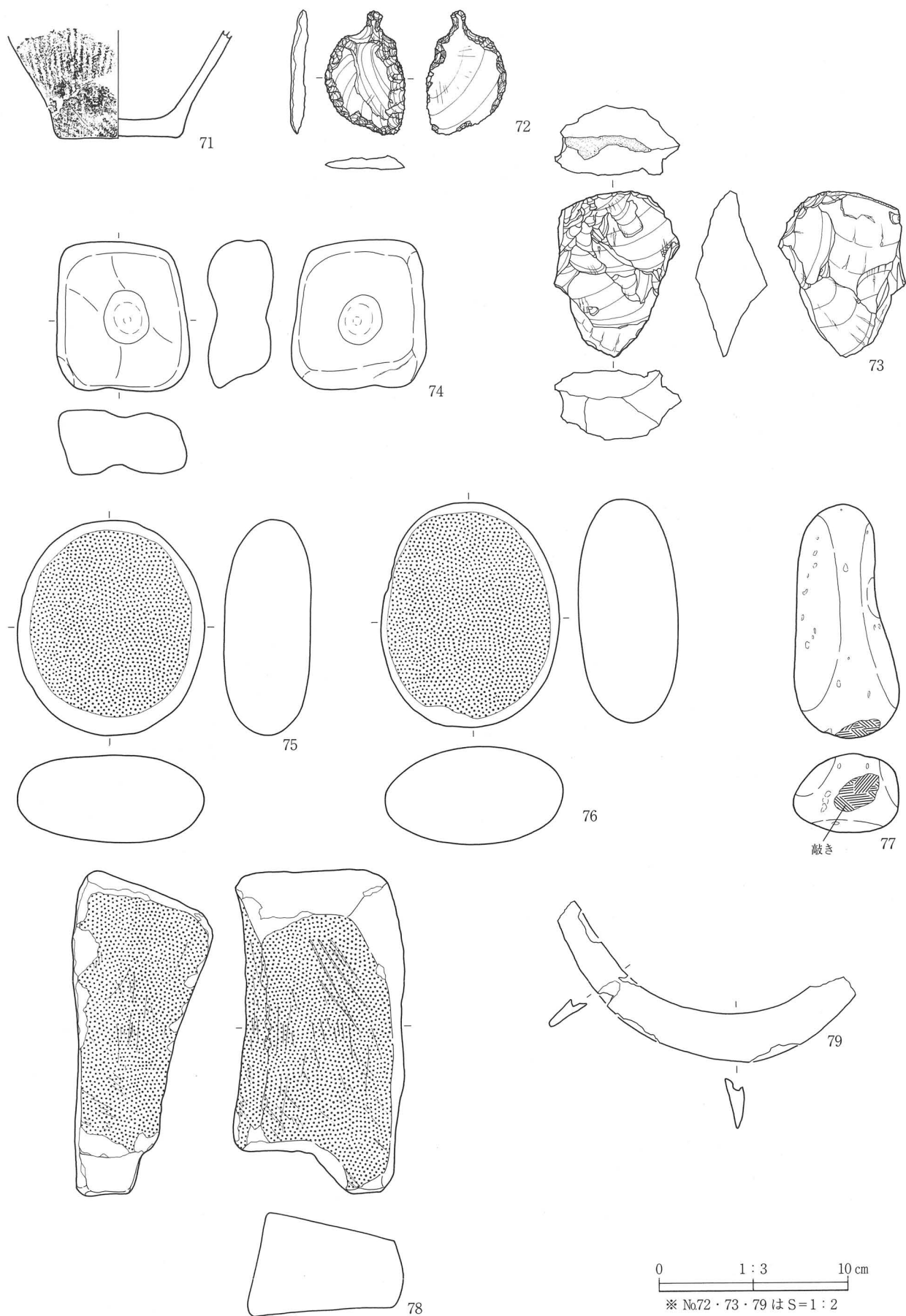
遺構外



第23図 4号竖穴住居出土遺物、遺構外出土遺物(1)



第24図 遺構外出土遺物(2)



第25図 遺構外出土遺物 (3)

第2表 土師器・須恵器観察表

推定値は()、残存値は◇

No.	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整 (旧→新)	主な内面調整 (旧→新)	底部	法量 (cm)			備考
									口径	底径	器高	
1	1号竪穴住居 Q2埋上	土師器	坏	65%	鈍い黄橙	器面摩耗	[口~体] ミガキ	ミガキ	14.55	(7.1)	5.5	内面黒色処理
2	1号竪穴住居 床P-2	土師器	坏	55%	鈍い黄橙	[口~体] ミガキ+一部ナデ	[口~体] ミガキ	ケズリ	(14.0)	7.5	5.8	内面黒色処理・ 体部墨書
3	1号竪穴住居 埋土	土師器	坏	15%	橙	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	-	(14.6)	-	-	内面黒色処理
4	1号竪穴住居 埋土	土師器	坏	10%以下	灰黄褐	[口~体] ナデ+一部ミガキ	[口~体] ミガキ	-	-	-	-	内面黒色処理
5	1号竪穴住居 埋土	土師器	坏	10%以下	明褐	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	-	-	-	-	内面黒色処理
6	1号竪穴住居 Q2埋土	土師器	小形鉢	80%	鈍い黄橙	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	磨耗	(8.7)	5.0	8.5	
7	1号竪穴住居 Q4埋土	土師器	小形甕	30%	鈍い黄褐	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ミガキ [体] ナデ+一部ミガキ	-	13.8	-	(10.7)	
8	1号竪穴住居 Q2床面	土師器	長胴甕	70%	橙	[口] ヨコナデ [体] ナデ+ミガキ	[口] ヨコナデ [体] ナデ+一部ハケメ	-	22.25	-	(29.2)	
9	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	橙	[体] ナデ	[体] ナデ	磨耗	-	8.2	(8.3)	
10	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	-	-	-	-	
11	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	[口] ヨコナデ+一部ハケメ?	[口] ヨコナデ [体] ナデ	-	-	-	-	
12	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	[口] ヨコナデ	[口] ヨコナデ	-	-	-	-	
13	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	-	-	-	-	
14	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	[口] ヨコナデ	[口] ヨコナデ	-	-	-	-	
15	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	-	-	-	-	
16	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	-	-	-	-	
17	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ハケメ	-	-	-	-	
18	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄褐	[体] ミガキ	[体] ナデ	-	-	-	-	
19	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄褐	[体] ケズリ	[体] ナデ	-	-	-	-	
20	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄褐	[体] ナデ	[体] ナデ	-	-	-	-	
21	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	[体] ナデ	[体] 弱いハケメ?	-	-	-	-	
22	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	[体] ナデ	[体] ハケメ	-	-	-	-	
23	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	[体] ナデ+一部ミガキ	[体] ナデ	-	-	(7.8)	(10.6)	
24	1号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	[体] ナデ	[体] ナデ	木葉痕	-	-	(5.1)	
29	2号竪穴住居 埋土	土師器	坏	10%以下	鈍い黄橙	[体] ナデ+一部ミガキ	[体] ミガキ	-	-	-	-	内面黒色処理
30	2号竪穴住居 Q3床面	土師器	小形甕	90%	灰黄褐	[口] ヨコナデ [体] ナデ+一部ミガキ	[口] ヨコナデ [体] ナデ	木葉痕	12.2	6.8	12.9	
31	2号竪穴住居 Q3床上5cm	土師器	長胴甕	80%	鈍い黄橙	[口] ヨコナデ [体] ナデ+一部ハケメ	[口] ヨコナデ [体] ナデ+一部弱いハケメ?	木葉痕	(14.8)	8.8	23.8	
32	2号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	45%	鈍い黄褐	[体] ナデ+一部ハケメ	[体] ナデ+一部ハケメ	-	16.1	-	(14.0)	
33	2号竪穴住居 Q3床上5cm	土師器	長胴甕	30%	鈍い黄褐	[体] ナデ	[体] ナデ	木葉痕	-	(9.0)	(15.5)	
34	2号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄褐	[体] ハケメ	[体] ハケメ	木葉痕	-	8.0	(2.4)	
37	3号竪穴住居 埋土	土師器	長胴甕	10%以下	灰黄褐	[口] ヨコナデ [体] ナデ	[口] ヨコナデ [体] ハケメ	-	-	-	-	

38	3号竪穴住居 埋土	土師器	小形甕	10%以下	鈍い黄褐	(口)ヨコナデ (体)ナデ	(口)ヨコナデ (体)ナデ	—	—	—
39	3号竪穴住居 P2埋土	土師器	長胴甕?	10%以下	鈍い黄褐	器面摩耗	器面摩耗	—	—	—
41	4号竪穴住居 床P-2(Q4)	土師器	坏	80%	橙	[体]ハケメ+ミガキ	[体]ミガキ	ハケメ	148	—
42	4号竪穴住居 カマド燃焼部左側	土師器	長胴甕	60%	灰黄褐	(口)ヨコナデ [体]ハケメ	[体]ハケメ	木葉裏	—	88 (22.9)
43	4号竪穴住居 カマド煙道	土師器	長胴甕	10%以下	鈍い黄橙	器面摩耗	器面摩耗	—	—	—
44	4号竪穴住居 Q4床	土師器	球胴甕	80%	鈍い黄橙	(口)ヨコナデ (体)ナデ・ハケメ	(口)ヨコナデ (体)ハケメ	木葉裏	(18.9)	7.2 26.25

第3表 土製品観察表 ()は推定値・〈〉は残存値を表す

No.	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
25	1号竪穴住居 カマド4層	不明	4.3	3.4	3.2	45.9	焼成粘土塊 (土製支脚片の可能性有)・写真のみ
26	1号竪穴住居 カマド4層	不明	5.8	3.8	2.1	47.4	焼成粘土塊 (土製支脚片の可能性有)・写真のみ

第4表 石器観察表 ()は推定値・〈〉は残存値を表す

No.	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	産地	備考
27	1号竪穴住居 床面S-1	磨石	11.6	8.5	3.6	462.2	デイサイト・中世白亜紀	北上山地	
28	1号竪穴住居 Q1床	磨石	〈5.4〉	〈9.3〉	4.7	262.9	安山岩・新生代古代三紀	北上山地	写真のみ
35	2号竪穴住居 床	磨石	〈7.1〉	〈4.6〉	5.6	381.7	安山岩・新生代古代三紀	北上山地	写真のみ
72	南谷1区 盛土	石匙	4.5	2.8	0.5	6.2	頁岩・古生代末～中生代初	北上山地	
73	北谷T1 IV~VI層	フレイク	6.1	4.5	2.4	60.1	頁岩・古生代末～中生代初	北上山地	
74	西側尾根 表採	凹石	8.0	7.1	3.5	320.0	流紋岩・新生代古代三紀	松山	
75	T12 I層直下	磨石	11.7	10.1	4.7	812.6	安山岩・新生代古代三紀	北上山地	
76	西側尾根斜面 表土	敲石	12.2	9.6	5.3	928.7	花崗岩・I帯・中生代白亜紀	北上山地	
77	北谷T1 III~IV層	敲石	12.6	5.6	4.2	444.2	安山岩・新生代古代三紀	北上山地	
78	東尾根部I層~S105周辺	砥石	17.65	9.2	5.6	1315.7	流紋岩・新生代古代三紀	松山	

第5表 鉄製品観察表 ()は推定値・〈〉は残存値を表す

No.	出土地点	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
36	2号竪穴住居 Q1床上10cm	刀子	12.5	1.0	0.2	9.0	
40	3号竪穴住居 Q4床	不明	8.0	2.0	0.6		
79	南谷4区 Ⅱ層	鋤先	〈10.6〉	1.8	0.75	27.9	

第6表 ガラス製品観察表 ()は推定値・〈〉は残存値を表す

No.	出土地点	種類	色調	備考
80	西尾根頂部 I層	ビール瓶	茶色	肩部：登録商標 キリンビール 底面：B37 /キリンビール 1907～1930年頃 (王冠栓)
81	西尾根急斜面 表採	ビール瓶	茶色	肩部：TRADE MARK 腰部：DAIPPON BREWERY Co., LTD 底面：8 /大日本ビール 1907～1930年頃 (王冠栓)

第7表 縄文土器・弥生土器観察表

No	出土地点	器種名	胎土	文様特徴	時期	備考
45	2号陥し穴状遺構 埋土	深鉢		胴：隆帯+沈線 地紋：単節斜縄文 (LR縦)	縄文中期	写真のみ
46	2号陥し穴状遺構 埋土	深鉢		胴：隆帯+粗い沈線 地紋：単節斜縄文 (LR)	縄文中期	写真のみ
47	IC8f II層	深鉢	砂礫少量	口縁：隆帯+沈線 地紋：単節斜縄文 (LR縦)	縄文中期	写真のみ
48	中央尾根～北谷部 沢筋IV層	深鉢		口縁：隆帯+沈線 (渦巻)	縄文中期	
49	北谷部埋没沢 IV～VI層	深鉢		口縁：隆帯+沈線 (渦巻)	縄文中期	
50	北谷部埋没沢 IV～VI層	深鉢		口～胴：隆帯+沈線 (渦巻) 地紋：単節斜縄文 (LR縦)	縄文中期	
51	北谷部埋没沢 IV～VI層	深鉢		胴：隆帯+沈線 (渦巻) 地紋：単節斜縄文 (LR縦)	縄文中期	
52	北谷T1 IV層	深鉢	砂礫少量	胴：隆帯+粗い沈線 地紋：単節斜縄文 (LR縦)	縄文中期	
53	北谷部埋没沢 IV～VI層	深鉢		胴：隆帯+沈線 地紋：単節斜縄文 (LR縦)	縄文中期	
54	中央尾根～北谷部 沢筋IV層	壺形土器?		胴：隆帯+沈線 (渦巻) 地紋：単節斜縄文 (RL縦)	縄文中期	
55	東尾根東端部 I層	深鉢		胴：細沈線 (縦) 地紋：単節斜縄文 (RL縦)	縄文中期	
56	東尾根東端部 I層	深鉢		胴：細沈線 (曲線) 地紋：単節斜縄文 (RL縦)	縄文中期	
57	北谷部埋没沢 IV～VI層	深鉢	砂礫少量	口縁：太隆帯 地紋：単節斜縄文 (RL縦)	縄文中期	
58	北谷部埋没沢 IV～VI層	深鉢	砂礫少量	口縁：太隆帯 地紋：単節斜縄文 (RL縦)	縄文中期	
59	北谷部 沢筋黑色層 (IV～VI層)	深鉢		胴：細沈線 (曲線)	縄文後期?	写真のみ
60	北谷部 沢筋黑色層 (IV～VI層)	深鉢		胴：細沈線 (曲線)	縄文後期?	写真のみ
61	北谷部 沢筋黑色層 (IV～VI層)	甕		口縁：平行沈線+交互刺突、地紋：付加条 (L)	弥生後期	
62	北谷部 トレンチー拵	甕		口縁：沈線+交互刺突、地紋：付加条 (L)	弥生後期	
63	北谷部 トレンチー拵	甕		口縁：沈線+交互刺突、地紋：付加条 (L)	弥生後期	
64	東尾根東端部 I層	甕		口縁：沈線+交互刺突、地紋：付加条 (L)	弥生後期	写真のみ
65	北谷部 沢筋黑色層 (IV～VI層)	甕		地紋：付加条 (L)	弥生後期	内外面炭化物付着
66	東尾根東端部 I層	甕		地紋：付加条 (L)	弥生後期	外面炭化物付着
67	北谷部 トレンチー拵	甕		地紋：付加条 (L)	弥生後期	
68	南谷4区 IV層	甕		地紋：付加条 (L)	弥生後期	内外面炭化物付着
69	北谷部 トレンチー拵	甕		地紋：付加条 (R)	弥生後期	
70	北谷部 トレンチー拵	甕		地紋：付加条 (R)	弥生後期	底部にも地紋あり
71	東尾根東端部 I層	甕		地紋：付加条 (R)	弥生後期	

V 分析・鑑定

1 隠里Ⅷ遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

隠里Ⅷ遺跡は、岩手県宮古市松山第8地割地内（北緯 39° 37′ 27″、東経 141° 55′ 34″）に所在する。閉伊川南岸の小起伏山地に立地し、標高は 53～77 m である。定対象試料は、1号竪穴住居の床面（Q4）から出土した木炭（No.1：IAAA-81707）、2号竪穴住居の床面（西ベルト）から出土した木炭（No.2：IAAA-81708）、4号竪穴住居の床面（カマド左袖付近）から出土した木炭（No.3：IAAA-81709）、合計3点である。

（2）測定の意義

遺構・遺物の前後関係および集落の継続期間を明らかにする。

（3）化学処理工程

- ①メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- ②酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。
最初の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 1N の水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA 処理において、アルカリ濃度が 1N 未満の場合、表中に AaA と記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- ③試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で 30 分、850℃で 2 時間加熱する。
- ④液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- ⑤精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- ⑥グラファイトを内径 1mm のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

（4）測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HO_x II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5）算出方法

- ①年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- ②¹⁴C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。

^{14}C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- ③ $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(%)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- ④ pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- ⑤ 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv4.0 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(6) 測定結果

^{14}C 年代は、1号竪穴住居の床面(Q4)から出土した木炭が $1190 \pm 30\text{yrBP}$ 、2号竪穴住居の床面(西ベルト)から出土した木炭が $1190 \pm 30\text{yrBP}$ 、4号竪穴住居の床面(カマド左袖付近)から出土した木炭が $1180 \pm 30\text{yrBP}$ である。試料の炭素含有率は、すべて68%前後であり、十分な値であった。暦年較正年代 (1σ) では、780～892ADに3点が含まれ、奈良時代末から平安時代前期前半に相当する。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-81707	No.1	1号竪穴住居 床面(Q4)	木炭	AAA	-24.21 ± 0.21	$1,190 \pm 30$	86.21 ± 0.29
IAAA-81708	No.2	2号竪穴住居 床面(西ベルト)	木炭	AAA	-26.65 ± 0.30	$1,190 \pm 30$	86.27 ± 0.31
IAAA-80709	No.3	4号竪穴住居 床面(カマド左袖付近)	木炭	AAA	-27.89 ± 0.66	$1,180 \pm 30$	86.39 ± 0.36

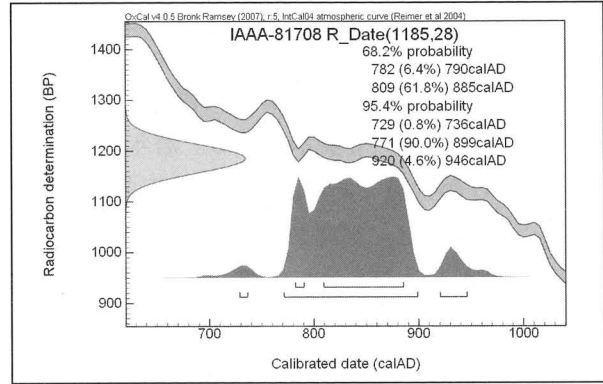
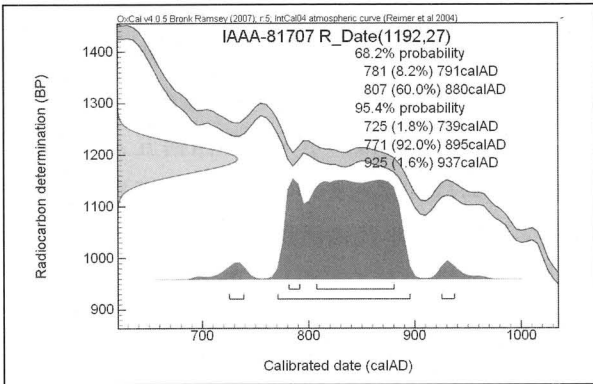
[#2513]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-81707	$1,180 \pm 30$	86.35 ± 0.29	$1,192 \pm 27$	781AD - 791AD (8.2%) 807AD - 880AD (60.0%)	725AD - 739AD (1.8%) 771AD - 895AD (92.0%) 925AD - 937AD (1.6%)
IAAA-81708	$1,210 \pm 30$	85.98 ± 0.30	$1,185 \pm 28$	782AD - 790AD (6.4%) 809AD - 885AD (61.8%)	729AD - 736AD (0.8%) 771AD - 899AD (90.0%) 920AD - 946AD (4.6%)
IAAA-80709	$1,220 \pm 30$	85.88 ± 0.34	$1,175 \pm 33$	780AD - 792AD (7.5%) 805AD - 892AD (60.7%)	730AD - 735AD (0.5%) 771AD - 904AD (80.5%) 913AD - 970AD (14.5%)

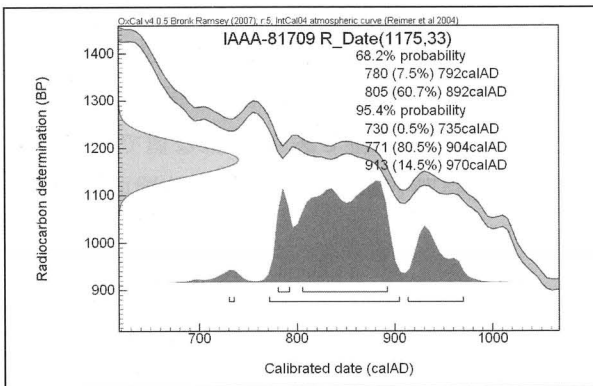
[参考値]

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058



[参考] 暦年較正年代グラフ



2 隠里Ⅷ遺跡より出土した種実（炭化種子同定）

吉川純子（古代の森研究舎）

（1）はじめに

隠里Ⅷ遺跡は、宮古湾から西へ約 3.3km の山地に位置している。分析試料はいずれも古代で、1号焼土遺構、1号炉跡、4号土坑と竪穴住居4軒（1～4号竪穴住居）の試料を水洗して得られた種実である。

（2）同定結果

表1に各遺構より出土した種実の同定結果をまとめた。焼土、土坑関連の遺構では木本種実が多く食用植物は少なかった。1号焼土遺構では、北半部粘土における出土数が多く、ミズキ、広葉樹の芽、ミツバウツギなどを出土し、アサダ、ケヤキ、カエデ属など樹木の種実を出土した。栽培食用植物はオオムギのみ出土した。1号炉跡ではわずかにヤマゴボウとマメ科を出土した。4号土坑ではマメ科を出土したのみであった。

つぎに、竪穴住居跡は1住居のみ食用植物が多く、ほかは樹木種実が多い住居と出土数が少ない住居があった。1号竪穴住居からはオニグルミをわずかに出土したのみであった。2号竪穴住居からはオニグルミ、クリ、コナラ属、トチノキなど食用にする木本をやや多く出土し、オオムギ、キビはわずかな出土だった。食用としない種類ではミズキをやや多く出土した。3号竪穴住居は床面ではスギを多く出土し、イネはわずかであった。竈からはイネを多く出土し、マメ科もわずかに出土した。4号竪穴住居は床面からミズキ、タデ属をわずかに出土し、竈ではササゲ属を出土した。

（3）考察

本遺跡では、焼土関連の遺構と竪穴住居の出土種類に若干の違いが見られた。すなわち、焼土関連の遺構では食用としないアサダやカエデ属、ミズキなどの樹木がほとんどであるのに対し、住居からは食用とするオニグルミやクリ、イネなどに少量のミズキやミツバウツギなどの樹木種実を随伴した。また、3号竪穴住居のみで穀類のイネがやや多く出土したが、2号竪穴住居からはオオムギとキビを少量しか出土しないなど、穀類の出土は全体としてかなり少ない。竈はその構造上、燃焼残渣を頻繁に掻き出して燃焼効率を良く保っていたと考えられ、この清掃行為が一般的に炭化種実等の出土量が少なくなっている要因ではないかと考えられる。焼土関連遺構では木本の種実を多く出土していることから、これらの種実がついた枝を焼いた可能性がある。

昨年度は近接する隠里Ⅲ遺跡と谷を隔てた木戸井内Ⅳ遺跡において鍛造工房を含む住居跡を中心とした遺構群から出土した種実を調査している。木戸井内Ⅳはオオムギ、コムギにキビ、ヒエと雑穀に依存した傾向が見られたが、隠里Ⅲはイネとアワ、キビとクリで、出土する種類に違いが見られ雑穀への依存度は低い傾向にあった。隠里Ⅷではイネとオニグルミ、クリなどの堅果を出土し、隠里Ⅲとやや類似した出土傾向が見られる。

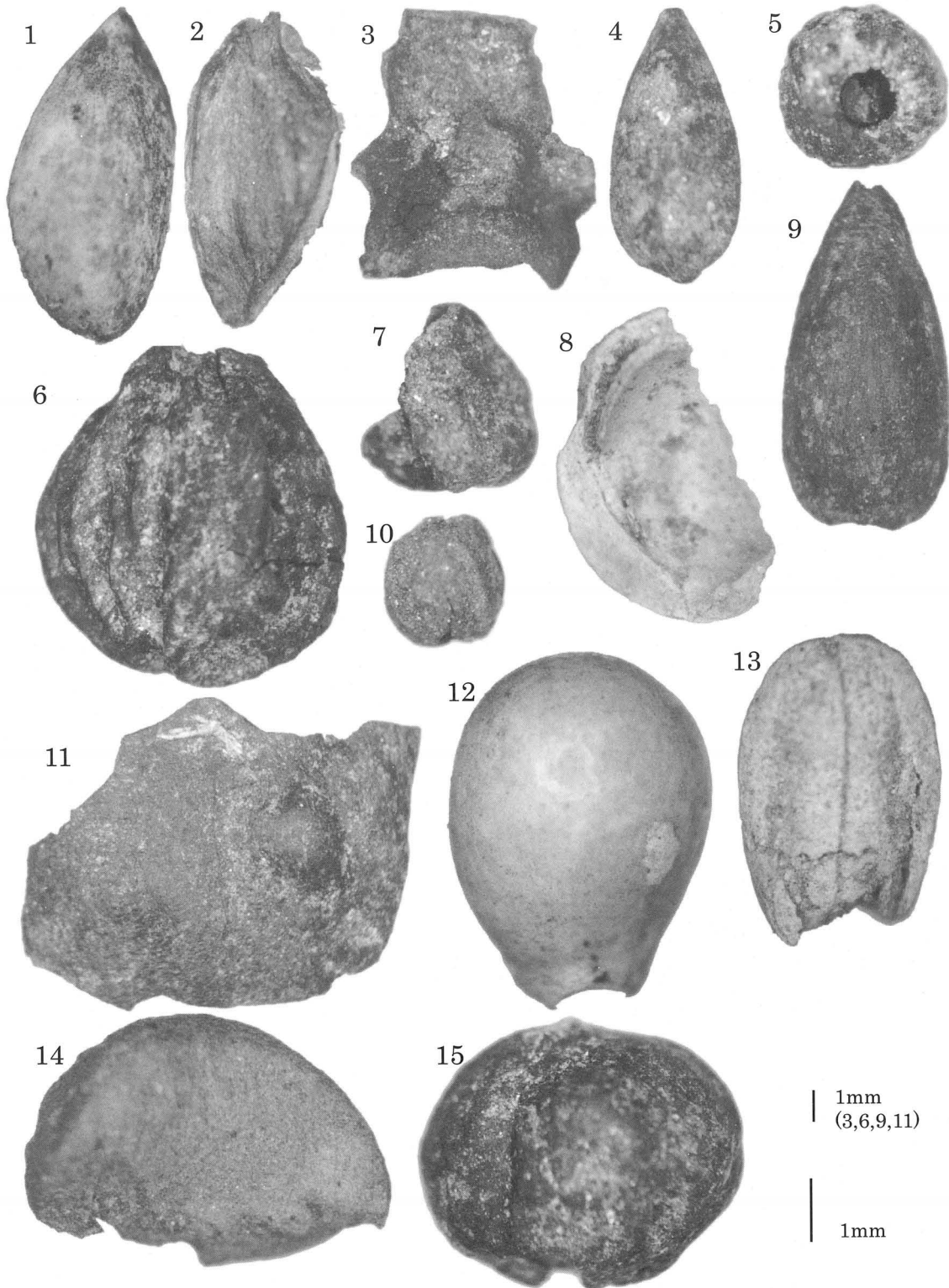
表 1-1 隠里Ⅷ遺跡より出土した種実 (1)

分類群	遺構	1号焼土遺構					1号炉跡		
		主体部 炭化物層	主体部 粘土	主体部 西	北半部 粘土	下位 黄褐色土	埋土	北側 焼土	南側 礫の下
木本	出土部位								
マツ属	種子								
スギ	種子								
オニグルミ	炭化内果皮破片								
アサダ	炭化果実	1	1						
クリ	炭化子葉								
コナラ	炭化幼果								
コナラ属	炭化子葉半分								
ケヤキ	炭化果実			1					
サクラ属	核破片								
カエデ属	炭化果実			1					
トチノキ	炭化種皮破片								
クマヤナギ属	内果皮								
クサギ	内果皮破片								
ミツバウツギ	種子	1	1	4		1			
ミズキ	炭化内果皮		3		13		1		
広葉樹	炭化芽				5				
草本									
イネ	炭化胚乳								
オオムギ	炭化種子				2				
キビ	穎果								
エノコログサ属	穎果								
不明穀類	炭化種子				1				
タデ属	炭化果実						2		
ヤマゴボウ	種子								1
ササゲ属	炭化種子								
マメ科	炭化種子								
タケニグサ	炭化種子	1						1	
クサノオウ属	種子				1				
エノキグサ	炭化種子								
セリ科	炭化種子								
オミナエシ属	炭化果実								
不明	炭化果実		3						
	炭化種実				4				

分類群	遺構	4号土坑	1号竪穴 住居 竈南側	2号竪穴住居						
				北ベルト 床	南ベルト 床	炭層 a2	炭層 a3	炭層 a4		
木本	遺構	出土部位								
マツ属榎維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon	種子	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ	Cryptomeria japonica (L.f.)D.Don	種子	-	-	-	-	-	-	-	-
オニグルミ	Juglans sieboldiana Maxim.	炭化内果皮破片	-	-	-	-	11	-	-	-
アサダ	Ostrya japonica Miq.	炭化果実	-	-	-	-	-	-	-	-
クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	炭化子葉	6	-	-	1	-	-	4	-
コナラ	Quercus serrata Murray	炭化幼果	-	1	-	-	5	-	1	-
コナラ属	Quercus	炭化子葉半分	-	-	-	-	1	-	1	-
ケヤキ	Zelkova serrata (Thunb.)Makino	炭化果実	-	-	-	-	-	-	-	-
サクラ属	Prunus	核破片	-	-	-	-	2	-	-	-
カエデ属	Acer	炭化果実	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ	Aesculus turbinata Blume	炭化種皮破片	-	-	-	-	-	1	-	-
クマヤナギ属	Berberchia	内果皮	-	-	-	1	-	-	-	-
クサギ	Clerodendron trichotomum Thunb.	内果皮破片	-	-	-	-	-	-	-	-
ミツバハツツギ	Staphylea bumalda (Thunb.) DC.	種子	-	-	-	-	-	1	-	-
ミズキ	Cornus controversa Hemsley	炭化内果皮	-	1	-	1	3	3	3	-
広葉樹		炭化芽	-	-	-	-	-	1	-	-
草本										
イネ	Oryza sativa L.	炭化胚乳	-	-	-	-	-	-	-	-
オオムギ	Hordeum vulgare L.	炭化種子	-	-	-	-	-	1	-	-
キビ	Panicum miliaceum L.	穎果	-	-	-	-	-	-	1	-
エノコログサ属	Setaria	穎果	-	-	-	-	-	-	-	-
不明穀類		炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	-
タデ属	Persicaria	炭化果実	-	-	-	-	-	-	1	-
ヤマゴボウ	Phytolacca esculenta Van Houtte	種子	-	-	-	-	-	-	-	-
ササグサ属	Vigna	炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	炭化種子	-	-	-	-	-	-	1	-
タケニグサ	Macleaya cordata (L.)R.Br.	種子	1	-	-	-	-	-	-	-
クサノオウ属	Chelidonium	種子	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキグサ	Acalypha australis L.	炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	炭化果実	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	Patrinia	炭化果実	-	-	-	-	-	-	-	-
不明		炭化種実	-	-	-	-	-	-	-	-

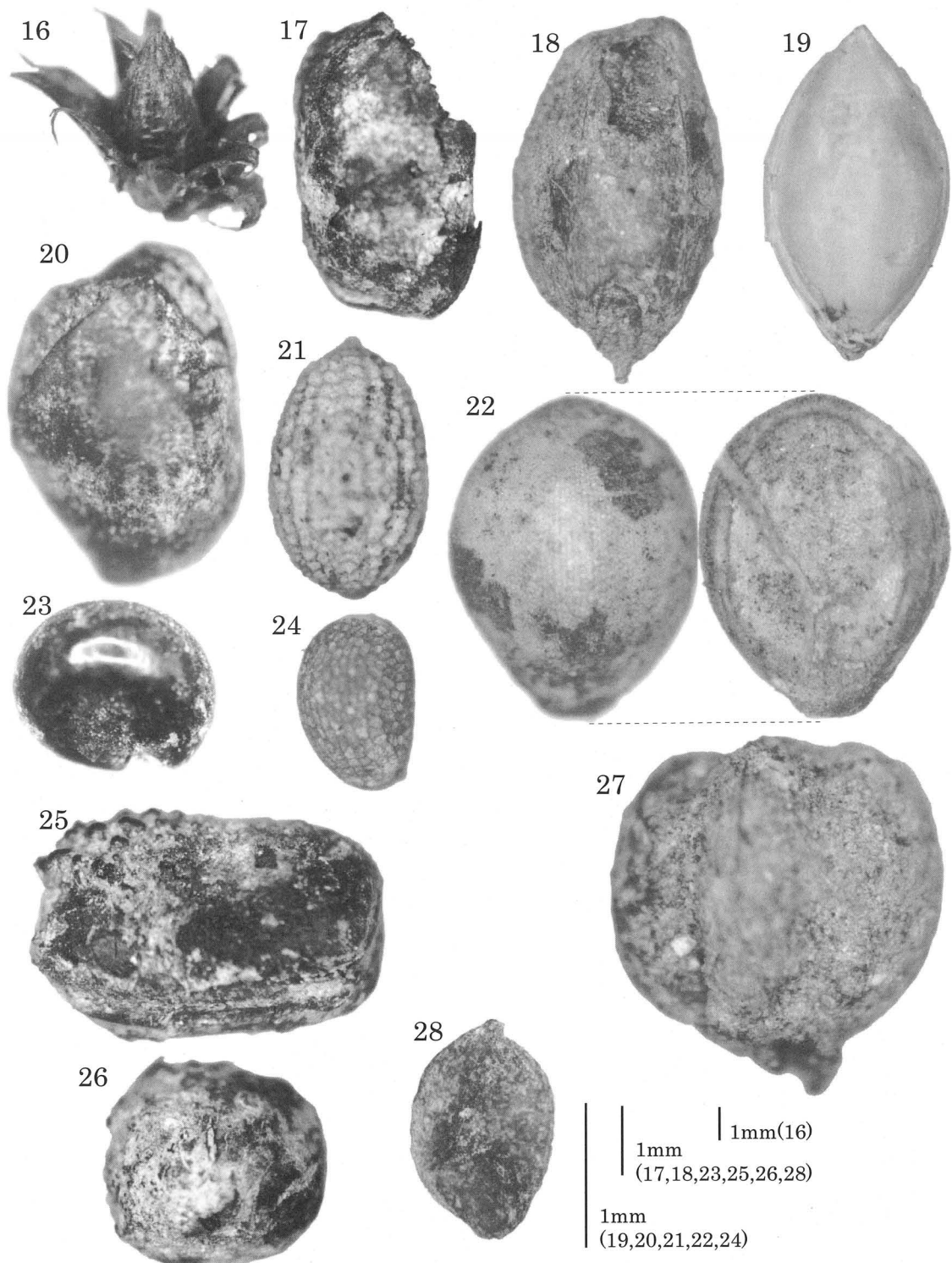
表 1-2 隠里Ⅷ遺跡より出土した種実 (2)

分類群	遺構	3号竪穴住居					4号竪穴住居													
		東ベルト 床	北西 貼床	貼床	竈煙道	竈周辺	床Q2	床面	竈煙道											
										出土部位	種実	数量	数量	数量						
木本																				
マツ属 複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon																			
スギ	Cryptomeria japonica (L.f.)D.Don			20																
オニグルミ	Juglans sieboldiana Maxim.																			
アサダ	Ostrya japonica Miq.																			
クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.																			
コナラ	Quercus serrata Murray																			
コナラ属	Quercus																			
ケヤキ	Zelkova serrata (Thunb.)Makino																			
サクラ属	Prunus																			
カエデ属	Acer																			
トチノキ	Aesculus turbinata Blume																			
クマヤナギ属	Berchemia																			
クサギ	Clerodendron trichotomum Thunb.																			
ミツバウツギ	Staphylea bumalda (Thunb.) DC.																			
ミズキ	Cornus controversa Hemsley																			
広葉樹																				
草本																				
イネ	Oryza sativa L.	2																		
オオムギ	Hordeum vulgare L.																			
キビ	Panicum miliaceum L.																			
エノコログサ属	Setaria																			
不明穀類																				
タデ属	Persicaria																			
ヤマゴボウ	Phytolacca esculenta Van Houtte																			
ササゲ属	Vigna																			
マメ科	Leguminosae																			
タケニグサ	Macleaya cordata (L.)R.Br.																			
クサノオウ属	Chelidonium																			
エノキグサ	Acalypha australis L.																			
セリ科	Umbelliferae																			
オミナエシ属	Patrinia																			
不明																				



図版1 隠里Ⅷ遺跡より出土した種実(1)

1.マツ属複維管束亜属、種子 2.スギ、種子 3.オニグルミ、炭化内果皮破片 4.アサダ、炭化果実 5.コナラ、炭化幼果 6.クリ、炭化子葉 7.ケヤキ、炭化果実 8.サクラ属、核破片 9.コナラ属、炭化子葉 10.カエデ属、種子 11.トチノキ、炭化種皮 12.ミツバウツギ、種子 13.クマヤナギ属、内果皮 14.クサギ、内果皮 15.ミズキ、炭化内果皮
 1, 2, 8, 14:3号竪穴住貼床 5, 6, 9, 15:2号竪穴住炭層a4 3, 11, 12:2号竪穴住炭層a3 13:2号竪穴住炭層a2 4, 7, 10:1号焼土遺構北半部粘土



図版2 隠里Ⅷ遺跡より出土した種実(2)

16.広葉樹、半炭化芽 17.イネ、炭化胚乳 18.オオムギ、炭化種子 19.イヌビエ、穎果
 20.タデ属、炭化果実 21.タケニグサ、種子 22.キビ、穎果 23.ヤマゴボウ、種子 24.
 クサノオウ属、種子 25.ササゲ属、炭化種子 26.マメ科、炭化種子 27.セリ科、炭化
 果実 28.オミナエシ属、炭化果実

19, 21, 24:3号竪穴住貼床 27:3号竪穴住竈周辺 17, 26, 28:3号竪穴住竈煙道 25:4号
 竪穴住竈煙道 20, 22:2号竪穴住炭層a4 16:2号竪穴住炭層a3 18:1号焼土遺構北半部
 粘土 23:1号炉跡南側礫の下

VI 総 括

今回の発掘調査、および整理作業で明らかになった事項は下記のとおりである。

1 立 地

遺跡は、宮古湾から西へ約 3.5km の地点に位置する小起伏山地に立地する。調査区は東側を南北に入る沢（現道）により区画され、西側を東－西方向に延びる谷によって限られる。隠里Ⅷ遺跡はその間の尾根部とその斜面、および谷部にかかる。今回の調査では縄文時代から奈良時代までの遺構や遺物が確認され、遺構は尾根部平坦面～南向き斜面裾の緩斜面に集中する傾向が見られた。

谷部ではⅣ～Ⅴ層に縄文時代の遺物を疎らに包含する層が堆積している。

2 遺 構

検出した遺構は、縄文時代の炉跡 1 基、陥し穴状遺構 6 基、奈良時代の竪穴住居 4 棟、時期不明の土坑 5 基、焼土遺構 1 基、道路状遺構 1 条である。

①縄文時代の遺構

A) 炉跡

西尾根の東向き斜面に位置する。沢筋斜面という立地、明確な床面の掘り込みを伴わない点から単独の炉跡と判断している。遺物は出土していないが、縄文時代の遺物を含むⅣ層黒色土面より下位に構築される点、周辺の旧河道沢筋に縄文時代中期中葉土器の出土範囲が限定されることから、これらと同時期あるいは弥生時代と推定される。

B) 陥し穴状遺構

調査区北東側旧河道から中央尾根平坦面にかけて 6 基検出した。これら陥し穴状遺構は 1 号埋没沢～中央部平坦面にかけて並列的な配置でまとまるもので、等高線に対する向きや位置関係に特に規則性は見出せない。平面形は溝状～楕円形、断面は V 字～U 字形を呈する。いずれもⅦ～Ⅸ層（マサ土面）を掘りこんで構築され、埋土下位にはマサ土の崩落・再堆積土が観察される。上層に縄文時代中期中葉の遺物を疎らに含む埋没沢黒色層が堆積していることから、遺構の時期は埋没沢の形成時期よりも古期と判断される。

②奈良時代の遺構

A) 竪穴住居

東尾根斜面・中央尾根上平坦面から 4 棟を検出した。検出された 4 棟は、尾根上平坦部～南向き尾根斜面にまとまりを持つもので、標高 49～61 m の地点に立地する。竪穴住居の規模は 5.6～3.62m の幅に収まる。カマドは礫を芯材として黄褐色粘土で袖を構築するという手法で共通している。カマドの構築方位は西向き 4、北向き 1 で、傾斜に対して並行に構築されるものが多い。本遺跡の住居はいずれも支柱穴を持たない。2～4号竪穴住居は斜面部に接して作られており、斜面下半部が崩落・消失している。3・4号竪穴住居は重複しており、始め西側にカマドを持つ竪穴住居が、後に東側に少し位置をずらして建て替えられ、その際カマドの位置が北向きへと変化している。3号竪穴住居のカマド周辺には礫片が散らばっており、カマド芯材であったと推測される。4号竪穴住居の床面には土器器甕がつぶれた状態で出土している。これら 4 棟の竪穴住居の床面埋土、カマド、煙道を対象に土壌のフローテーションを実施している。その結果、オオムギ、ヒエ、アワ、イネ、マメなど多種の

炭化種子が得られ、当時の食物利用について知りうる良好な資料となった。また、1・2・4号竪穴住居の前後関係および集落の存続期間を明らかにするために床面出土炭化材の放射性炭素年代測定（AMS測定）を実施している。その結果、780～892ADの幅に3点が含まれ、竪穴住居の時期が8世紀後半代から9世紀代に相当する可能性が高いことが判明した。

③時期不明の遺構

A) 土坑

東・中央尾根斜面から計5基を検出した。明確な出土遺物を伴わないことから時期不明としている。平面形は円形～楕円形を呈し、規模387～89cmの範囲に収まる。1・2号土坑は径387～231cmを測る大形の土坑である。東尾根の北向き斜面に位置するもので、埋土からの遺物を欠くが、基本層序I b層下位から遺構検出面にかけて縄文から弥生時代後期にかけての土器片が比較的まとまりをもって出土している。3号土坑は底面中央が被熱し、淡い焼土が形成されるもので、埋土からは炭化物小片が検出されている。竪穴住居と同様の立地、遺構の状況などから古代の炭窯となる可能性もある。

B) 焼土遺構

調査区北谷部に位置する。検出面はⅢ層上面で、埋没沢Ⅳ層まで掘り込まれている。平面形は不整な隅丸方形で断面皿状を呈する。埋土は黒褐色シルト主体で構成され、底面から壁面に近いところでは焼土ブロックと炭化物が多量に混入する。底面は炭化材片がほぼ全域に散在し、壁面は被熱している。炭化材は肉眼鑑定の結果、センノキという結果を得ている。また、土壌のフローテーション時に炭化種子が検出されており、樹種同定の結果、樹木種実とオオムギという結果を得ている。詳細な時期は不明であるが、埋土の状態から、炭窯もしくはそれに近い性格の遺構であると考えられる。

C) 道路状遺構

中央尾根部東斜面縁辺から、等高線に沿うように走る黒褐色の帯状プランとして確認したものである。表土直下で確認されたこと、形状などから近世～近代に形成された山仕事に関わる踏分け道のようなものであった可能性がある。

3 まとめ

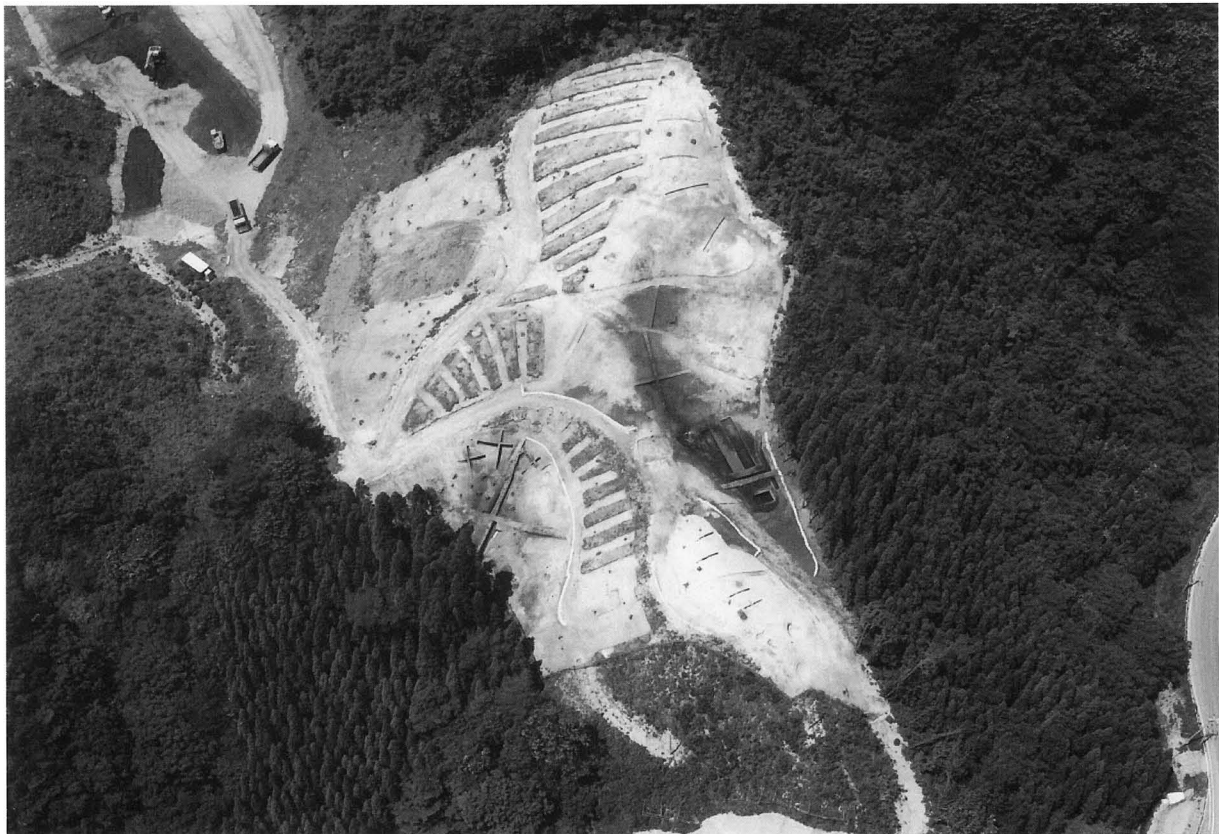
調査の結果、縄文時代から近現代までの遺構や遺物が確認され、この地が狩猟域、居住域などとして断続的に利用されていたことが判明した。このうち縄文時代の陥し穴状遺構、炉跡は東向きの沢筋に作られ、古代の竪穴住居は尾根上平坦地もしくは南向き斜面に沿って作られるなど、時代ごとの遺構の種別と占地においてそれぞれ異なる傾向を示している。縄文時代においては中央尾根東向き斜面の埋没沢から北谷部にかけて、Ⅳ～Ⅴ層の黒色土中から縄文時代中期を主体とする縄文土器が疎らに出土しており、周囲からの流れ込みによって低地に堆積したものと考えられる。このほか陥し穴状遺構が同様の地点から6基まとめて検出されており、当時、低地に集まる獣を狩ることを目的とした罾猟が行われていたことが窺える。縄文時代の住居跡については未検出であるが、周辺における該期の検出例は平成19年度に調査が行われた木戸井内Ⅳ遺跡で大木8 b式期の土器片と縄文時代中期から弥生時代に位置づけられる可能性をもつ竪穴住居2棟が検出されており、遺跡の周辺に小規模な集落が存在している可能性が想定される。古代においては東尾根斜面・中央尾根上平坦面にかけて奈良時代の竪穴住居が4棟作られている。遺物による遺構の時期検討は、資料数が僅少であるため叶わなかったが、床面遺物の放射線炭素年代測定（AMS測定）の結果からは、暦年較正年代で780～892ADの値が得られており、奈良時代末から平安時代前期にかけて営まれた可能性のある集落であることが判明した。

(丸山)

写 真 图 版



遺跡遠景（北西から）



調査区全景（南東から）

写真図版1 遺跡遠景・調査区全景（航空写真）



雑木撤去作業



中央尾根現況



東尾根試掘風景



南谷試掘風景



南尾根トレンチ掘削状況



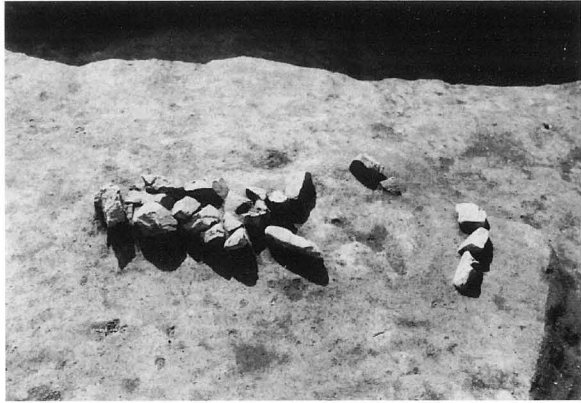
西斜面トレンチ掘削状況



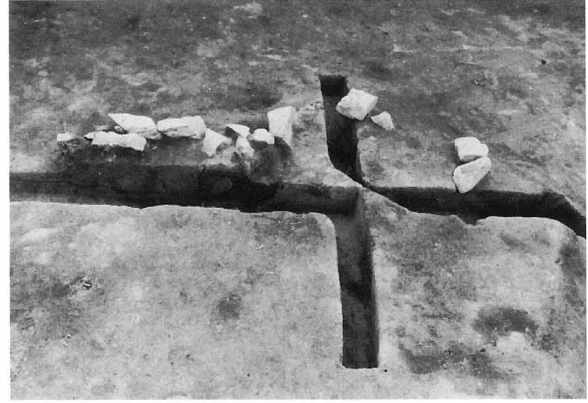
切株除去作業



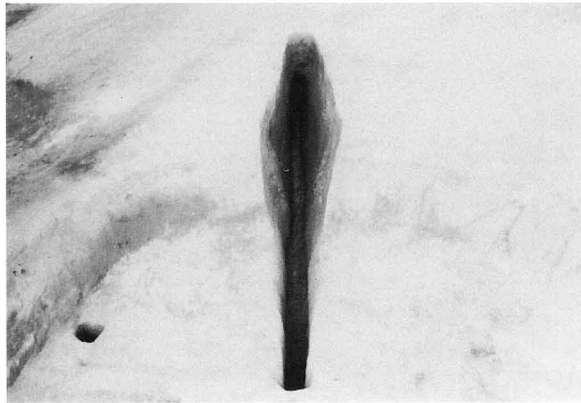
中央尾根検出状況



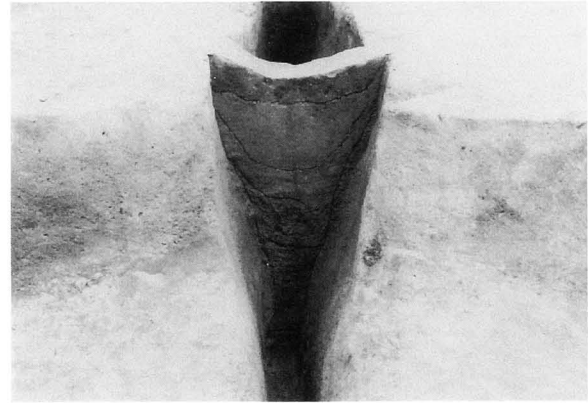
1号炉跡平面 (東から)



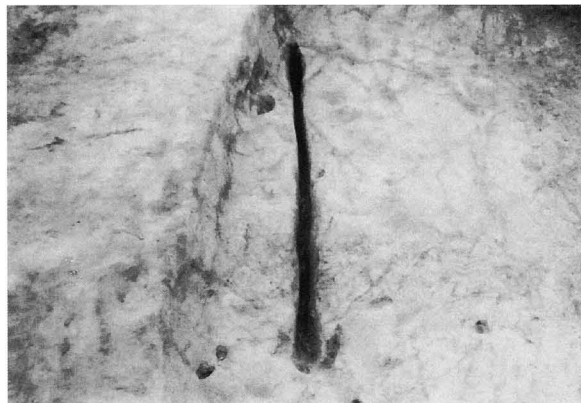
1号炉跡断面 (東から)



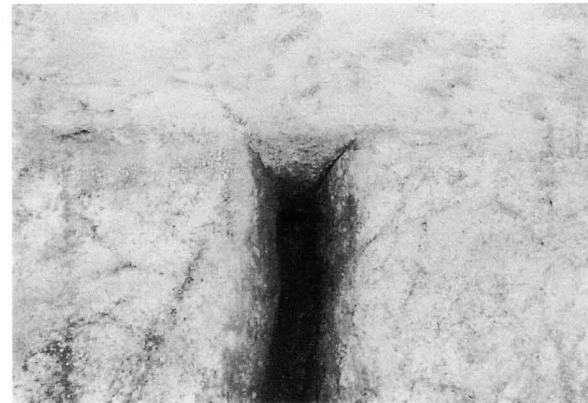
1号陥し穴状遺構完掘 (西から)



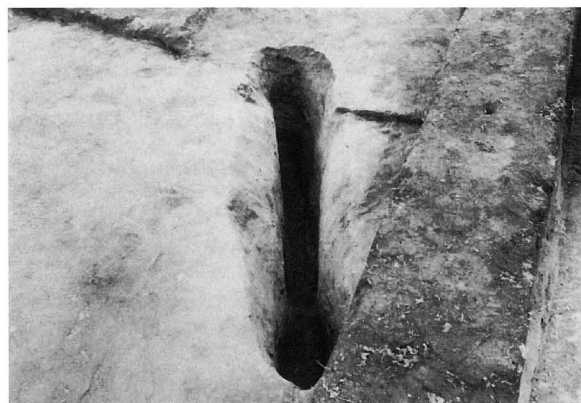
1号陥し穴状遺構断面 (西から)



2号陥し穴状遺構完掘 (東から)



2号陥し穴状遺構断面 (東から)

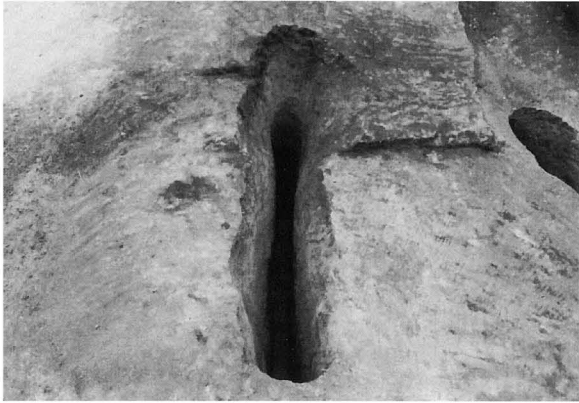


3号陥し穴状遺構完掘 (東から)



3号陥し穴状遺構断面 (東から)

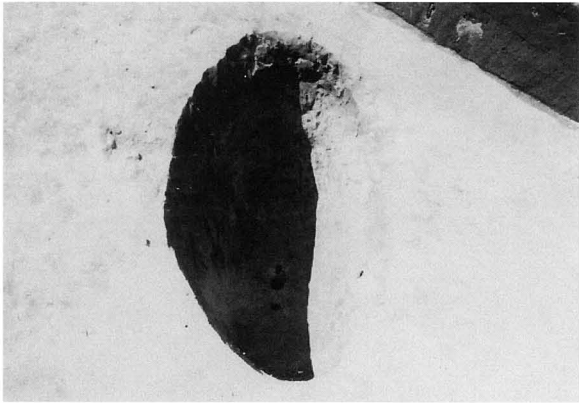
写真図版3 1号炉跡、1～3号陥し穴状遺構



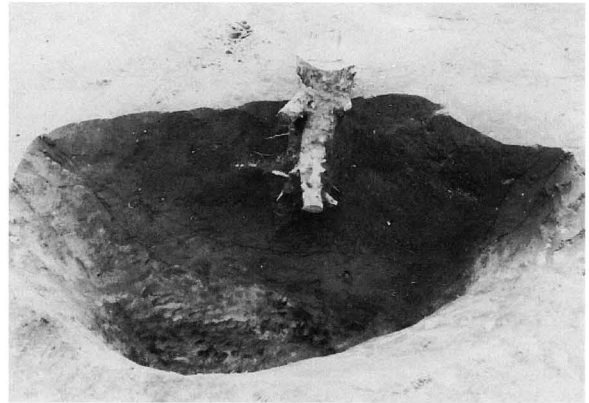
4号陥し穴状遺構完掘（東から）



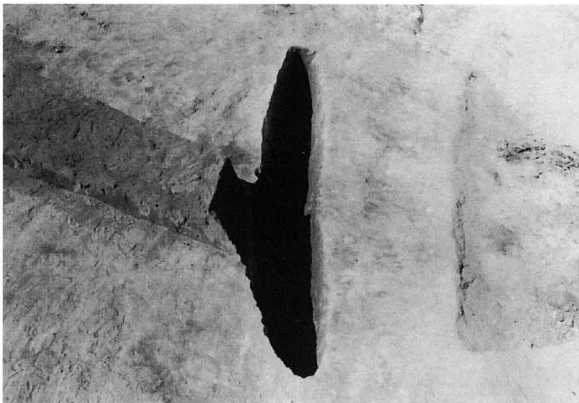
4号陥し穴状遺構断面（東から）



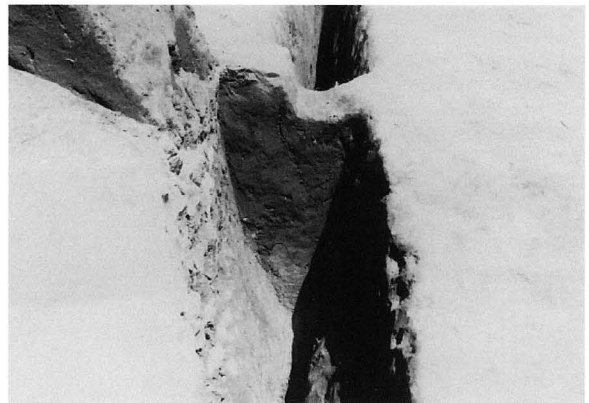
5号陥し穴状遺構完掘（南東から）



5号陥し穴状遺構断面（北東から）



6号陥し穴状遺構完掘（南から）



6号陥し穴状遺構断面（南から）



1号埋没沢断面（南西から）



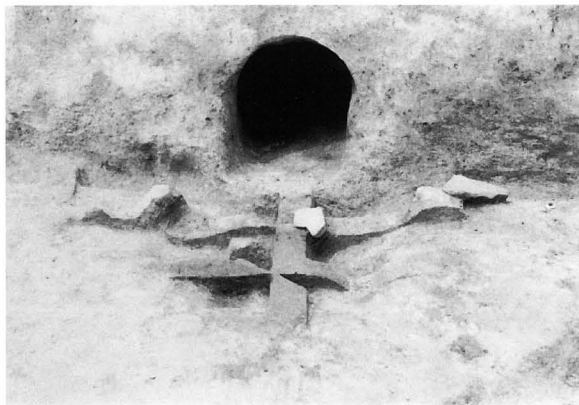
実測作業



平面（東から）



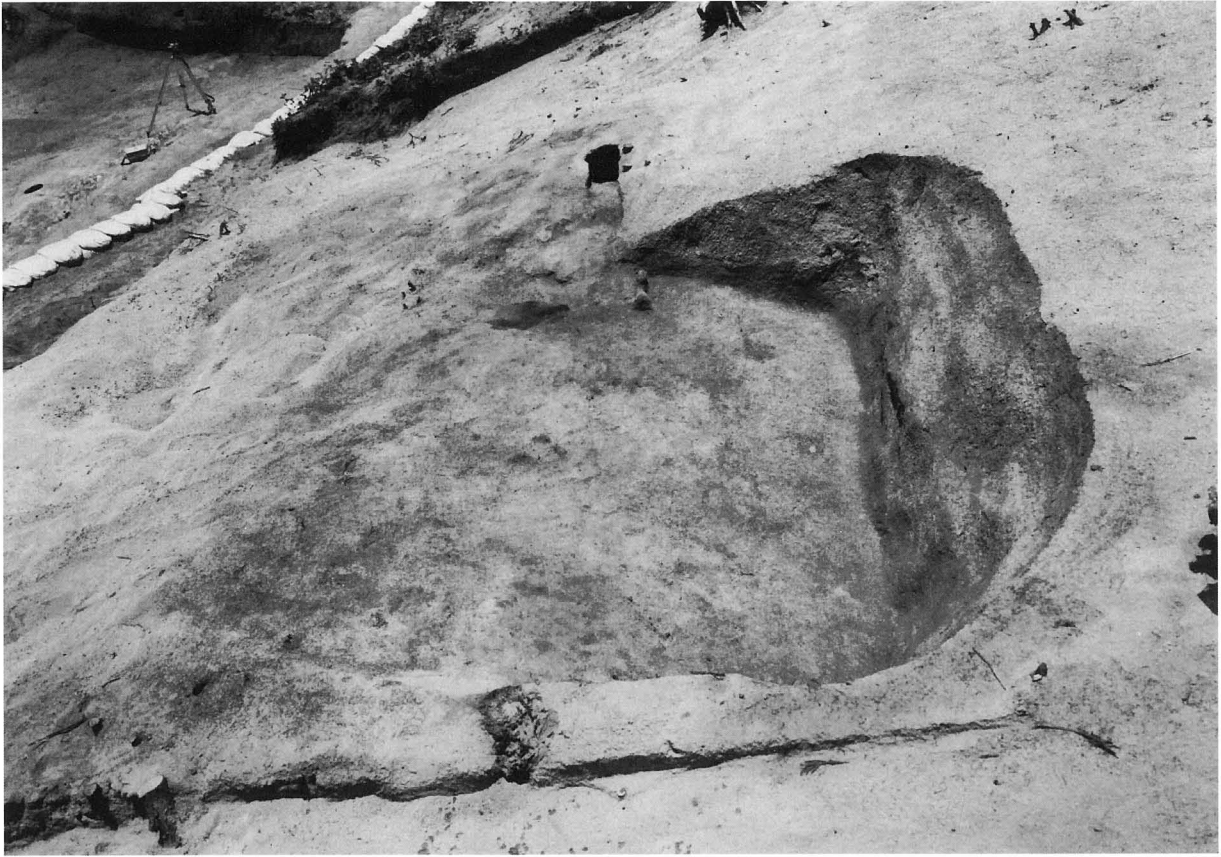
断面（南から）



カマド断面（東から）



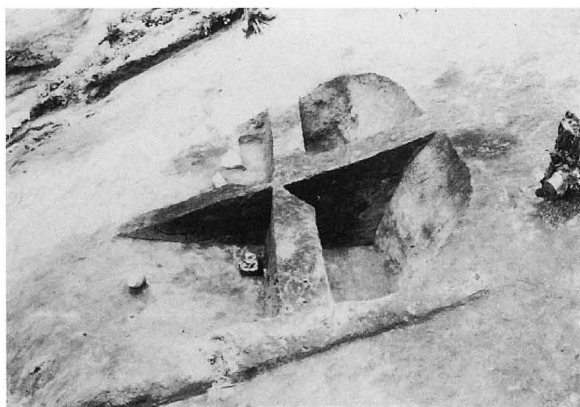
遺物出土状況（西から）



平面（東から）



断面（南から）



断面（東から）



遺物出土状況（東から）



平面（南から）



断面（南から）



カマド平面（南から）



床面礫検出状況（東から）



平面（東から）



カマド断面（東から）



カマド内遺物出土状況（東から）



カマド平面（東から）



床面遺物出土状況（東から）



1号土坑完掘（北から）



1号土坑断面（西から）



2号土坑完掘（東から）



2号土坑断面（西から）



3号土坑完掘（東から）



3号土坑断面（東から）



4号土坑完掘（西から）

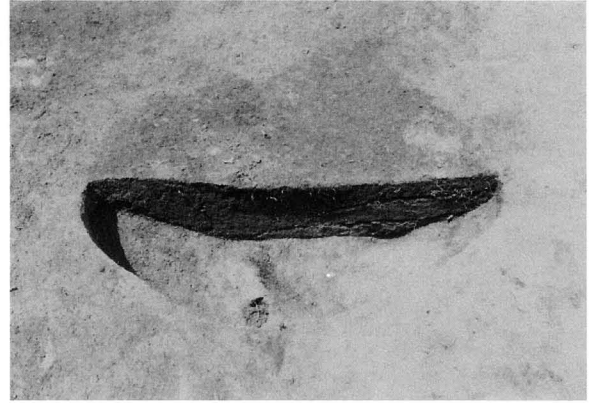


4号土坑断面（西から）

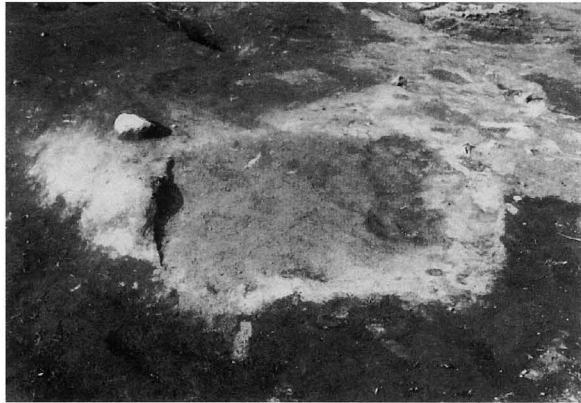
写真図版9 1～4号土坑



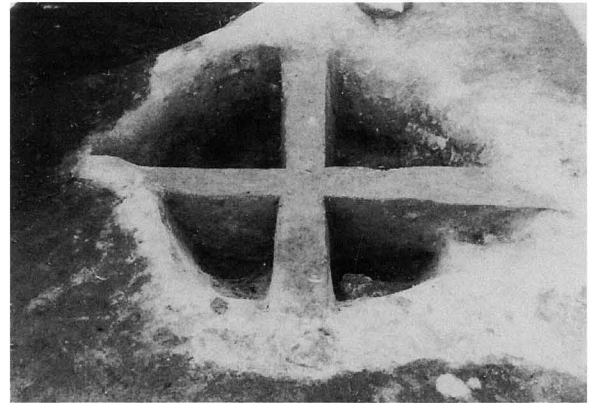
5号土坑完掘（北東から）



5号土坑断面（北東から）



1号焼土遺構検出（南から）



1号焼土遺構断面（南東から）



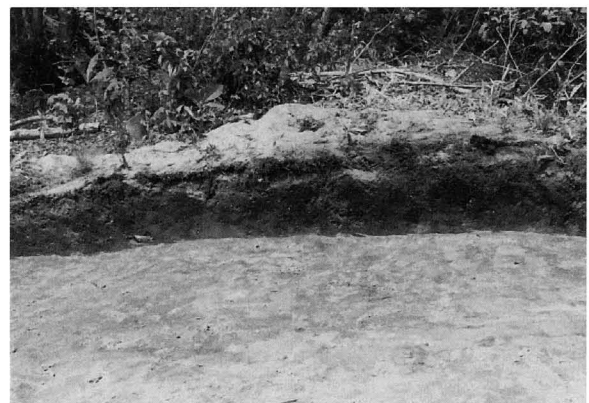
1号道路状遺構検出（南東から）



1号道路状遺構断面①（南西から）



東尾根部を望む（西から）



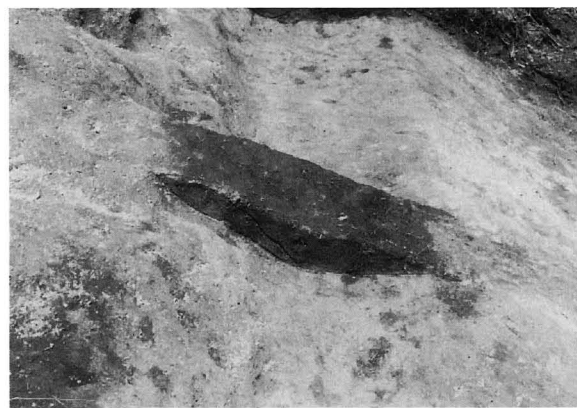
中央尾根部基本層序（南から）



1号道路状遺構完掘（南西から）



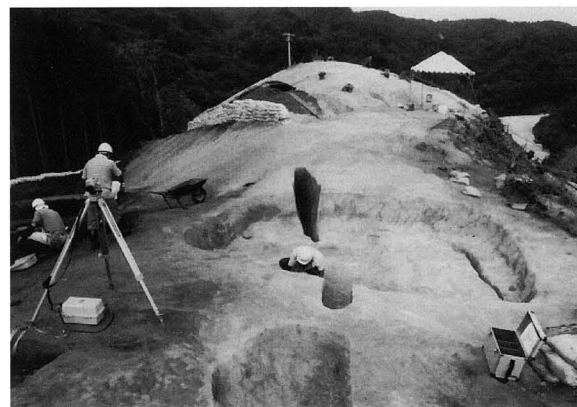
1号道路状遺構断面②（南西から）



1号道路状遺構断面③（南西から）



作業風景①



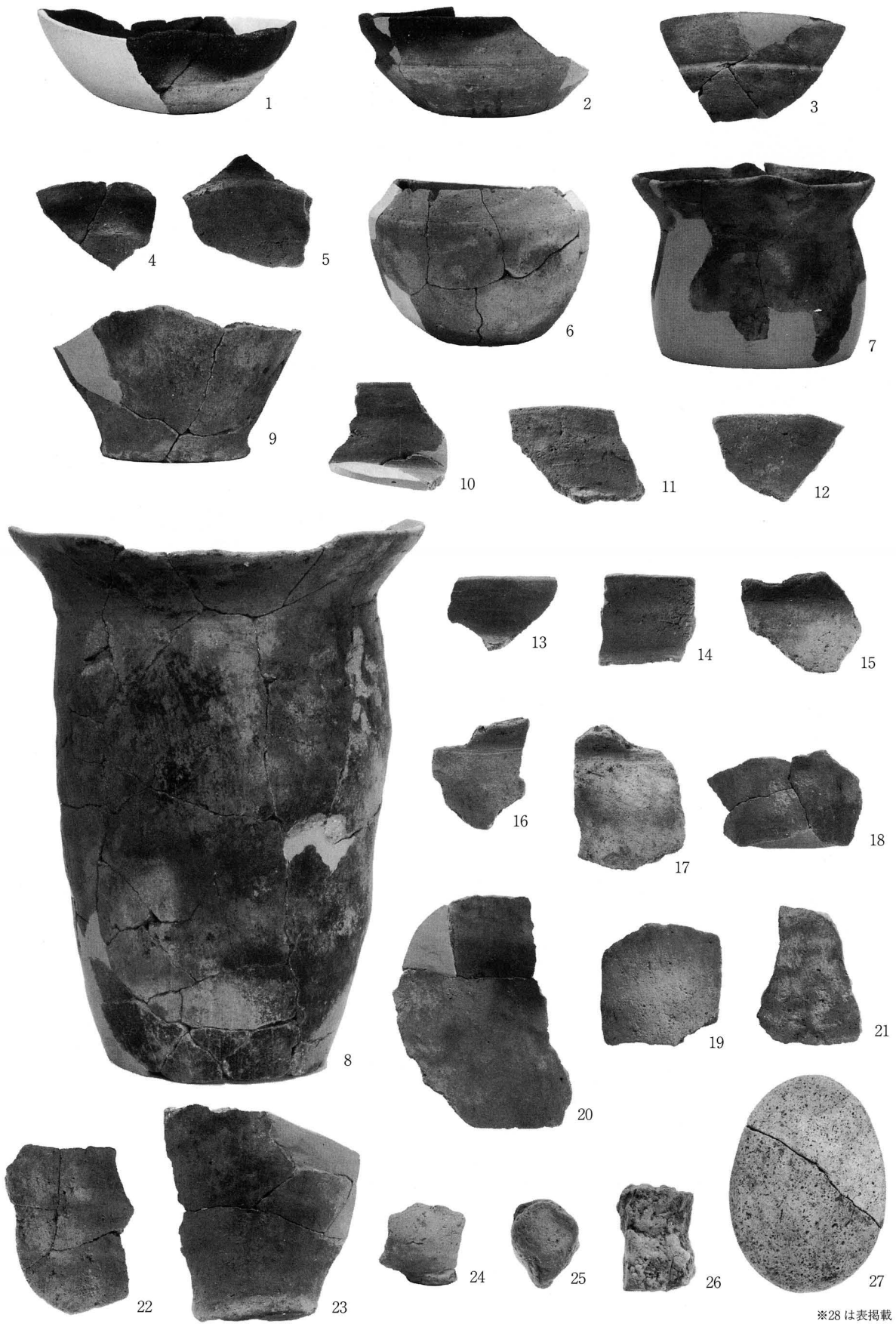
作業風景②



作業風景③

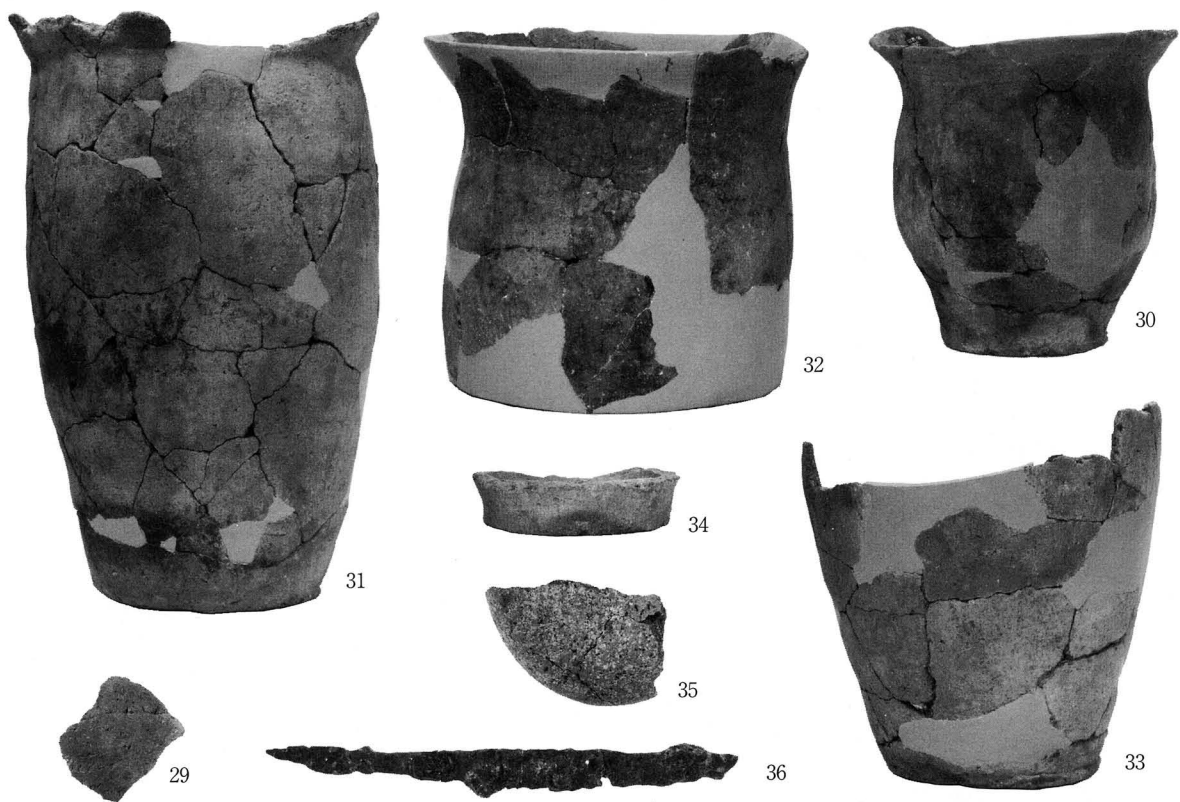


北谷基本層序（南から）



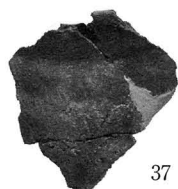
※28は表掲載

写真図版12 1号竪穴住居出土遺物



2号竪穴住居

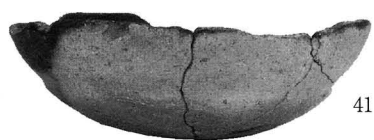
3号竪穴住居



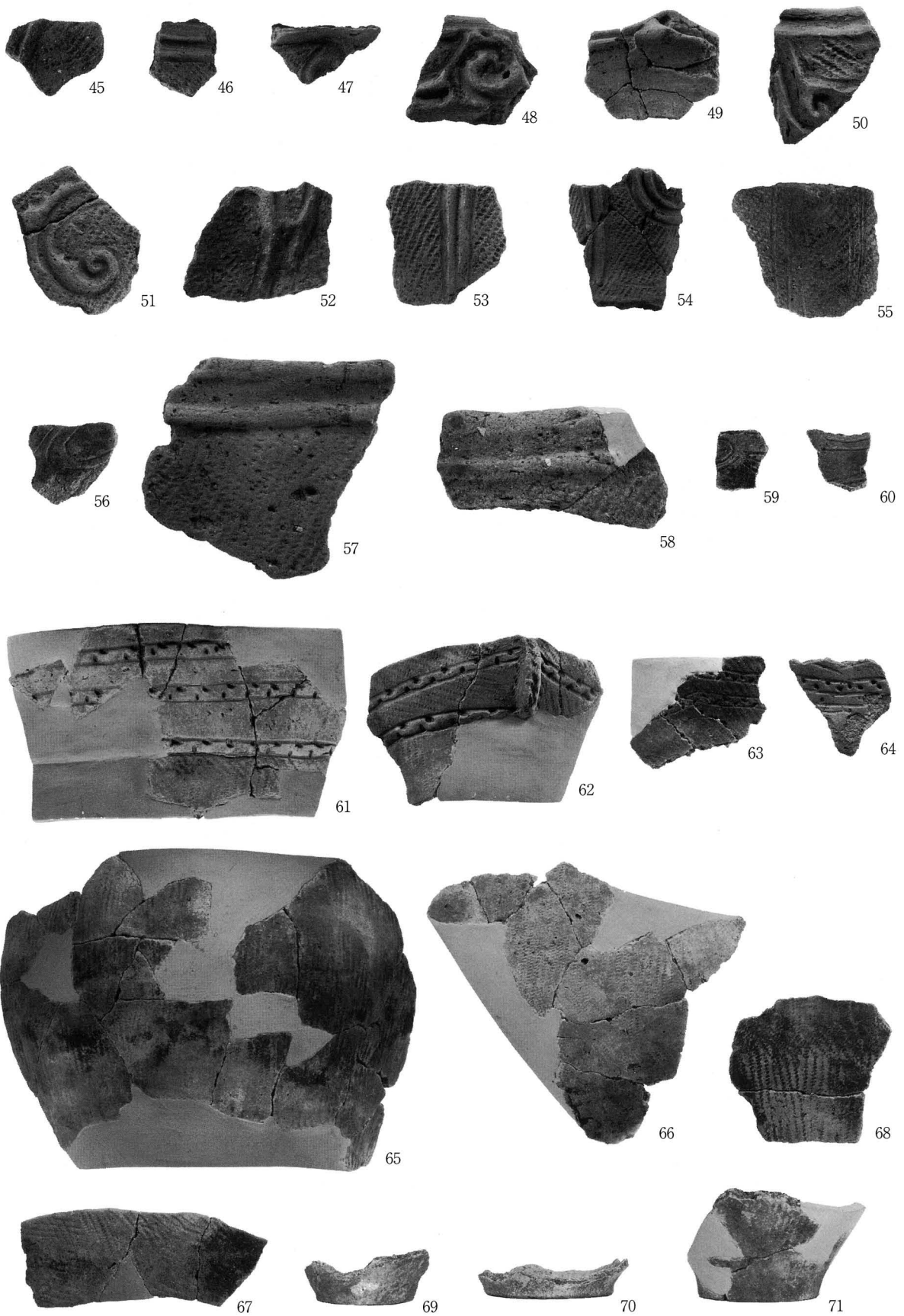
※39は表掲載



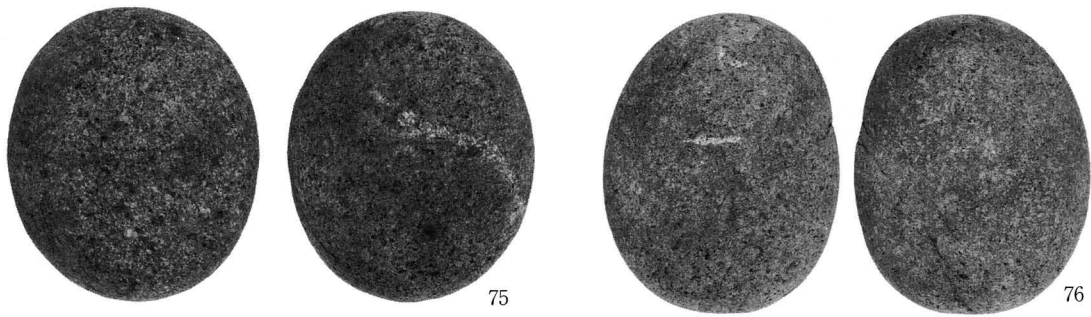
4号竪穴住居



写真図版13 2～4号竪穴住居出土遺物



写真図版14 遺構外出土遺物(1)



写真図版15 遺構外出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	かくれごと8いせきはつつちょうさほうこくしよ							
書名	隠里Ⅷ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第552集							
編著者名	丸山直美・鈴木博之							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2010年2月5日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
かくれごと8いせき 隠里Ⅷ遺跡	いわてけんみやこし 岩手県宮古市 おおあぎまつやまだい 大字松山第8 ちわりちない 地割地内	03202	LG43-2260	39度 37分 26秒	141度 55分 34秒	2008.04.15 ～ 2008.08.31	9,000 m ²	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
隠里Ⅷ遺跡	集落跡	縄文時代	炉跡1基 陥し穴状遺構6基		縄文土器 石器		丘陵尾根部から谷部に営まれた縄文時代から古代を主体とする複合集落。	
		奈良時代	竪穴住居4棟		土師器 須恵器			
		時期不明	焼土1基 土坑5基 道路状遺構1条					
要約	<p>隠里Ⅷ遺跡は縄文から古代にかけての複合遺跡であることが明らかとなった。遺構の分布は調査区東半部に限られ、地形が急峻な西半部からは調査の結果、遺構・遺物共に確認されなかった。縄文時代の遺構は中央尾根の東向き斜面から北谷部にかけて、炉跡・陥し穴状遺構が確認されている。一方で南向きの尾根斜面および調査区中央部の尾根上からは、平安時代の竪穴住居、土坑が検出されている。北谷の旧沢筋からは縄文時代中期中葉の遺物が少量出土しており、該期の小規模な遺物包含層が形成されていることが判明した。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 552 集

隠里Ⅷ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成 22 年 2 月 1 日

発 行 平成 22 年 2 月 5 日

編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地

電話(019) 638-9001

発 行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

〒027-0029 岩手県宮古市藤の川 4 番 1 号

電話(0193) 71-1716

(財)岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号

電話(019) 654-2235

印 刷 第一印刷有限公司

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ四丁目 6-40

電話(019) 646-6001
